水の文化

脱水（みず）まわり

藤森照信「家の中心は水まわり」

中田　誠「集合住宅の近代化」

北川圭子「ダイニングキッチンの誕生」

前田裕子「現代のトイレ志向をつくった技術改革」

杉本節子「町家の暮らし」

藤原智美「家は家族の記憶装置」

水の文化楽習実践取材「守るものと生まれ変わるもの」

山口昌伴「暮らしのプランありき」

古賀邦雄　水の文化書誌「水まわり」

水の文化 February 2009 No. 31

脱 水まわり

原始、水の近くに炉をつくり
屋根を掛けたものが「家」になりました
トイレは屋外、風呂は沐浴か行水

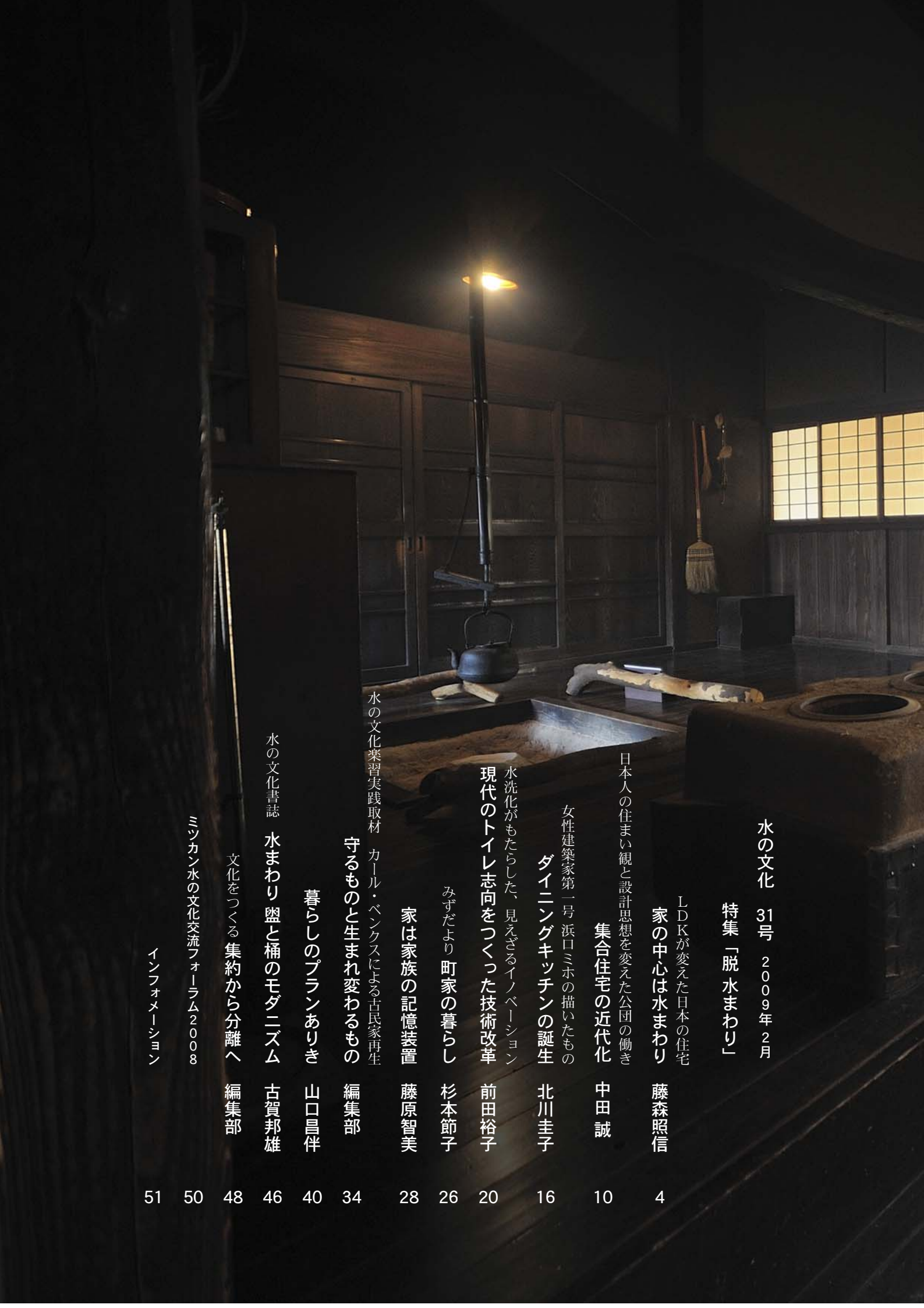
そんな暮らしのスタイルは
加圧水道が敷設されるまで
ほとんど変わることなく続いてきたのです

水道の蛇口が流しの上にきたときから
「家」における水の使われ方が激変しました
竈の火がガスに置き換わったことも
その変容を後押ししました

それからわずか50年余
「家」における、水にかかわるものは
「水まわり」
と総称されるようになっています
ルーツを忘れ
一緒くたになってしまった「水まわり」

もう一度
一つひとつの働き
意味を思い起こすことで
暮らしを豊かにするための
水の周りの新しいスタイルが
生み出せるかもしれません

小金井市にある江戸東京博物館分館の「江戸東京たてもの園」
7haの土地に30近くの歴史的な建物を移築し、復元、保存、展示している。（くわしくは45ページ参照）



水の文化 31号 2009年2月

特集「脱 水まわり」

LDKが変えた日本の住宅
家の中心は水まわり 藤森照信 4

日本人の住まい観と設計思想を変えた公団の働き
集合住宅の近代化 中田誠 10

女性建築家第一号 浜口ミホの描いたもの
ダイニングキッチンの誕生 北川圭子 16

水洗化がもたらした、見えざるイノベーション
現代のトイレ志向をつくった技術改革 前田裕子 20

みずだより 町家の暮らし 杉本節子 26

家は家族の記憶装置 藤原智美 28

水の文化楽習実践取材 カール・ベンクスによる古民家再生
守るものと生まれ変わるもの 編集部 34

暮らしのプランありき 山口昌伴 40

水の文化書誌 水まわり 盥と桶のモダニズム 古賀邦雄 46

文化をつくる 集約から分離へ 編集部 48

ミツカン水の文化交流フォーラム2008 50

インフォメーション 51

LDKが変えた日本の住宅

家の中心は水まわり

女性の地位と台所は、
戦後歩みを一つにしてきた、
という藤森照信さん。

ガスと水道が完備することで、
暗くじめじめして、
低い所に置かれていた台所が
床上に上がってきました。

床の間が男性の象徴だとしたら、
明るくきれいなダイニングキッチン、
輝く一体成型のステンレス流し台は、
まさに近代女性の象徴だったのです。

そして今、
次なるトレンドは
くつろぎの風呂
に移ってきたようです。

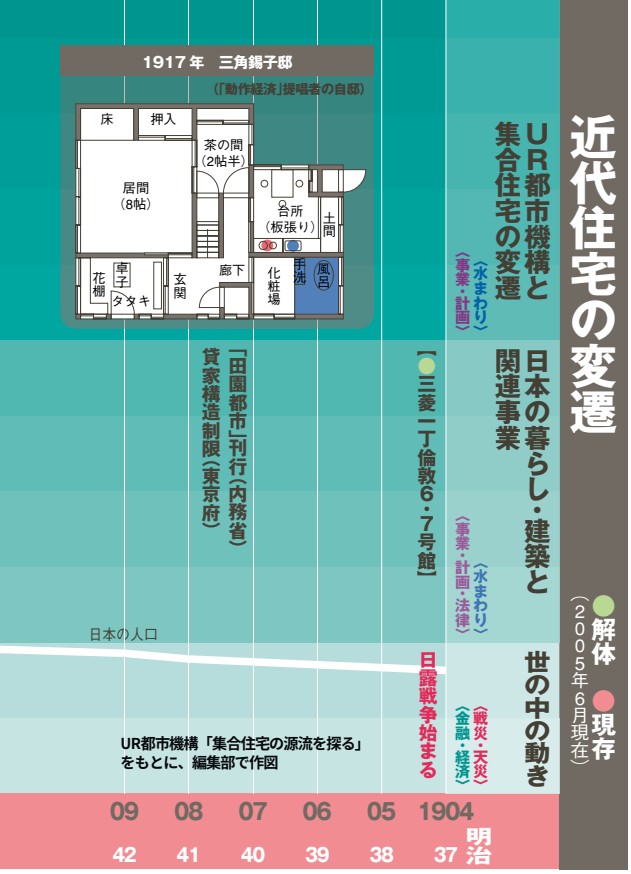
藤森 照信

ふじもり てるのぶ

東京大学生産技術研究所教授
建築史家　建築家　工学博士

1946年長野県生まれ。1971年、東北大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院及び、生産技術研究所で村松貞次郎に師事し、近代日本建築史を研究。

主な著書に『日本の近代建築』（岩波書店 1993）『人類と建築の歴史 』（筑摩書房 2005）ほか。熊本県立農業大学校学生寮（熊本県菊池郡 2000年）で日本建築学会賞作品賞受賞。



台所が床に上がるまで

日本でいうと明治ごろまでの大住宅、イギリスだとビクトリアン様式まで、いわば邸宅といわれる住居では、水まわりを内に入れていない。

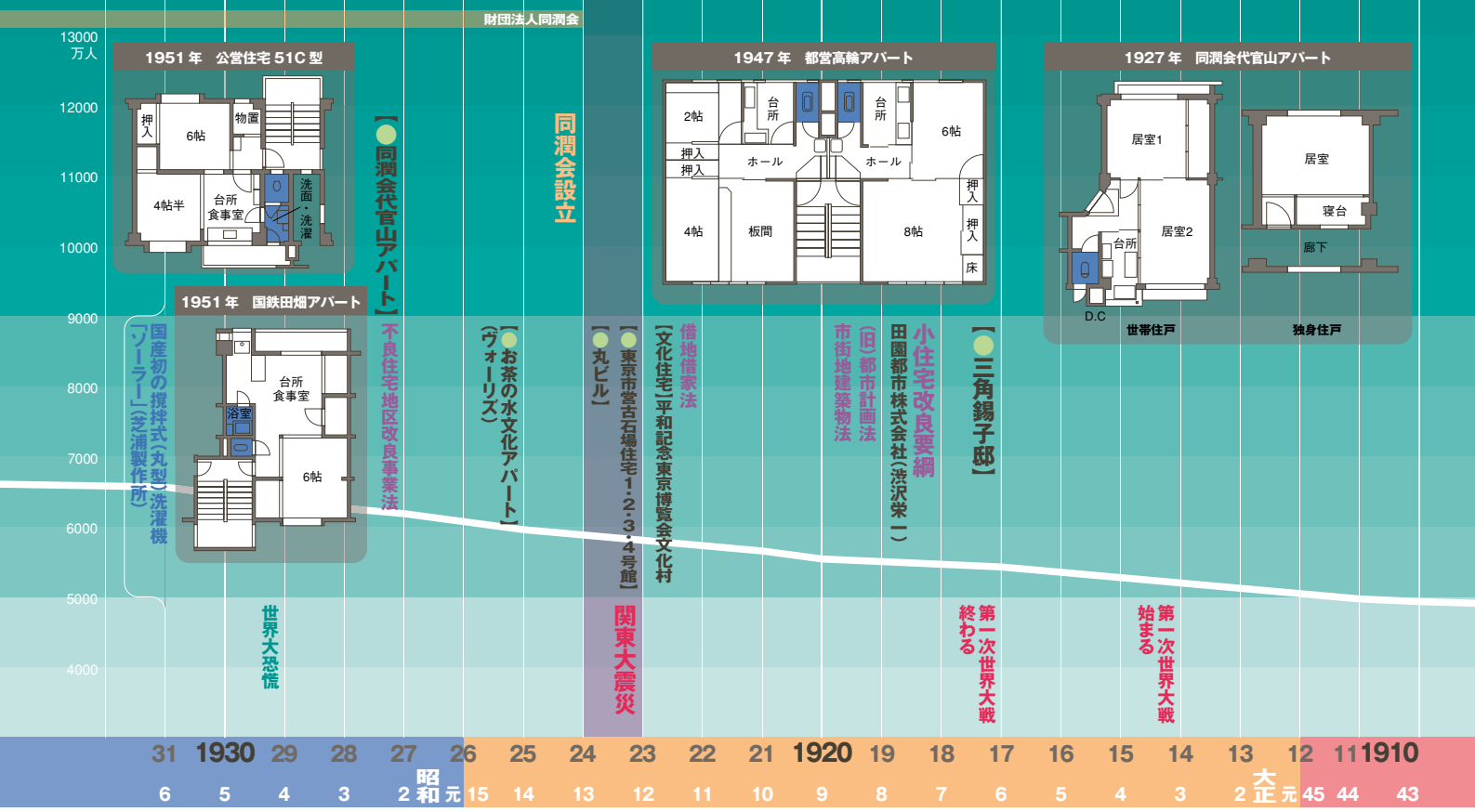
水まわりで一番大きな所は台所です。台所は、臭いと音がお客さんや主人にいかないようにするのがすごく重要だった。だから、主人のいる所とは離す、という大原則がある。できるだけ、遠い所や別棟でやっていた。

お寺に行くと庫裡ってあるでしょ。行事はお堂でやりますが生活部分は庫裡。そこはお客さんが来る所とは少し離れているんですよ。お客さんが来る所には、畳が敷いてあって天井が張ってある。でも庫裡は全然違っていて、土間で梁が露（あらわ）し。それは作業場という意味がある。

これは近代化以前の町家もそうで、通り庭に台所があって、要するに「工場」ということ。もっと言うと、あそこだけは縄文以来の名残を止めている。縄文時代の名残は、ずーっと水まわりに引き継がれていたっていうことですね。

東京でも、関東大震災復興前の時代の住宅を調べると、やっぱり水まわりは土間。大隈重信はヨーロッパ流の立派なキッチンを入れるんだけれども、やはり土間で、天井はがらーんとしている。

では、台所が生活の中に入ってくるようになって、今のような状



態に変わってきたのはいつなのか。

震災復興期には、下町の商家などでは台所が床の上に上がってきて、板敷きですが土間ではなくなっていく。これは、水道の敷設と竈ではなくガスを使い出したのが大きな理由。だって、竈や水瓶だったら、やはり板敷きの上に上げにくいでしょ。

火と水がちゃんとして、どこから汲んできたりしなくても水道管やガス管を捻れば水や火が供給されるようになったことが、縄文時代との決別を促したんです。

ガスと、蛇口を捻って出るようになる鉄管の加圧水道が完備して、初めて台所というのは普通の空間になった。もっと言いますと、女の人の空間が床の上に上がってきて、初めて普通の生活レベルになったということです。

だけれど、相変わらず陽の当たらない、暗い汚い所にあったことは間違いない。これが本格的に変わるのは、やはり戦後です。

LDKの成立

先駆的にはね、大正ぐらいから「こんなことじゃあ、まずい」といって運動はあったんですが、本格的に変わるのは戦後で、まあ日本住宅公団(現・独立行政法人都市再生機構)ですね。

公団は台所の窮状をなんとかしようとして、まず台所と食堂を一緒にするんですね。それで台所が明るい所に出てくるんです。

明るい所に出てくるんだけれど、それにふさわしいものにしなくちゃいけないという大問題が生じてくる。その結果、ステンレスの流し台という新製品がサンウエーブで開発されます。ステンレス流し台で決定的に変わるんです。

公団っていうのは偉大でね、戦前の暮らしっていうのは座敷が重要で、床柱を背に男の人が座る。それは一番良い席だった。南側の庭に面した部屋で、正月とか、お客さんが来たときだけとか、日頃は使っていない場合も多い。座敷は男の象徴だった。

それが戦後、台所と食堂、それとリビングを一緒にする。つまりLDKの成立。今の住宅は、ほとんどこの形式です。それによって、男女の力関係が一気に逆転しちゃった。これは戦後の家族像そのままです。今、自宅の建築費の中で一番単価の高い所は台所。これはかっての床の間の代わりみたいなもんですよ。

同潤会が先鞭を付けたコンクリートの集合住宅という器に、公団が新しい生活のための間取りと設備を組み直して入れた。その立役者はステンレス流し台だった。

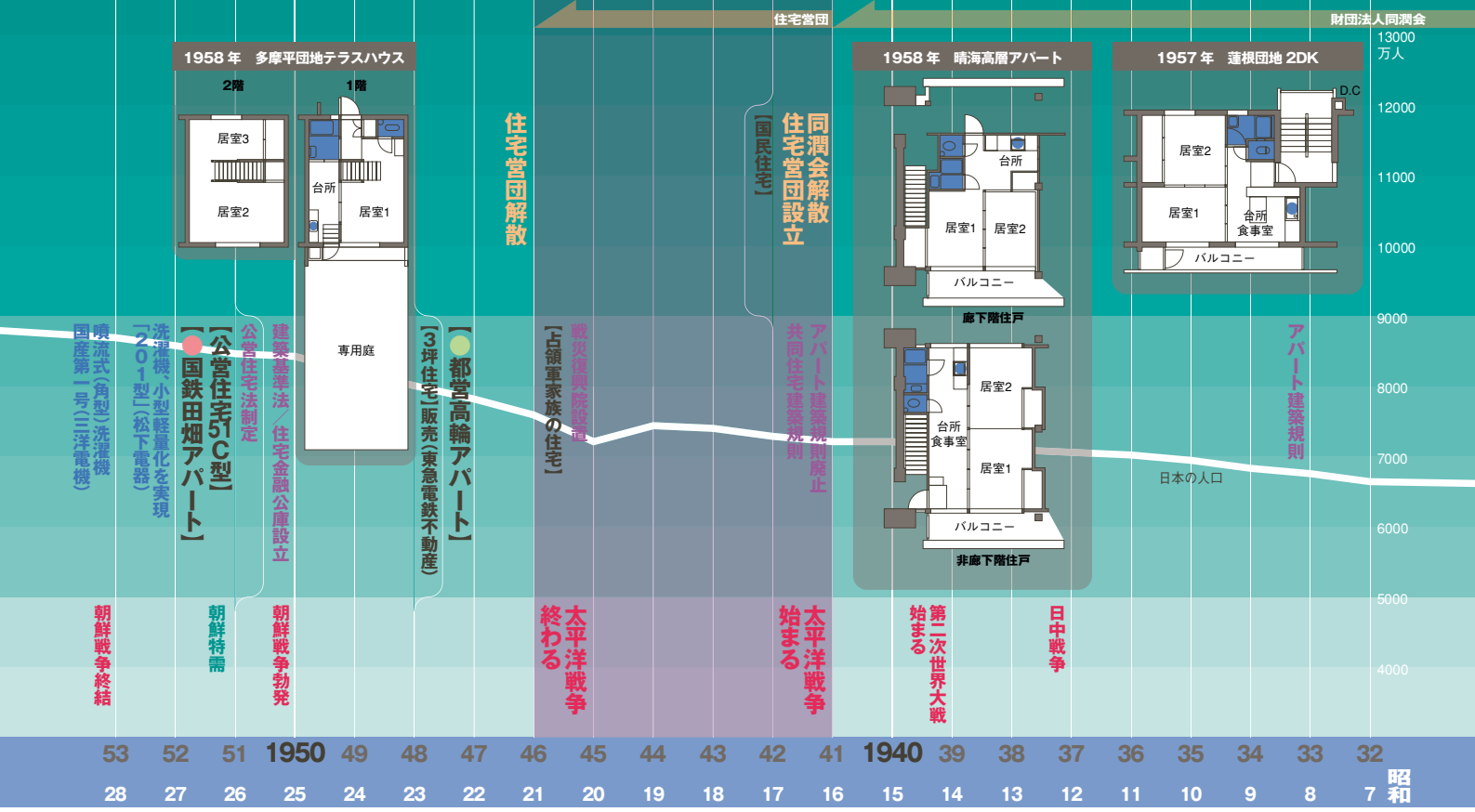
それ以前の人研(じんと)ぎの流し台というのは、何とも汚いものだった。魚の鱗(うろこ)とかがこびりつくとどうしようもない。サンウエーブが開発して、ステンレス流し台は日本の近代住宅に素晴らしい発展をうながした。

不思議ですよね、道具一つで変わるんですから。それまでのセメントの人研ぎの流し台でやっていたら、LDKなんていうものにはならなかったと思いますよ。そういう意味では、日本はLDKの先駆者じゃないかな。

でも結局、仕方なしにやったことなんですよ。狭くて、「どうやって暮らすんだ」と頭を悩ますぐらいの空間でしたから。それぐらい狭い場所は、食事をする場所と寝る場所を分けるのがまず第一だ、と京大の西山夘三先生が「食寝分離論」で言ったんです。

それまではお茶の間といって、昼は卓袱台(ちゃぶ)を出して、夜になると脚を畳んでしまい、布団を敷いて寝るという、食寝同室だった。西山先生は、狭くてもいいから食事室を安定したものとしなさい、という主張を戦前にしていたんです。

それを公団ができたときに、東大の吉武泰水さんや鈴木成文さんなどが参考にしていった。だから、もともとは公団が考えたことではない。



西山夘三
（にしやまうぞう　1911〜1994年）
京都帝国大学建築学科を卒業後、石本喜久治の建築設計事務所に入所。1940年に同潤会研究部を経て、京大教授。食寝分離論を展開し、のちの住宅計画に影響を与えた。

吉武泰水
（よしたけ やすみ　1916〜2005年）
日本の建築計画学の創始者。集合住宅のプロトタイプである「51C型」や、建築における規模計画に用いられる数理・統計手法「あふれ率法（α法）」などで知られる。病院・学校・集合住宅などの研究に業績を残した。

鈴木成文
（すずき しげぶみ　1927年〜）
吉武泰水のもとで、建築計画学を研究する。東京大学工学部教授を経て、神戸芸術工科大学学長。公営住宅の標準型「51C型」の設計に吉武研究室の一員として参加。

ステンレス流し台とバランス型風呂釜とシリンダー錠

よくLDKの発祥は1951年の公営住宅標準設計「51C型」といいますけどね、実はたいして広くないの。同潤会といい勝負。公団と同潤会は組織としてはつながっていませんが、技術者とか人は結構流れて来ているんです。だから、同潤会のことはよく知っている。それで、同潤会と同じものじゃいけないと考えた。

公団がこのままじゃマズいといって、3つ改良点を挙げるんです。1つは一体成型のステンレス流し台。それまでに鑞づけのステンレス流し台をやった経験があった浜口ミホさん（16ページ参照）に指導させて、サンウエーブにやらせた。サンウエーブの柴崎勝男さんは三菱電機の工場の片隅を借りてやっていたらしい。ステンレス板を絞っても絞っても割れるんだよ。それで巣鴨のとげ抜き地蔵のお札を貼って絞ったっていうんだよ。まあ、そういう面白い人なんだ。熱心で。

公団が「台所を明るくしよう」と思った理由は明確で、狭いけれどせめて台所を明るく新しいイメージにしたい、と。

もっと言うと、本城和彦さんがおっしゃっていたのは、新しい所はないんだって言うんだよ、公団をつくったけれど。それで、せめて、せめて流し台だけは良くしようと。それぐらいはできるだろうと。これは技術者側の思い。

本城和彦
（ほんじょう まさひこ　1899〜2002年）ダイニングキッチンという造語の命名者。1938年（昭和13）東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、逓信省営繕課に入省。戦後間もなく戦災復興院に移り、経済復興計画の作業や国土総合開発法の立法に携わる。日本住宅公団在職中には、当時の公営住宅規模（2K：12坪）を超えた公団の規模（2DK）を決定し、住宅内の食寝分離型を進めて居住水準を高めるなど、現在の間取りの原型となるスタイルをつくり上げた。

次に風呂釜。これを東京ガスに開発させた。ところがRCでがっちりつくってあるので、今までみたいに隙間風なんかがないから中毒になる。それでバランス釜を開発した。

最後は鍵。初めて鍵つきにしたのが公団。これを、掘金物店にやらせた。

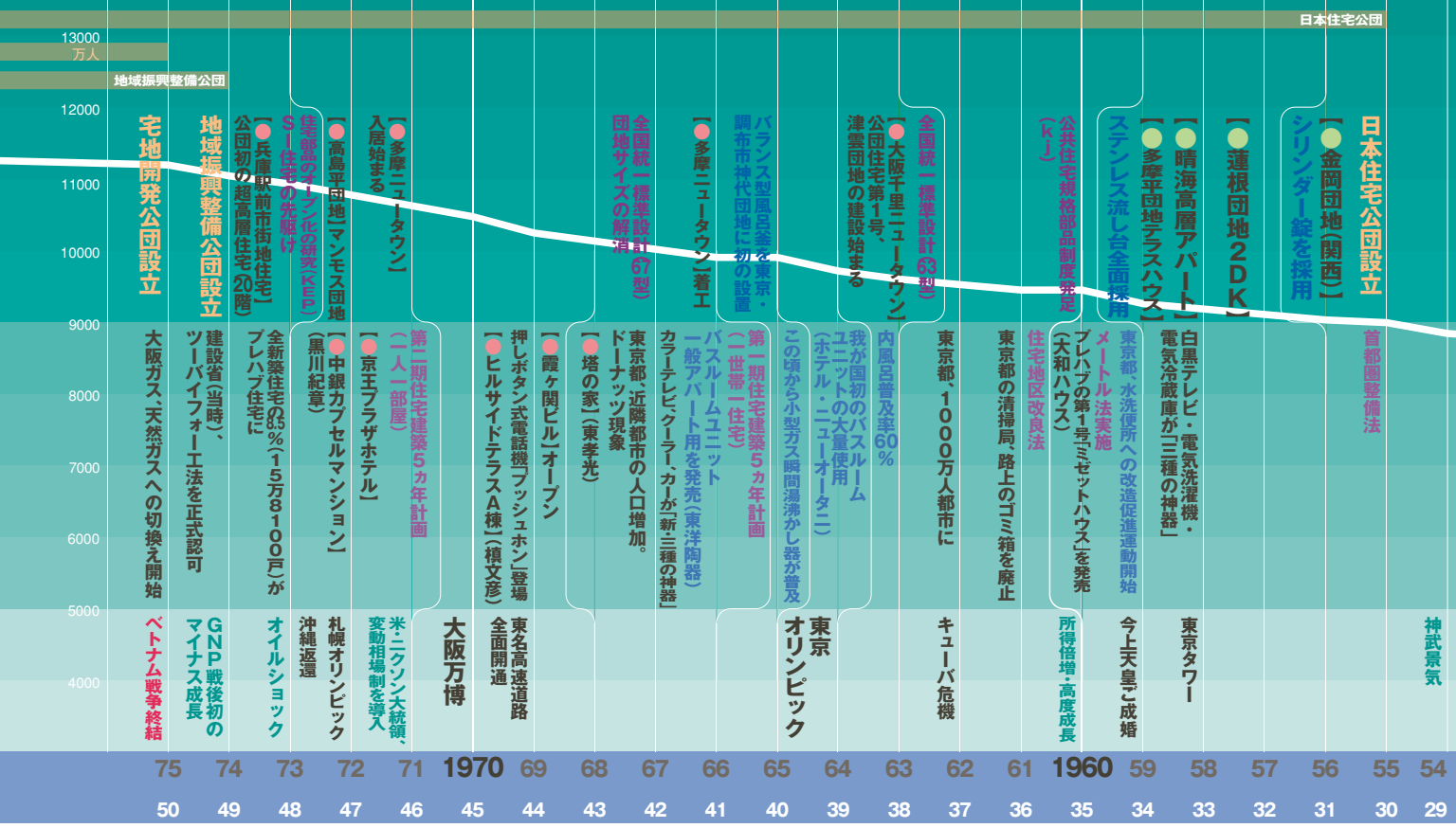
だから流しと風呂と鍵。

もう一つ言うと、公団の初代総裁というのは加納久朗で、東京銀行の前身だった横浜正金銀行ロンドン支店長を長く務めた。だから外国の暮らしに比べ、日本の住宅があまりに悲惨だと。だから加納は、せめて一つぐらい光るところをつくりたい。なんとかしろ、と号令をかけた。とても熱意のある人だった。そんなこともあって、鍵はすぐに実現した。

加納久朗
（かのう ひさあきら　1886〜1963年）
上総一宮藩最後の藩主 加納久宜（かのう ひさよし）の子で横浜正金銀行ロンドン支店長、取締役などを歴任。日本住宅公団の初代総裁（在任1955〜1959）に。1962年（昭和37）千葉県知事に当選するも、在任わずか110日で急逝した。東京湾の大規模埋め立てによる新首都建設を提唱し、この計画の解説書として『新しい首都建設』（1959 時事通信社）を著している。

今見ると、シリンダー錠なんか、ちゃちなもんですよ。ただ、それまでの日本にはネジ式のもっとちゃちな錠前しかなかった。

だから公団は、女性進出とプライバシーの確立に貢献したんですよ。プライバシーっていっても、他の住戸からのプライバシーを鍵で守る程度。中はたいした扉もついていないし、まだ個室化してい



ませんから。個室化していくのは、このあとの段階です。

世界を席巻したLDK

こういう人たちの熱意で公団住宅が完成して、圧倒的にステンレス流し台が評価を受けた。あんなに売れるとは思わなかったらしい。あれで日本の住宅は、一気にLDK、女の城っていう路線になる。

こういうことは世界の住宅史でも珍しいんですよ。最初は貧しい人たちをどうするかというところから始まって、西山さんの食寝分離、そして戦後になって狭いけれどちゃんとした住宅をつくろうよ、というところにつながっていく。それが今では高級マンションでも、だいたいがLDKでしょう。

下から始まっていって上を変えるというのは、大変に珍しい現象です。他の国の場合は、お金持ちはあんなに狭い所に住んでいませんから、日本だけでしょう。

ただ、欧米でも建築家のつくる家はLDKが多いですよ。建築家ってもともと、部屋を区切るのが嫌いだからです。

そういう意味で日本は、LDKというスタイルを富める者も貧しい者も採用するという、珍しいケースなんです。LDKの中心は台所なんです。

立体最小限住宅とコア・システム

当時一世を風靡した立体最小限住宅は、日本では池辺陽さんが中心になってやった。あれはル・コルビュジエのところにいた坂倉準三さんが、モダニズムの人たちがやっていた生活最小限住宅に強く影響されて、持って帰ってきたものが基になっています。

池辺陽（いけべ きよし　1920〜1979年）
建築家。1950年（昭和25）「立体最小限住宅」と呼ばれる住宅を発表し、都市住宅のプロトタイプを機能主義の視点から提案した。また、建築を工業化という方向からとらえた。

坂倉準三（さかくらじゅんぞう　1904〜1969年）
建築家。1929年フランスに渡り、パリ工業大学で学び、引き続きル・コルビュジエに師事する。1937年のパリ万国博覧会・日本館の設計を手がけ、建築競技審査で一等を受賞。モダニズム建築を実践したほか、1959年ル・コルビュジエが基本設計した東京国立西洋美術館を同じく弟子であった前川國男、吉阪隆正とともに担当するなど、ヨーロッパ建築界との架け橋となった。

池辺さんは東大に来る前は坂倉事務所にいた。池辺さんが生活最小限住宅で小さなアイランドキッチンをつくったときには、もちろん一体成型のステンレス流し台じゃありません。一体成型というのは、金型をつくるのにものすごくお金がかかるから、何千何万という数をこなすものでないと使えないんです。

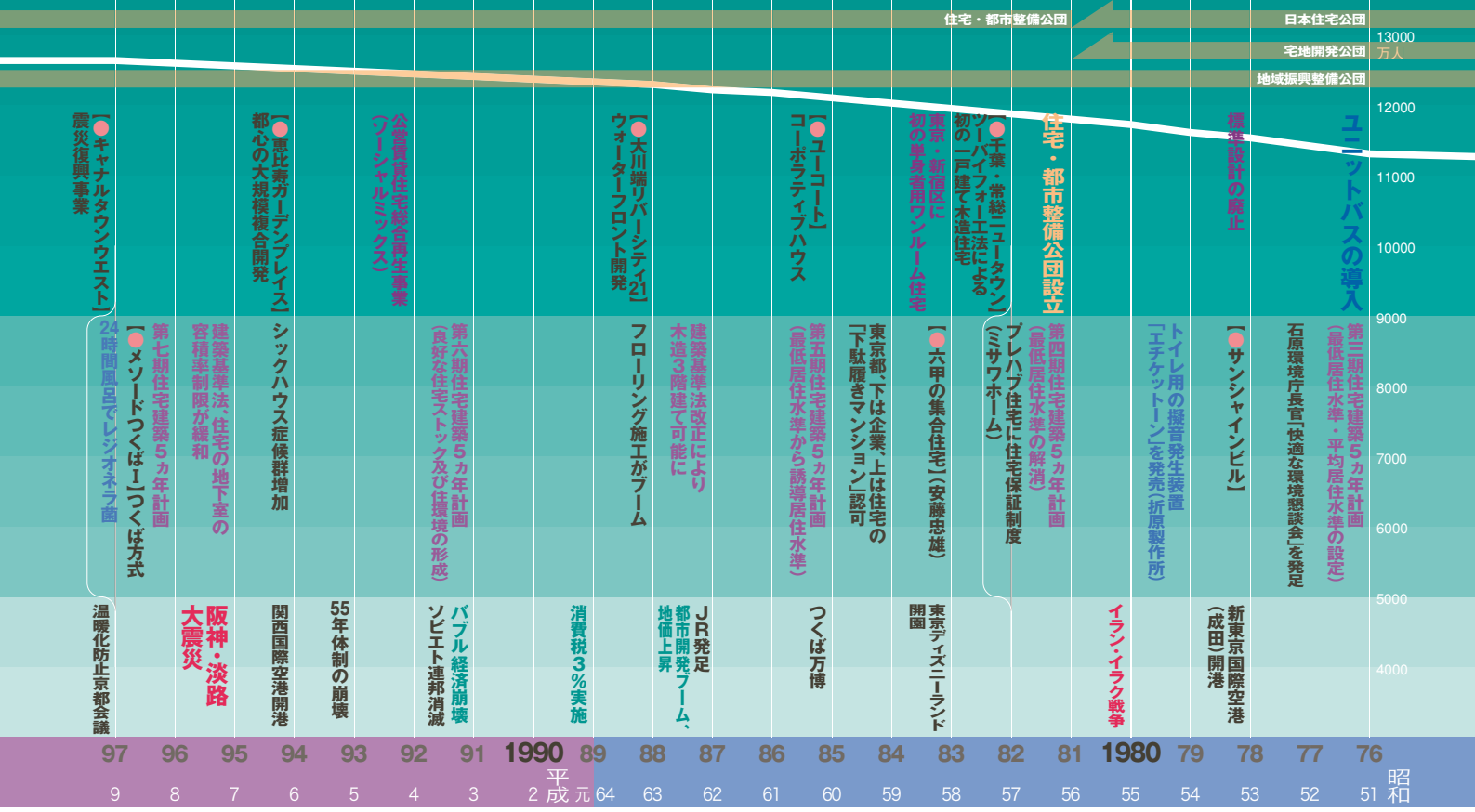
最小限住宅で台所を独立してつくるのは大変なんです。それで真ん中に置く。

もっというとね、配管を真ん中に置くっていう考え。ガス、水道、電気の配管をすべて真ん中に持ってくる。これはコアっていって、オフィスビルのつくり方なんだ。一番でかい配管がエレベーター。人間の乗り物というよりも、人間を流しているんだね。だって、みんなあれに入るとシーンとして黙っちゃうでしょう。ぎっちり立って流れてる状態なんです。

住宅政策

普通は行政が政策を出せば、儲かって利益が出る業界が現れ、業界利益を擁護し官庁と結託する族議員というのが誕生する。でも住宅の族議員なんて、聞いたこともない。建設省（当時）がどんなに素晴らしい住宅政策を出しても、それが材料や物品をコントロールする通産省（当時）の産業政策として機能するから、住宅政策立案者を擁護してくれるような業界も議員も現れなかった。

戦後日本は、官僚と業界と族議員が緊密に結びついて動く、いわゆる「鉄の三角形」が引っ張ってきた。全部の産業がそうやって回



わりながら、業績を伸ばしていったんだから、官僚・議員と業界が結びつかなかったというのは、住宅産業にとって最大のネックです。

だから、政策としてちゃんと住宅をとらえようと考える政治家も官僚も出てこなかった。このことは早い段階からわかっていた。唯一やろうとしたのが同潤会だったんですが、内務省内のこの方面の担当だった池田宏という人は貴族院に「お前のやっていることは社会主義だ」といって潰されてしまいます。

土地と住宅を公共財としてみないのも、建て替えサイクルがヨーロッパの国と比べて極端に短いというのも、こういうところからきているんです。先進国でこんな考え方なのは、日本ぐらいですね。

スクラップ&ビルドでどんどん建て替えてもらえると、建設業は喜ぶ。ただ、そこには役人が天下るとか、政治家がバックアップしてもらえる団体があるわけではない。だから、やっぱりバラバラに存在して、回っていない。

住宅の所管官庁は、もともとは内務省の社会局です。内務省にあったら、話が別だったでしょうね。内務省は警察と地方自治が中心なんで、地方政策で公共住宅をつくりなさい、という話になっていたでしょうね。

政策に期待できないとすると、民間はどうか。売れ残った不良資産をどうにかするために、マーケットベースで売れる方策を努力して開発する可能性はあるのか。僕はないと思うね。民間のデベロッパーは公団の後追い。何も民間らしいものは生み出していません。

まず、これはアメリカで言われ始めるんだけれど、ある時期から建築レベルが滅茶苦茶落ちてくるんですよ。それはデベロッパーが仕事をコントロールするようになったから。デベロッパーが興味を持つのは、投資とどれだけ収益が上がったかということだけで、住宅の質とかつくりには興味がないんだ。

バブル崩壊の引き金

僕が聞いた話ではね、本当かどうかはわからないけれど、世界のバブル崩壊というのは必ず不動産・住宅と結びついているという。最初のバブル崩壊の引き金はパリの大改造計画だったそうです。あれで住宅をバアーッとつくってひどいことになったらしい。

パリ大改造計画
19世紀、セーヌ県知事のジョルジュ・オスマン（1809〜1891年）が取り組んだフランス最大の都市整備事業。ナポレオン3世の構想に沿って行なわれた。

工業とか産業とかでは、なかなかバブル崩壊までいかないらしい。だって、いらないのに工場をいっぱいつくって倒産するヤツはいない。どんな製品だって在庫がいっぱいになったら銀行がきて、「もうつくるな」って言うでしょう。

住宅って、値段が高い割には決定権は個人にあるから、事態がわかるまでにタイムラグがある。工場に製品が並んでいればすぐにわかって、誰かがやめろって言えるけれど、住宅はやめろって言うまでに時間がかかる。それに住宅は政府が保護しますから、借金がしやすい。あとのことを考えずに、やってみたらダメだったという先送り。それが今回のアメリカのサブプライムローン問題につながっているんでしょう。

こういう危うい面がある住宅だから、日本もちゃんとした政策づくりに取り組んでいく必要があると思いますよ。

男も女も水まわり

僕が家を設計するとき、水まわりは普通にしますよ。特別なことはしない。

公団がLDKを考えたときに、水まわりはもう成熟しちゃったと思う。ほかにやりようがないもの。決定的に変えて欲しいという要求

コラム：狭小住宅考

都市への人口流入によるスラム形成や、震災や戦災による住宅の焼失は、「雨露しのげる場所さえあれば」というほどの住宅難を引き起こす。日本の住宅の狭小さは、こうした住宅難に素早く対応することを急ぐあまり、質や広さを後まわしにしたことから始まっている。

しかし、こうした貧しさ故の狭さではなく、思想やモダニズムの見地から狭さに挑戦した人たちがいた。水まわり空間が一体化していく源は、そうした建築家たちの手法にも求められるのかもしれない。

明治期の住宅改良運動

アメリカ・シアトルで雑貨屋「橋口商店」を経営していた橋口信助は、1909年（明治42）に帰国後、東京の洋家具発祥の地である芝で「あめりか屋」を開業する。ツーバイフォー式の輸入住宅と建築材料や家具の販売を始めたのだ。

部屋の独立性の低さなどから、伝統的な住まいを改良する必要性を訴える声が上がっていた時代に、橋口が提案する「中廊下のある住まい」は中流層の支持を受け、橋口は家政学者 三角錫子らと住宅改良会を立ち上げている。

三角は、アメリカの自動車メーカー フォード社の生産技術システムを家事労働に取り入れて、科学的管理下の家事労働を提唱した人物。自邸は、その「動作経済」概念を体現するものとして、橋口が設計した。当時の中流家庭では女中がいることが珍しくなかったが、三角は主婦が一人で家事をこなすために、思い切って台所空間を小さくつくっている。

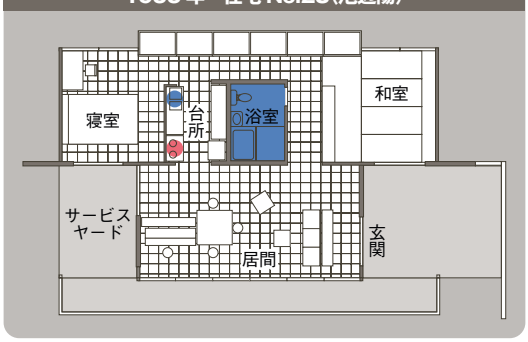
＊「三角錫子邸」1917年（橋口信助）間取りは年表を参照

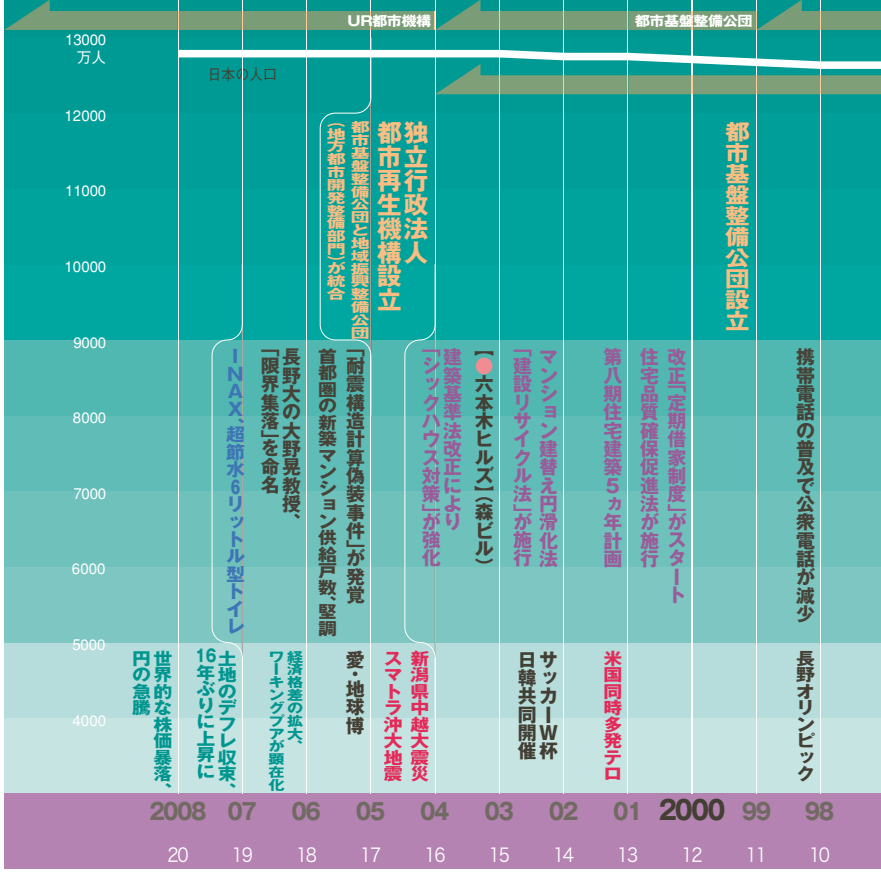
コア・システム

椅子式・水洗トイレ・改良台所といった近代的な生活に必要な最小限の要素を確保するために、建築費のバランスをとりつつ、いかに一般住宅の価格に近づけるかを、池辺陽は平面・断面のデザインで追求した建築家だ。

当時欧米で流行り始めたコア・システムの概念を、「プランニング・コア（平面）」「コンストラクション・コア（構造）」「エキップメント・コア（設備）」と名づけ、建築の構成原理として理論化。水平方向（間取り）だけでなく、最小の容積内に良質で最大の生活空間をつくろうと試みた。藤森さんが言うように、狭さ故に設備は中央にまとめられる傾向にあり、そのことが水まわり空間の集中を促したといえよう。

1955年　住宅 No.28（池辺陽）





が出ないぐらい、もう50年ぐらい前に成熟している。

公団とか池辺さんたちのコアシステムとか、いろいろ出尽くしているでしょ。それで充分って感じがします。台所について主張がある建築家っていうのは、宮脇檀さんが最後なんじゃないのかな。

宮脇檀
（みやわきまゆみ　1936〜1998年）
建築家、エッセイスト。洋画家の宮脇晴とアップリケ作家の宮脇綾子の子息。東京芸術大学で吉村順三に師事し、集落調査などを経験。工学に軸足を起きがちな日本の建築を、美や芸術の視点から見直すことを提唱した。打放しコンクリートの箱型構造と木の架構を組み合わせたボックスシリーズがあり、「松川ボックス」は1979年に第31回日本建築学会賞作品賞を受賞。著書も多く、家族のあり方まで踏み込んで書いた『男と女の家』（新潮社1998）は絶筆となった。

台所の水まわりというのは、女性の力が向上するのと同じように歩んでくるわけです。悲惨な江戸時代から、今や一番単価の高い所になるように。

問題は、じゃあ男はどうするんだっていうことですよ。ひたすら、落ちていますから。まあ、実際家にいても、たいして役に立たないし。いや、昔は役に立ったんですよ、薪を割るとか。今はほとんどそういう役割はないからねえ。

男の人は居場所もないし、お金をかけることもできない。例えばね、庭に松を植えない。松は男の象徴のような木だった。ガーデニングなんてブームになっているけれど、名もない草を植えて、幼稚園のお遊戯室みたいな状態になっている。あらゆる所で、男はダメなんだ。

最近住宅機器メーカーさんと話していて面白いと思ったのは、住宅内での男の居場所として、お風呂が充実してきているらしい。勤めから帰って、まあ女の人も今は働いてる人も多いから帰ってくるんだけれど、お風呂に入るぐらいしか楽しみがない。一時、「書斎をつくろう」という動きもあったんだけれど、結局物置にしかならなかったからねえ。お風呂は1㎡増やすだけでも相当違いますから。

こうなると、少しは男の立つ瀬もあるんじゃないかと。寂しいけどね。ほかにないからなあ。お父さんだけが使う空間にお金をかけようとすると、ほかの家族に却下されちゃう。風呂だって、結局男だけじゃなく家族みんなで使う場所なんだけれど、そこには触れないようにして男の城である、と。寂しいけど、面白いですよね。水まわりが結局、男と女の双方の要望を満たすものになっているんだ。

風呂を屋上につくる人とか、露天風呂にする人とかもいるな。風呂は、台所と同じぐらい広く！そうなると、どっちが南向きを取るか、熾烈な争いになるかもしれませんね。

集合住宅の近代化

日本人の住まい観と設計思想を変えた公団の働き

東京八王子にあるUR都市機構の敷地内には、近代日本の集合住宅の歴史を俯瞰できるよう、主だった間取りを復元、保存してある。

1927年（昭和2）に建てられた同潤会代官山アパートの世帯向け住戸。コンクリート三和土（たたき）の床に簀の子（すのこ）が敷かれた台所には、キャスター付きの炭箱が。ガスがくるようになっても、練炭や炭団（たどん）を七輪や行火（あんか）で使ったり、火鉢があったりと、まだまだ炭を使う暮らしだった。トイレは和式ながら既に水洗に。

中田 誠

なかた まこと

独立行政法人都市再生機構

住まい技術研究チームリーダー

住宅難を解消し、戦後日本の新しい暮らしを牽引してきた旧・日本住宅公団。
集合住宅の水まわりも、当初は湿式で手間も時間もかかる工法でした。
人研ぎ流しが一体型ステンレス流し台に、
木製風呂桶がバランス型風呂釜へ、さらにバスユニットに、
やがて給湯設備も一元化されました。
住宅の工業化に成功し、技術的制約を克服した公団の
過去の歴史だけではなく、ＵＲ都市機構の次なるステップもうかがいました。

水まわりは建築用語？

みなさんから「水まわり」についてお話をうかがいたい、と言われましたときに、改めて水まわりだけに焦点を当てて考えたことがなかったものですから、不意をつかれた感じが致しました。

また、水回りとか水廻りというと設計図面の〇〇回りを連想してしまいますので、居住文化を含めて広義の言葉として、平仮名の「水まわり」を使うのが適切ではないかと思います。

ちなみに水に関係があるのでお話ししますが、独立行政法人都市再生機構（以下　ＵＲ都市機構）の前

身である日本住宅公団設立当初には、井戸を水道に利用して、公団が水道事業を実施していた団地が20数カ所ありました。鑿井（さくせい）団地と呼ばれていました。

同様に、汚水処理場を持っていた団地もあって、現在でも30団地近くが稼働中です。水洗トイレを標準装備したために、郊外型の団地で下水道が完備されていなかったところでは公団自らが汚水処理をする必要があったのです。

さて、水まわりのいうのは、住戸の中の台所とか、トイレとか、洗面、浴室を指すのですが、建築の用語だろう、と思い、集合住宅の歴史をたどってみました。すると、木造賃貸集合住宅ではせいぜい流し程度の台所が、同潤会アパートでは台所に加え便所がつきます。当時の記録を見ると、同潤会アパートのことを「簡易集合住宅」と呼んでおり、そこには浴室がついてこそ、本物の近代集合住宅だよ、という気持ちが込められていたようです。日本の国力では、それが精一杯だったのではないかと思います。

それで、本当の意味で水まわり全般が整ってくるのは、戦後になってからです。1950年（昭和25）公営住宅で51C型で洗面台と簡易シャワー室がつきました。シャワーといっても水でしょう。ただバルコニーと連続しているところを見ると、洗濯室を意識していたように思います。

当時は銭湯での入浴が想定されていたので、それで充分だったのでしょう。ですから、実際にここでシャワーを浴びるということは、なかったのではないでしょうか。

1955年（昭和30）設立の日本住宅公団で初めて、今で言う水まわり、「台所」＋「便所」＋「洗面」＋「浴室」が登場します。

ここでやっと「水まわり」と呼ぶべき素材がそろったのではないでしょうか。私見ですが、台所と便所だけでは「水まわり」と呼ぶには、少し弱いかなという思いがしますので。

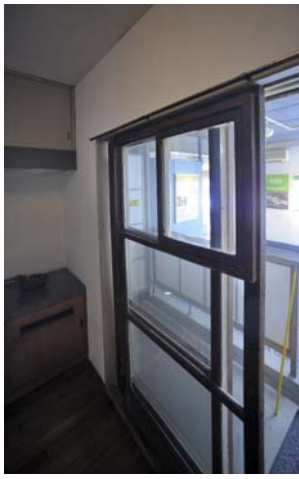
建築図面で納まりの詳細を指すときに「押し入れまわり」とか「洗面所まわり」という呼び方は割と古くからされていました。

しかし日本住宅公団設立当初には、まだ「水まわり」という言葉の用例は見当たりません。

バスユニットで水まわりが自由度を獲得

ちなみに公団設立当初は、洗濯機の設置は意識されていませんでした。徐々に需要が高まり、給水管を工夫して洗面所に無理矢理置くとか、排水は浴室にホースで流

1957年（昭和21）に建てられたRC造り3、4階建ての蓮根団地。ダイニングで食事をする生活を促すために、テーブルが備えつけられた。流しはまだ人研ぎのもの。DK=ダイニングキッチンは南向きに配置された。脇のガラス戸は、上段だけでも開閉できるようにつくられている。風呂桶は木製。



すというやり方で、居住者がなんとか置き場をつくるようになりました。早い事例では1967年（昭和42）ごろから分譲住宅を中心に洗濯機置き場の防水パンがつき始めたようです。賃貸物件まで含めて、防水パンが統一規格になったのは1975年（昭和50）です。

それと期を同じくして、浴室がユニットバスに変わっていきます。大阪万博のころにホテルブームがあって、ユニットバスが開発普及したという経緯があるからです。

そして、そのユニットに給湯をどうするか。それまでの住宅では、風呂には釜を直接つけて、湯は浴室で沸かし、台所は別に瞬間湯沸かし器、というように火元が二つあったのです。ユニットバスでは火を燃やせないことから、給湯のセントラル化が起こります。

ここで大きく水まわりが変化しました。また、コンクリートとかタイルとか湿式で行なっていたそれまでの浴室仕上げ工事では、排水管は下の階に通していました。

それがバスユニットになると、配水管は住戸の床スラブの上を通すこととなり、上下階で浴室位置をずらすことができるようになります。これで上下階の縛りが断ち切られて、自由度を獲得した。同じ間取りでなくてもよくなったわけです。

このことによって、団地型の標準設計で何十棟も同じ間取りというのではなく、それぞれの住宅で違いを出せるようになっていくんですね。

標準設計の廃止

ちょうどこのころ、戦後の住宅難というのが一段落しましてね、公団住宅に空き部屋が目立つようになる時期と重なるんです。

そういう中で「売れるもの」「選ばれるもの」をつくらなくてはならない、という転換が起きました。ですからバスユニットの採用により、間取りの自由度が高まるということは商品性を高めることに貢献したわけです。

ここで、集合住宅の「水まわり」は第二段階に達したと、私は考えています。

こうした背景の中で、1978年（昭和53）に標準設計が廃止されます。もちろんバスユニットを組み込んだ標準設計は現れることがなかったのです。

ただ、標準設計をなくして、まったく0からすべてを設計するというのではありません。規範になるモデルを設定して参考にする、汎用設計というものが標準設計に替えて考えられました。

右列は1958年（昭和33）竣工の晴海高層アパートの非廊下階住戸。SRC10階建てという公団初の高層住宅だ。設計は前川國男で、配管が剥き出しにされ機能重視の合理性が見て取れる。流し台はサンウエーブがステンレスの深絞りに成功したため、ここで初めて採用された（公団一号型）が、調理台、ガス台とはまだ一体化していない。

上は、晴海高層アパートの廊下階住戸。エレベーターの止まらない階があるというスキップフロア式のアプローチだったため、廊下階と非廊下階とでは開口部や間取りに違いがあった。この時代の流し台は、まだ一体化が成功していないはずだが、ここには一体成型の流し台が置かれていた。

左は、1958年（昭和33）竣工の多摩平テラスハウス。プレキャスト工法の先駆けとなるTilt-Up工法などが試みられる。流し台はここで初めて一体成型のステンレス製が採用となった。

システム化する集合住宅

もうしばらくすると、住宅の工業化といいますか、住宅部品が非常に発達してきます。実は給湯システムやバスユニットの実現は、排気や排水方式の変化と同時に起きたことになります。つまり、バスユニットができてすぐ採用する、というのではなく、それを支えるシステムである給湯、給水、排水、換気といったすべてのものの辻褄がうまく合っていないと採用できないわけです。

そして、それらを修繕しながら使い続けていくためには、部品ごととか部品と駆体とのルールが必要になってくるのです。

それらの交換・耐久性の概念整理のための指針がKEP（ケップ：Kodan Experimental Planning）だとかCHS（シーエイチエス：Century Housing System）だとかKSI（ケーエスアイ：Kodan Skeleton Infill）。

KEPというのは、公団の実験的な設計システムという意味で、1973年（昭和48）に開発されました。

1　駆体と設備内装を切り離す
2　モジュール化
3　駆体と、各部品の耐用年数の明確化

の3つを主な柱としたシステムです。特に3番は、駆体より耐用年数の短い部品や部材を駆体の中に埋め込んではいけない、といったルールを定めていきました。

それを国のレベルで1980年（昭和55）にスタンダード化したものがCHSです。戸建ても集合住宅もスクラップ&ビルドじゃなくて社会資産にしていきましょう、ということで100年長持ちする住宅を目指したシステムです。

CHS：建設省（現・国土交通省）が「住機能高度化推進プロジェクト」の一環として開発、（財）ベターリビングが、戸建てとマンション、個別認定とシステム認定で、それぞれ認定している。

これらの流れがずっと続いていまして、現在では実に進化したスケルトン・インフィル・システムへと引き継がれています。そのことはまた、SI棟でくわしくご説明します。

公団の場合、賃貸の資金償還を70年間に設定していますので、基本的に駆体は70年もつように設定されています。現在築50年ほどで建て替えられているのは、設備も古く、狭さや壁の薄さなどに課題が大きい昭和30年代に建てられたものです。

このように部品の更新性をさらに追求していく中で、鞘管（さやかん）ヘッダー方式であるとか、給排水ヘッダー方式のようなものが生まれてき

右から：集合住宅特有の居住性能、建設技術、維持管理などを実験するためにつくられた108m（30階相当）のタワーは、世界でも類を見ない。

環境共生実験ヤードでは、舗装の透水性、遮熱性、保水性などを実験している。

小さい4枚の写真は、現代の「水まわり」機器。

床下には給排水管が張り巡らされている。駆体（スケルトン）と配管（インフィル）を分離し、鞘管方式にすることで、交換修理を容易にした。また、排水縦管を室外の共有スペースに置くこと（配管ヘッダー方式）で、プラン変更がしやすいなど自由度が高まった。

居住性能館3階のユニバーサル実験室。上は、6畳押入付きの1室を改造した「楽隠居」モデル。浴槽やトイレ、流しといった水まわりが組み込まれている。下は、車椅子で動きやすいキッチンカウンター。

ました。見栄えだけではなくて、下支えするこういった設備システムが開発され、具体化されていきました。

バスユニットを導入したことで、室内給排水系統が変わり高度化、システム化したことが、水まわりに一大変革をもたらしたのです。これが第三段階です。

昔の浴室は、アスファルト防水して、モルタルを塗ってタイルを貼って、という湿式だったので、工期も手間も乾かす時間もかかったんです。バスユニットだったら持ってきてポンと置いて配管をつなげるだけで終了です。部品化、工業化の一番の典型だと思います。

そしてそれは、バスユニットからの一方的な作用ではなく、給排水システムを含めた水まわりの側にも変わらざるを得ない下地のようなものができ始めていたように思います。というのも、KEPが1973年（昭和48）からですから、ほとんど同時なんですね。むしろ理論が先行していたところに、バスユニットの開発導入が起きた、というのが正しい姿でしょう。

技術的制約がなくなって

現在のSI住宅では、給排水管など設備の制約をほとんど感じないレベルまで設計システムが進化しました。

今ではこれらの設計システムにより、間取りは何でもできるようになっているんですよ。だから超高層の住戸にジャグジーをつけたり、自由な水まわり空間を設計することができます。家事労働の動線を考えれば、水まわりがどうしても1カ所にまとまっていくのは仕方がないことかもしれませんが、実際にはまったく自由に設計することが可能なのです。

例えば、一般にマンションの浴室というと住宅の中央部にあり、窓もないというイメージがありますが、いったん南向きのプランをつくってみると陽が当たって非常に気持ちが良いのです。たとえ隣の家との間が近くとも、体験して

しまうとその良さは失い難いものになるでしょう。最近の設計では、可能な場所には、そういうものをできるだけつくっています。

ＫＳＩ住宅実験棟や居住性能館は、そういうことを目的として行なわれた開発の概要を展示しています。

現在、ＵＲ都市機構が提供している物件はすべて賃貸ですので、今の需要に応えるのに加えて、将来的な需要にも注意しながら設計を考えなくてはならないのです。

実際20年ぐらいでライフスタイルも変われば、住まい方の流行も変わります。例えば、20年ぐらい前ですと90㎡の住宅なら４ＬＤＫの間取りをつくってきました。今は細かく仕切らないで広いリビングや寝室をつくるほうが人気です。

ＵＲ都市機構の賃貸住宅の中では、空き家になった住宅の間取りをまったく別のものにつくり替えることもいくつか試みるようになってきました。このような改造のときにも、良い設計システムに従ってつくられたものは、自由なつくり替えが可能になるんです。

極端な話ですが、新しい設計システムに従っていれば、間取りのルールはまったく気にしなくていい時代になったんですよ。だからこそ、マーケッティングを大事にした「商品企画」が重要になるんですね。つまり水まわりとは、設計的には住棟全体の設計生産システムすべてと一体化したものになり、ユーザーにとっては商品性のキーワードになっているのではないでしょうか。

一方、今まで公団として大量につくってきた古いスペックの住宅をどうするか、今のスタンダードとの差をどう埋めていくかは大きな問題です。現在、「ルネッサンス計画」と名づけて、住宅ストックの住棟単位の改修技術開発に取り組んでいます。

住宅難の克服という最初の使命を果たした公団が、ＫＥＰを生み出し、スケルトン＆インフィル開発へと変遷してきました。

民間の超高層マンションなどもだいぶスケルトン＆インフィルを採用していますから、公団の変遷は、一般のハウスメーカーさんやマンションデベロッパーにも影響を与えていると思います。

ＵＲ都市機構は、こうした技術開発やデータの蓄積を、これからの住宅づくりに反映させていかなくてはならないと思っています。

ダイニングキッチンの誕生

女性建築家第一号 浜口ミホの描いたもの

今では当たり前になったダイニングキッチン。
そのモデルは「公団2DK」であるというのが、定説でした。
しかし、北川圭子さんは女性建築家第一号の浜口ミホを調べるうちに
そうではないルートがあったことを発見します。
戦後の日本住宅を一変させた発明品である、
ダイニングキッチン誕生の物語をうかがいました。

北川 圭子

きたがわ けいこ

郡山女子大学家政学部人間生活学科教授

1976年北海道工業大学工学部建築科卒業、2005年同学大学院博士後期課程修了。工学博士、一級建築士、インテリアプランナー。主な著書に『ガウディの生涯―バルセロナに響く音』（朝日新聞出版 1993）『ガウディの奇跡―評伝・建築家の愛と苦悩 』（アードダイジェスト 2002）『ダイニング・キッチンはこうして誕生した―女性建築家第一号浜口ミホが目指したもの』（技報堂出版 2002）

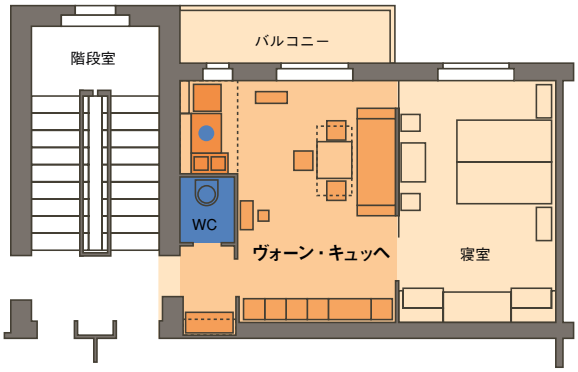
ダイニングキッチンの生みの親

そもそも、なぜキッチンを研究するようになったのかと言いますと、女性建築家の第一号はどなただったんだろう、という疑問から、浜口ミホさんに行き着いたことにあります。女性建築家第一号にはいろいろな説があってハッキリ一人に絞れない状況でした。恩師である遠藤明久先生が「浜口ミホさんでしょう」とおっしゃって、心が決まりました。

ですからダイニングキッチンに興味があったのではなく、そもそも浜口ミホさんに興味があって始めたことなのです。

浜口ミホ
（はまぐち みほ　1915～1988年）
前川國男設計事務所を経て浜口ミホ住宅相談所を1949年に設立。1955年に日本住宅公団で台所改善のアドバイスをして、ステンレスの流し台が一般に広がる。1949年に書いた著書「日本住宅の封建性」（相模書房 1949）が出版され、土間やキッチンは北側というそれまでの日本の間取りの常識を打破して、西洋風な考えを取り入れるという提案をする。この本は、日本モダン建築に大きな革命をもたらし、以降日本の住宅建築のプラン（間取り）が徐々にこの方向に向かうきっかけとなった。

台所の位置は北側で、寒くて暗くて、男子厨房に入るべからずということからもわかりますように、男尊女卑の象徴的な存在であったと思われます。



戦後、ダイニングキッチンによって食事と台所の両方が椅子式になり、南側に配置されるようになって、男女平等の象徴的な存在となりました。

このように戦前と戦後の生活を一変させたものが、日本住宅公団**（現・独立行政法人都市再生機構）**の「55-4N-2DK」のダイニングキッチンです。7・97㎡のごく小さな空間で、造り付けのテーブルが置かれました。

私の研究は、1955年**（昭和30）**に「55-4N-2DK」が成立するまでの過程です。私が行動を起こしたときには、ミホさんは既に亡くなられていて、元・東大助教授で日本で初めての建築評論家だった、ご主人の浜口隆一先生にお話をうかがいました。

ミホさんは、戦後の住様式を変えたといわれている『日本住宅の封建性』**（相模書房 1949）**という著書を書かれ、隆一さんはミホさんの功績は『日本住宅の封建性』を著したことと「ダイニングキッチン」であると、はっきりおっしゃいました。

ダイニングキッチンの成立は、1941年**（昭和16）**の西山夘三先生の食寝分離論、それから10年後1951年**（昭和26）**の吉武泰水先生と鈴木成文先生の「公営住宅51C」、このルートから公団住宅「55-4N-2DK」に、そして全国に普及する、というもの。これが定説になっていたわけです**（6ページ参照）**。

ところが、東京・等々力に建てた自邸のダイニングキッチンは前川國男先生から教授されドイツで流行っていたヴォーン・キュッヘ**（Wohn Kuche）**であったという、まったく違う話が隆一さんの口から聞かれたんです。この家は疎開前に売ってしまい、戦後すぐに壊され、残念ながら写真も図面も残っていません。

前川國男
（まえかわ くにお　1905～1986年）
東京帝国大学工学部建築学科を1928年に卒業し、ル・コルビュジエ事務所に入所。アントニン・レーモンドの元でも学び、モダニ

ズム建築の旗手として、第二次世界大戦後の日本建築界をリードした。主な作品に東京文化会館（1961年 昭和36）、紀伊國屋書店新宿店（1964年 昭和39）、東京都美術館（1975年 昭和45）など。

ヴォーン・キュッヘ

ミホさんと隆一さんは前川國男先生の事務所の所員として出会います。当然前川先生の機能主義的な薫陶は受けているはずです。

ヴォーン・キュッヘというのは、ドイツ語で、Wornraum（居間）とKuche（台所）を合体させた言葉です。私もこのドイツ語は初めて聞きましたし、今では建築業界でも忘れられてしまっていると思います。

日本では1930年（昭和5）ごろに『国際建築』（国際建築協会）と、ほかの何冊かに紹介されています。当時の広辞苑に載っているほど広まった言葉です。今でいうダイニングキッチンですが、ミホさんは戦前にもう既に、ヴォーン・キュッヘを提案しています。

1949年ごろ、ドイツ語だったヴォーン・キュッヘが、敗戦という背景があって英語のリビングキッチンに置き換わっていきます。

封建性の打破

ミホさんが盛んに言っていたのは「メイド・レス・リビング」ということです。どの世帯でも、女中さんがいなくても使いやすいリビングにしなければダメだ、ということです。だからコンパクトになっていった。

ミホさんが育ったのは大連の海関（中国税関）の官舎で、れんが造りの洋館でした。生活様式はすべて椅子式で、3時にティータイムをとるなど、すべてイギリス式に倣っていました。中国人の使用人に囲まれていましたから、家事を手伝うことなどなく、そのことは結婚後に隆一さんを驚かせることになります。

こうした生育環境があったからこそ、この時代に「メイド・レス・リビング」という発想が出てくるんです。

それで『日本住宅の封建性』が出されるんですね。この本は、中原暢子さんも「食い入るように読んだ」とおっしゃっていました。

中原暢子（なかはら のぶこ 1929〜2008年）埼玉県出身の建築家。国際女性建築家会議日本支部初代会長。

1953年（昭和28）に再版したときに、ミホさんが著者の言葉として「台所はダイニングキッチンが当たり前になっているから、今となっては見当違いのようなことを書いている」と言っているんです。この5年の間にものすごい変化があったということですよね。

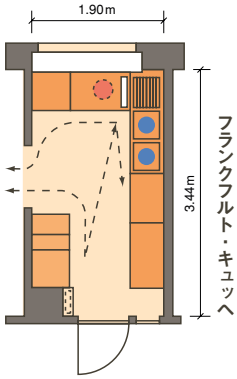
1955年（昭和30）に日本住宅公団ができたときに、本城和彦さん（6ページ参照）がミホさんに白羽の矢を建てて、ああいう台所が実現したのです。

ダイニングキッチンという言葉は本城さんが使い始めます。その理由は、公団は面積制限のために居間が基本的につくれなかったんですね。それで、リビングではなくダイニングだろうと。図面には、食事室兼台所と書いてありますから。終戦後、ドイツ語を敬遠して英語化が進んだために一時期リビングキッチンと呼ばれた時期もあって、名称に混乱が生じました。

生活最小限住宅運動

狭い空間の中でいかに最小限の生活機能を満たすかという「生活最小限住宅」の概念が最初に出てくるのは、第一次世界大戦後のドイツを中心としたヨーロッパです。敗戦国で戦地からの引揚者が戻ってきたことによる住宅不足がその原因です。この運動はアメリカにまで広まりました。

生活最小限住宅はCIAMの第2回会議（1929年）のテーマになり、前川先生はコルビジェの事務所から参加して目の当たりにしました。



生活最小限住宅がテーマになったCIAMで、エルンスト・マイとマルガレーテ・シュッテ＝リホツキーが提案した、フランクフルト・キュッヘ（1929年）

CIAM 近代建築国際会議（シアム：Congrès International d'Architecture Moderne）
都市・建築の将来について、建築家たちが討論を重ねた国際会議。モダニズム建築の展開のうえで大きな役割を担った。1928年から1956年までに10回開催された（1959年の第11回オランダ・オッテルローでの会議を含める説もある）。

ですから前川先生のご自邸（49ページ参照）も、そういう影響を受けたものになっていますね。1942年（昭和17）に建てられたもので、資材不足のため柱に電柱が使われています。

あれはヴォーン・キュッヘスタイルではなく独立したキッチンですが、今見ても非常にモダンな設計ですね。夫婦二人で住むということで、こういうことも可能だったのかもしれませんが、狭い敷地を吹き抜けなどで広く見せる工夫をしています。

生活最小限住宅の中で試みられたのが、ヴォーン・キュッヘなのです。あちらは靴を履きベッドで暮らすわけですから、かなり無理があります。ソファをベッドにして、押し入れにも子供を寝かせなければ、家族4人が暮らせないような間取りです。夫婦が中心になるところが、やはりヨーロッパですね。38㎡だったかな。日本の場合は、和室で逃げることができますので、少しは楽でしょう。

前川先生の影響か、東大では生活最小限住宅運動が非常に盛り上がったわけですけれど、私がキャッチしていないだけかもしれませんが、ほかではあまり聞いたことがありません。京大とか、西山夘三先生はどう考えていらっしゃったのか。この時代、東大ではヨーロッパに目が向いていたのかもしれないな、とも思います。

リビングキッチンの零落

戦後、住宅難を解消するために政府が公布した「延べ床面積15坪制限」が解除されるのが1950年（昭和25）末なんです。

このことを境に、財力のある人は、また大邸宅に戻っていきます。女中部屋があったり、キッチンも独立型になっていく。そして1960年代の高度経済成長に入ると「リビングキッチンというのは狭い住宅しか建てられない人たちのスタイル」という考え方が定着してしまいます。

ところが、１９６０年代後半から変わってきて、70年代に入るとリビングキッチンが再び伸びていくんです。ですから、規制によるのではなく、みんながリビングキッチンを支持するようになったのは、１９７０年代後半のことだと思います。

私がこちらに赴任しましたのは、前任の菅原文子先生にお誘いいただいたからなんですが、菅原先生はミホさんの所員だったんです。ちょうどミホさんが日本住宅公団の仕事にかかっているときに、本学で学んだ家政学の素地をミホさんに評価され、食器棚の収納の計画に携わったと聞いています。確かにミホさんは、そういったことは苦手だったかもしれません。ご飯をつくるのが嫌だとおっしゃるくらいですから。

隆一さんは『ヒューマニズムの建築』（雄鶏社 １９４７）を著されて、建築評論家第一号になられるんですが、ミホさんも同じ考えだったと思います。お二人は大量生産のことをよく話題にしているんですが、日本住宅公団のステンレス流し台で日本の住宅もようやく大量生産が可能になった、と評価しています。日本の近代化、建築の工業化が、これによって実現されたという考えですね。それにミホさんが貢献したんだ、ということをおっしゃっていました。

お二人はギーディオンに影響を受けていました。隆一さんは前川先生に、「日本のギーディオンのように建築評論をやらないか」と言われたらしいですね。

ジークフリート・ギーディオン（Sigfried Giedion １８８８〜１９６８年）スイス人建築家。モダニズム建築の推進者で、第1回ＣＩＡＭの議長を務めた。

採用の苦労話

とにかくステンレスの流し台に象徴されますね。当時、ステンレス流し台を磨くことが、主婦の幸せといわれたほどですから。

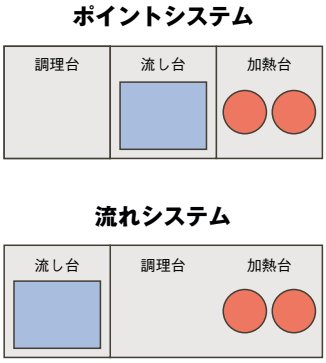
日本住宅公団の第一号には間に合わなかったのですが、前川先生が手掛けられた晴海高層アパート（１９５８年 昭和33）から公団一号型が導入されています（一体成型のものは同年竣工の多摩平テラスハウス）。

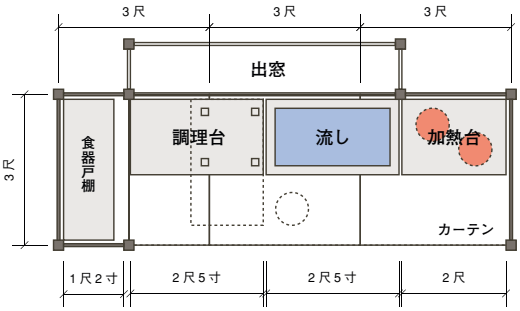
ただ、ステンレスの流し台を中心に据えたミホさんの「ポイントシステム」（センター・シンク・システム）に対して、家政学で常識とされた「流れシステム」が障害となり、その解決のために実験が行なわれました。

「流れシステム」とは、食品に手が加えられていく順序（準備→流し→調理→加熱→配膳）に従って「流し台→調理台→加熱台」という配列を指します。これが家政学の常識となったのは、鈴木式高等流し台以来で、長い間支持されてきたことでした。鈴木の理論は、当時もっとも進歩的とされていたアメリカを手本としたものでしたから、ミホさんの提案は大きな抵抗を受けました。

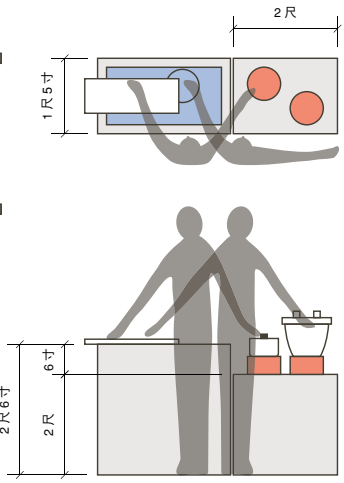
ミホさんは多くの反対の声に対して、公団ＤＫにならったキッチンを設計していた津幡修一氏邸に試作品を持ち込んで試用します。津幡さんはアントニン・レーモンドの事務所を辞めて公団に入ってきた建築家です。それでもやはり受け入れられず、結局、女子栄養大学の助教授だった武保（たけやす）に実験への協力を申し出ました。

建築家の川喜田煉七郎が、１９３４年に発表した狭小住宅に適した台所設備。川喜田は人間工学の視座から、当時主流だった流れシステムの見直しを提案している。これはのちに浜口ミホが主張したポイントシステムに先鞭をつけたものと思われる。





川喜田式の配置



アントニン・レーモンド（Antonin Raymond １８８８〜１９７６年）チェコ出身の建築家。１９１４年にアメリカの市民権を取得。フランク・ロイド・ライトのもとで学び、帝国ホテル建設のために来日。その後日本に留まり、モダニズム建築の作品を多く残す。日本人建築家に大きな影響を与えた。インテリア・アーキテクトのノエミ夫人は、公私にわたりアントニンを支えた。代表作に、東京女子大学総合計画（東京都杉並区／１９２１年）など。

１９５６年（昭和26）７月に女子栄養大学で行なわれた実験は、10人の主婦を被験者として、実際に献立をつくって「調理時間」と「歩数」を測定するもの。結果は「調理時間」はそれほど変わらないものの、「歩数」では27・5歩対2歩という圧倒的な差で「ポイントシステム」に軍配が上がりました。

ちなみに当時は食材を洗う作業が多かったため、このような結果となりましたが、加工食品を多用する現代ではその限りではないため、このスタイルのキッチンは今はほとんど見られません。

幅１８００㎜という限られたスペースにどう収めるか、という問題なのですが、家事作業の順から考えるのが家政学だったんですが、ミホさんは家事作業は慣れの問題だ、と言っています。ミホさんの中には建築家として、大量生産する場合1パターンで済ませたい、という考えもあったんではないでしょうか。流れ式だと、左右対称に2パターン必要になりますから。

本来であれば、公団住宅の台所設計という仕事は家政学の専門家に協力を仰ぐところでしょう。本城さんがミホさんに声をかけたのは、隆一さんが帝大の同期だった縁もありますが、何よりミホさんが『日本住宅の封建性』を著し、日頃の主張から表れる見識に頼ったところがあるのでしょう。

「奥さんまわり」の改良

当時の公団では「奥さんまわり」という言葉が使われたんですが、台所を中心に、浴室、トイレ、洗濯、洗面といった家事労働の場をそのように呼びました。まさに水まわり空間そのものですよね。台所は、その中心だったわけです。

世の中が男女平等に向かいましたから、女性の地位を上げなくてはいけないという風潮になっていきました。しかし、まだ社会進出という時代ではない。それで、主婦の地位向上をしようとなると、必然的に「奥さんまわり」の改良に目が向けられていったのです。

暗く陰湿な北側にあった台所を、南側に持ってきて家の中心的存在にするということが、主婦の地位向上につながったのです。あまり言われていないことですが、ダイニングキッチンには、こういう背景があったと思います。

ダイニングキッチンのあと、ミホさんが言っているのは「次は洗濯機を置く空間の確保ね」ということです。しかし、それ以後はミホさんは公団にかかわることがありませんでした。そこで終わっているわけです。ただ洗濯機が普及し始めるのは1960年代に入ってからですから、この時点では置き場を確保することはあまり重要ではなかった。

だから「水まわり」という発想は、なかったんではないでしょうか。ですから台所、浴室、トイレ、洗濯、洗面という空間を「水まわり」としてまとめて意識することは、当時はなかったのではないでしょうか。

住まい観は退化している？

『新しい住まいの設計』（扶桑社）という雑誌のバックナンバーを遡って、ミホさんがやったダイニングキッチンがその後どうなっていったかを分析したデータがあります。

ここで見られるのは新築住宅ですし、斬新な設計だから雑誌に掲載されるわけですから、一概に当時の平均的住宅というわけにはいきませんし、実は5年ごとの資料を拾っていったんですが、それではあまりにもアバウトすぎるということで、頑張って2年ごとのデータを落とし込んでいます。

それをみると1975年（昭和50）ぐらいに、すべての台所平面パターンが出そろって、ほぼ同数で並ぶという時代を迎えています。ハッチで仕切ったり、独立型で豪華なシステムを入れてみたりという経験を経て、今はもうリビングキッチンが当たり前になりました。

ただ、今台所の危機がいわれています。水は必要でしょうが、あとは電子レンジと分別ができる大きなゴミ箱があればいいと。

「奥さんまわり」なんて言われていた時代とは隔世の感で、男女同権は言うに及ばず、家族形態も独居が激増しています。家で食事をつくらない場合も多い。こういう論文にも「主婦」とは書けません。「調理人」と書いたかな。嘘みたいな話ですが。

これらのことからいっても、キッチンや食に求められることが多様化し、変わってきていることは確かです。ただ、一人ひとりの求めに応じたキッチンがちゃんと与えられていないような気がします。

実は、1歳児と3歳児の検診のときに、LDKタイプの家に住んでいる人と、田の字型つまり続き間タイプの家に住んでいる人の二通りで調べました。すると、田の字型の住宅のほうが育児のストレスが大きいという結果が出たんです。

一概に間取りの問題だけとはいえませんが、LDKタイプのほうが、子供の動きが目に届きやすいから安心感がある。見える、というのは想像以上に大事なことなんですね。

意外なことに、自分の家が南に面しているか北に面しているかといった方角を把握していない人が多かった。住宅に無頓着で生きている人の多さに、ちょっと愕然としました。日本は、子供に住宅について教えていませんものね。ヨーロッパ、特にフィンランド辺りでは住宅教育が非常に盛んで、煙突の位置で熱効率を考えるとか、デザインの善し悪しまで、子供のときに考えさせます。

日本では、中学の家庭科でも住宅のところは飛ばされがち。本当は小さいときから住環境を意識して、いろいろなライフスタイルに合った住環境がつくれるんだということを、もっと多くの人に知ってもらいたいですね。

イギリス・ロンドンの超高級住宅地チェルシーのテラスハウス。オリジナリティあふれる特注品のキッチンシステムとアンティークのダイニングセットという豪華なDKの一例。

水洗化がもたらした、見えざるイノベーション

現代のトイレ志向をつくった技術改革

現在の都市生活者にとって、なくてはならない水洗トイレ。
その大切な設備が、
産業史の視座から語られることは、かつてありませんでした。
開発者をはじめ、
節目節目に現れたキーパーソンに温かいまなざしを注ぎながら、
膨大な資料を収集し、まとめ上げられた前田裕子さん。
衛生設備の生産技術改革が、
日本の金具産業を一新させるほどのイノベーションを引き起こしたように、
人類に不可欠なトイレには、再び、新たなイノベーションが期待されています。

前田 裕子

まえだ ひろこ

神戸大学大学院経済学研究科講師

愛知県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。民間研究所、NGO、NPO勤務を経て、神戸大学大学院国際協力研究科博士課程修了。博士（学術）。主な著書に『戦時期航空機工業と生産技術形成-三菱航空エンジンと深尾淳二』（東京大学出版会 2001）『水洗トイレの産業史―20世紀日本の見えざるイノベーション』（名古屋大学出版会 2008）

江戸東京博物館分館「江戸東京たてもの園」（くわしくは45ページ参照）

なぜ、トイレなのか

なぜトイレなのか。

私自身は技術には弱い人間なのですが、三菱重工の戦時下の活動について調べて航空エンジンの生産技術のことを1冊の本にまとめたんですね（**『戦時期航空機工業と生産技術形成―三菱航空エンジンと深尾淳二』東京大学出版会 2001**）。その取材の中で、航空エンジンの部門に非常に優秀な技術者である杉原周一さん（**1907～1972年**）という方がおられ、その後TOTOの社長さんになられたことを知りました。

衛生陶器のTOTOさんで、なぜ航空技術エンジン技術が生かされたのかなあ、と。私が今、専門にしているのは日本の産業技術史なので、そのことに大変興味を引かれました。しかも異分野から来た途中入社の方が社長にまでなるというのは、どうしてかなあと考えたのです。

それで自分なりに少し調べてみましたら、杉原さんという方は便器をつくったのではないということがわかったんです。そうではなく、金具をつくられたんです。

業界では水栓金具と呼ばれているのですが、これで給排水システムにつながっていないと便器はただの穴開きオマルであって、水洗トイレとしては機能しません。

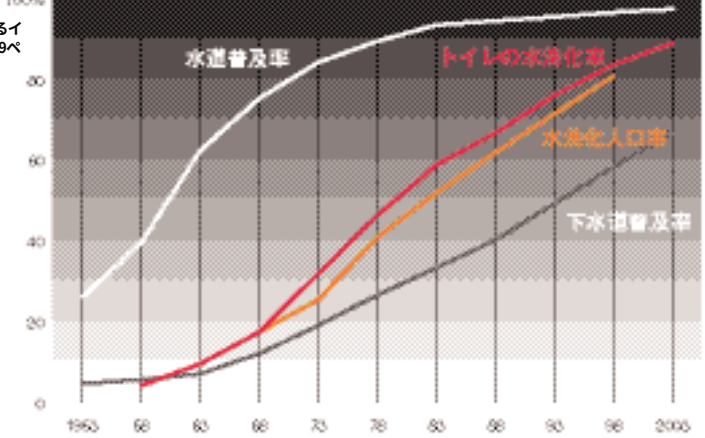
ですからTOTOさんというのを、私はずっと衛生陶器の会社だと思っていたけれど、そうではなくて金具の会社、金具で業績を伸ばした会社だったということです。

それで航空エンジンと同様に、戦時期からの生産技術移転というのを調べてみたいと思ったわけです。それでTOTOさんの小倉の本社に通い始めました。

ところが、業界関係者を別にして、TOTOさんに金具のことを知りたいと言って行った人はほとんどいないらしい。私が調べたいと思ったことについては、くわしいところまでよくわからなかったんです。その内、「せっかく来たんだから衛生陶器も見て行きなさい」と言っていただいたりするうちに、衛生陶器と水栓金具の初期のころの話を書くことになりました。

歴史って、やっているうちに「これはどうしてだろう」と遡る傾向があるんですね。それで、私も大倉孫兵衛、和親という親子に行き着き、気持ちの中で恋人化していきました。

大倉孫兵衛
（おおくら まごべえ　1843～1921年）
実業家。家業の絵草紙屋から独立して絵草紙屋・萬屋を開店し後に大倉書店、大倉孫兵衛洋紙店（現・新生紙パルプ商事）を設立した。夏目漱石の初の単行本「吾輩ハ猫デアル」も



上下水道普及率とトイレ水洗化率の推移

『水洗トイレの産業史―20世紀日本の見えざるイノベーション』（名古屋大学出版会 2008）219ページ　図5-10を参考に編集部で作図

大倉和親
（おおくら かずちか　1875～1955年）
大倉孫兵衛の長男。慶應義塾卒業後、森村組に入る。アメリカのイーストマン・ビジネス・カレッジ修了後、ニューヨークのモリムラブラザース入社。森村組から分離された日本陶器（現・ノリタケカンパニーリミテド）の初代代表社員。

大倉書店から刊行された。また、森村市左衛門との出会いから日本陶器（現・ノリタケカンパニーリミテド）、大倉陶園の設立に参加し日本の陶磁器産業に多大なる貢献をした。

現代の日本の都市部に暮らす人間にとって、水洗トイレが使えなくなることは、飛行機が飛ばなくなることより、携帯電話やパソコンが使えなくなることより、ガスや電気が止まることより深刻です。たとえ1週間でもそんなことが起これば、私たちの生活がたちまち悲惨な状況になるということを、例えば大災害を経験した人は痛いほど理解しているのではないでしょうか。

この圧倒的な重要性にもかかわらず、トイレの水洗化について、その工業化過程を明らかにした研究は、企業の社史を除けばほとんどなかった。

それで、日本の水洗トイレ黎明期から本格的普及の始まった１９７０年初めあたりまでのおよそ１００年間の歴史を、この工業化の視点から書いてみようと思ったわけです。

水洗トイレを概観する

水洗トイレはそれ自体が偉大な発明でした。そして排泄設備における歴史的イノベーション（新機軸）でしたが、それが普及することで二重、三重に大きなイノベーション（革新）をもたらしました。

まず第一のイノベーションは、都市の公衆衛生を改善することで、人間の健康維持に実質的に貢献しました。

都市に人間が集住することにより、衛生の悪化という大問題が生じることになります。フランス・パリの例で言えば、道路に捨てられたゴミや汚水、し尿による汚泥水を排除するためにセーヌ川に通じる溝が切られたのが12世紀末。溝はすぐに詰まったため、14世紀には下水道が建設されます。当時、し尿は不浄なものと考えられていたため、川に流さず別途収集されていましたが、満足のいく状態にはほど遠い状況でした。

19世紀後半のジョルジュ・オスマンのパリ大改造計画（8ページ参照）によって大幹線下水道が完成し、パリでは１８８０年に住居のトイレ排管を下水道につなぐことが許可されました。イギリス・ロンドンでは１８１５年、アメリカ・ボストンでは１８３３年、ドイツ・ハンブルグでは１８４２年、アメリカ・フィラデルフィアでは１８５０年に、パリより早く許可されています。

下水道は本来、雨水と生活雑排水を集めて流すことで、都市を水害と不衛生から守るための設備でした。しかし、水洗トイレの発明によって、その意義と性格を変えていきました。ほかならぬ「トイレの水洗化」が、下水道建設の目的の一つとなったのです。

第二のイノベーションは、「清潔」にかかわるものです。つまり悪臭や害虫の発生という不快な住環境に対して「不潔」感を覚え、より快適な環境へ改善しようとする意識改革を促しました。

また、上下水道が整備されたことで、水汲みから解放された人々は、比較にならない量の水消費を享受することになりました。19世紀初頭までのパリでは、１日１世帯あたりに必要な水は５～７ℓと考えられていましたが、19世紀中ごろには１００ℓを超え、20世紀初頭には２００ℓを超えます。

こうして都市生活者は、飲料水以外の生活用水の、そのほとんどを汚れを洗い流すために使うようになりました。言い換えれば、上水は衛生と清潔のために給水され、排水されるようになったのです。密室の中で排泄行為が行なわれ、排泄物は瞬時に目の前から消えてなくなるようになりました。

今日、人々が衛生設備機器メーカーに対して、「清潔」かつ「好ましい」イメージを抱いているとすれば、それはまさしく水洗トイレがもたらした社会心理面でのイノベーションにほかなりません。

そして第三のイノベーションは、個々人の内的な排泄行為への感覚を刷新し、排泄空間における快適性の追求を顕在化させたことです。加えて、汚物を遠ざけるのみならず、その存在を意識から抹殺したいとする心理を生みました。

水洗トイレの快適性がもたらしたイノベーションは、人々に己の廃棄物の行く末を忘れさせ、水資源の貴重さへの意識を薄めることになりました。

結果的に、環境への負荷（汚水処理と水資源の多用）があることを認識させるための教育が、新たに必要になってきたと思います。

こうした意識にまで及ぶ「水洗トイレ」がもたらしたイノベーションは、都市機能そのもののイノベーション、つまり給排水システム（上下水道）の構築の上に成り立つものです。

日本の特殊事情

日本は、人口の割に耕作地が狭く地味が痩せていて、牛馬をはじめとする家畜の数が少ない。そのため、人間のし尿が極めて有効な肥料になりました。

江戸の町も17世紀あたりまでは、まだし尿の垂れ流しが行なわれていたようですが、次第に汲取りのシステムが整っていきます。

肥料としてのし尿は、干鰯などと違って遠隔地への輸送は不向きですから、トイレの視座から眺めれば、人口集積の度合いと近郊農家の規模、し尿肥料化の知恵と工夫などのバランスが、近世日本の大都市を誕生させたと言っても過言ではありません。またその資源が活用される農業は、日本では伝

統的に尊ばれていましたし、そこには循環の思想が生きていました。

ただ、１９１０年代後半から１９２０年代にかけて（ほぼ大正期）、日本全体でみても都市人口が増大するとともに、農村では化学肥料の使用量が急増します。そのため、東京市では広域下水道が完成する前に、し尿需給のバランスが大きく崩れ始めるのです。

１９１８年（大正７）には農家や業者における汲取りが停滞し、未処理のし尿が下水や川に密かに捨てられて問題になります。１９１９年（大正８）には市費を投じて無料汲取りを開始しますが、処理量の増加に追いつけず、１９２１年（大正10）には一部地域で有料化に踏み切りました。

１９２２年（大正11）に三河島汚水処分場の運転開始によって、ようやく東京市の下水道は、水洗トイレ取り付け可能（直接放流可能）の指定を受けました。とはいっても、日本におけるトイレの水洗化は遅々として進みませんでしたが。

明治のころ、し尿は農村に還元されていましたが、当時それでも水洗トイレをつけたいという人、例えば外国人なんかは便器は輸入の既製品を買ってきて、パイプなどの足りない部分は水道屋さんが手づくりしていました。バルブなど金属部品は、輸入から、次第に国内の金物屋が専業化してつくるようになりますが、概して品質は悪かった。

アメリカやヨーロッパでは、金属機械産業というか、金属パイプとバルブのネットワークの中に位置づけられてこそ、水洗トイレが成立し、金属機械産業の一環として設備機器産業が現れる。はじめに金属ありきです。

何もトイレだけではなくて、ガスもそうですし、空調とかスチーム暖房もそうですね。そういうものをセットとして金属機械産業として設備機器産業が発展していった。

アメリカ的な特色でもありますが、ちょうど世紀の変わり目ごろから、大企業がぐっと伸びていく。一つは、金属機械産業というのは産業としても発展性がありますよね。だから、そういう大企業が、ネットワークのほんの一部分を占める便器や洗面器をつくっている衛生陶器メーカーを吸収合併してさらに成長していく。この経緯は極めて自然に思えるわけです。アメリカンスタンダード社なんかその典型といえるでしょう。

ですから設備機器メーカーと便器メーカーとは、非常に異なるものなんです。設備機器メーカーが便器メーカーを吸収するというのは簡単ですが、便器メーカーが設備機器メーカーになるというのは、すごい飛躍が必要なんです。

撮影協力／UR都市機構　蓮根団地

それなのに、日本ではほんの小さいほうの陶器のほうがリードして、世界的なメーカーになってしまった。アメリカなどと比べてまったく逆だというのが面白いなと思います。

日本の生活を近代化する志

ＴＯＴＯの創業に深くかかわった大倉孫兵衛は、シカゴ博覧会で純白の水洗便器に触発されただろう、と書いたのは私の完全な推測です。ただ、シカゴ博覧会に孫兵衛が行ったことも、そこにたくさんの水洗トイレが据え付けられていたことも事実ですから、あながち見当外れでもないと思います。

ただトイレ研究が難しいのは、なかなか写真が残らないということなんですよ。

シカゴ博覧会
コロンブス大陸発見４００周年を記念して、１８９３年（明治26）にミシガン湖畔で開催された。純白に塗装されたホワイトシティーと呼ばれるパビリオン群と、フェリスの大観覧車を展示。アメリカがヨーロッパより工業力に勝ることを誇示する博覧会となった。日本も輸出振興、近代化、工業化を世界に印象づけるために出展している。

ところで、企業としていえば、便器を製造したＴＯＴＯ（当時の東洋陶器株式会社）以前に日本陶器（現・ノリタケカンパニーリミテド）があり、その母体は日本最初期の輸出商社の森村組でした。創業者の森村市左衛門は貿易業で大成功した人物ですが、大倉孫兵衛・和親父子も、この貿易業から多大な恩恵を受けています。

六代目　森村市左衛門
（もりむら いちざえもん　１８３９～１９１９年）
森村グループの開祖。江戸末期、京橋の老舗武具馬具商の長男として生まれ、１８５９年の横浜開港の直後、渡日した外国人から欧米の品々を買い込んで江戸で売る商売を始め成功。年の離れた異母弟豊（とよ）を慶応義塾で学ばせて、２人で直輸出貿易会社、森村組（匿名組合）を１８７６年（明治９）に設立する。ニューヨークにも進出しモリムラブラザーズを開店。

森村グループ４社
（現在の株式会社ノリタケカンパニーリミテド・ＴＯＴＯ株式会社・日本ガイシ株式会社・日本特殊陶業株式会社）のルーツは、１８７６年（明治９年）森村市左衛門と豊の兄弟によって設立された森村組にある。我が国の貿易業界の草分けともいうべき森村組は、１９０４年（明治37）愛知郡鷹場村字則武に日本陶器合名会社を設立した。１９１７年（大正６）には、同社の衛生陶器部門を分離して東洋陶器株式会社が、１９１９年（大正８）には碍子部門を分離して日本碍子株式会社が設立された。１９３６年（昭和11）には、日本ガイシのＮＧＫ点火プラグ部門が分離して日本特殊陶業株式会社が設立される。創業者である森村市左衛門をはじめ、大倉孫兵衛、幹部社員は長者番付の常連であった。

私がすごいなと思うのは、製造業、それも窯業はキツい仕事で当時は機械化も難しく、利幅も少なくて大変だったのに、大倉父子はそれをやった。ものすごいお金持ちだから、苦労してやる必要はなかったのに敢えてやったんです。

しかし、努力しているうちにノ

リタケ・チャイナという大変優れたものが生まれて成功しました。その辺のことは理解できますね。大倉陶園にしても、お金持ちの趣味人の道楽と見れば、絵草紙屋さんの美意識があってヨーロッパに負けない美しい美術陶器をつくりたいとかね。

ただ、食器とか碍子というのは需要があって、良いものをつくれば売れるとわかっていたわけです。ところが衛生陶器は輸入品で充分でしたから、需要がないんです。それなのに、なぜつくったのか。

それは、日本の生活様式を近代化したい、という願いだったかもしれません。大倉和親は、キャリアとして最初からアメリカ・ニューヨークのモリムラブラザーズ駐在からスタートしているんですね。若いころからの経験があったからかもしれません。そういう感覚からすると、彼らにとってはテーブルウェアも便器（サニタリーウェア）も同じだったのかもしれませんね。近代化をかなえる生活様式のものを全部つくっていこう、という気概だった。

必ず、いずれ必要になるときがくる。必要になったときに、輸入に頼るということが嫌なわけですね、この時代の人は。

日本では１９７０年（昭和45）で

も30％程度の普及率ですから、実際は見込み違いだったのですが、もっと早く水洗トイレ時代がくると思っていたみたいですね。もしかすると輸出産業としてアジア地域に便器を輸出することは、視野に入れていたかもしれません。しかし、どう考えても私（わたくし）の利益のための事業ではなかったはずです。

開発にかける情熱

磁器というのは日本で昔からつくられているんですが、あんまり真っ白じゃないんですね。日本陶器は、白色硬質磁器と呼ばれる真っ白なのをつくりたかった。そして、その磁器を使って立派なテーブルウェアをつくりたかった。この開発は、先程言ったようにノリタケ・チャイナという大変優れたものが生まれて成功します。

一方便器は、大倉さんが日本陶器の工場用地の一部に新しい試作工場を私設して試作されます。推測ですが、のちに別会社にしたのも便器をきれいな食器と同じ工場でつくることに抵抗があったことも一因じゃないかな、と感じます。

ヨーロッパの有力メーカーは、両方つくっているところが多い。当時の日本はその辺の感覚が繊細だったのかもしれません。ＴＯＴＯ（当時の東洋陶器株式会社）は、ヨーロッパ流ビジネスモデルを取り入れて両方つくります。

便器にするには、白色硬質磁器とは材料が違うわけで、硬質陶器と呼ばれるものです。日本にはいろいろな種類の焼き物がありますが、硬質陶器というのはなかった。硬質陶器というのは吸水性が低いので、水だけではなく臭いや汚れにも強く、便器に適していたんです。そのために大倉さんは基礎研究から立ち上げるんですね。

硬質陶器より炻器のほうが吸水性が低いという点では優れていましたが、炻器は金属分を多く含むため有色であるのに対し、硬質陶器は白色磁器ほどではないけれど、それに近い白さを持つのです。

つまり硬質陶器は、硬さ、白さ、低い吸水性、機械工業への適性、価格面での優位性といった、従来の軟質陶器、炻器、磁器にはない総合的特質を持ち、実用性に富む素材でした。硬質陶器の開発には、佐賀出身の松村八次郎が成功していますが、特許も申請せず、日本の陶器産業の発展に尽くす道を選びました。

私が感じるのは、こういう気概を持っている日本人というのが、そのころたくさんいたんですね、今みたいな豊かな時代よりもね。しかし、そういう人たちの中で、帝大卒のエリートなんかは、こんなに地味な生活まわりのことではなく、鉄道を敷くとか大きな橋を架けるとかにいっていましたよね。だから、土木なんかでは優秀な人がたくさんいました。

生活まわりという意味では大倉さんより前に活躍された配管屋さんたちの中にも、すごく立派な方がいました。本の中で西原脩三さんと須賀豊治郎さんを紹介していますが、自力で会社を興され、技術開発された起業家です。今回の話には関係ありませんけれど、イタリア翻訳家の須賀敦子さんは須賀さんのお孫さん、経済学者の青木昌彦さんは西原さんのお孫さんです。そういうＤＮＡがあるんですね。西原さんも須賀さんも、そして大倉さんも国民の衛生のために、いわば縁の下の仕事を続けてくれた。

また、給排水というと下水管も必要ですが、この陶管（下水用土管）をＩＮＡＸの前身の伊奈製陶がつくることになり、大倉さんはそれも支援しています。

ＩＮＡＸの創業地である愛知県の常滑には、横浜居留地の下水道建設を管理していたブラントンという技師に依頼されて、１８７２年に鯉江方寿という人が国産第一号の陶製下水道管の製造に成功した、という歴史があります。

真焼土管（まやけどかん）と呼ばれるこの土管は、従来の素焼きの土管よりも高温で焼締めて吸水性を減らし、漏水し易かった継ぎ手部分を改良したものです。鯉江は常滑の陶祖ともいわれ、その後、常滑の陶業が隆盛した礎となりました。

便器から金具へ

ＴＯＴＯとしては、非水洗のものをつくっているうちはいいんですが、水洗トイレをつくる上では国産の水栓金具がちゃんとしてこないと困るわけです。日本でも輸入品に遜色ない金具をつくるメーカーも出てきますが、なにせ供給量が少なくて価格が高い。だから金具の問題というのは、ずっとＴＯＴＯの問題であり続けていくんです。

アメリカンスタンダード社とかコーラー社とかは、もともとが金

属機械系のメーカーですから、衛生陶器が1つ売れれば、金具もそれにセットして売るわけです。ＴＯＴＯも意欲はありながら、長い間、実現できずにいて、そんな状態で戦時期に入るのです。

もちろん当時の日本の技術でも、水が洩れない水栓金具をつくることはできたと思います。ただ、そういう能力がある工場では、船とか機械とか、もっと難しいものをつくっていたのです。まだ、そんな時代だったんです。

そんな質の悪い金具でも、全部そろえたら結構高いものにつきました。質の良い便器より質の良くない金具のほうが高い。

だからＴＯＴＯとしたら、自分のところでつくれたほうが格段にいいんですが、窯業と金具産業とは全然違う技術で相性も悪いんです。特に真っ白な陶器をつくるときに、金属粉などが混入するとまずいんです。

戦後ＴＯＴＯで衛生陶器工場と金具工場が隣接していたときの話ですが、工場見学をするなら衛生陶器が先で金具は後、その逆はダメだったとのことです。

ですから、そういう環境で金具部門にいた杉原周一さんが社長**（1967〜1972年在職）**になるというのは、相当に強烈なことだったはずです。そのころは会社名も東洋陶器でしたから、技術者といったら窯業技術者を指す時代。そこに機械技術出身の杉原さんを据えるというのは、大変な決断だったと思います。

時代を変えたキーパーソン

杉原周一さんは、東京帝国大学工学部機械工学科を卒業後すぐに三菱重工に入社、当時花形となりつつあった航空エンジンの開発に携わります。ここで燃料噴射装置及び、その噴射量自動制御装置の開発に成功し、その量産のための専門工場の工場長として生産ラインの立ち上げを任されます。

しかし、敗戦後はいろいろと複雑な想いや事情が重なったのでしょう。いったん社内の自動車部門の研究職に就いたものの三菱重工を辞し、郷里大分で農業を営む決心をします。一時期、大分県工業試験場長の職を経て、小倉の東洋陶器へ入社します。口をきいたのは、三菱重工時代の上司でした。

当初杉原さんが任命されたのは工務課長であり、コンベヤその他の設計製作というような肩書き通りのものでしたから、杉原さんに求められたのは、生産技術改革だった。当時は機械工業に比べ、窯業の生産技術が相当に遅れていたからです。

しかし杉原さんはその後、製陶関係の生産技術ではなく、金具製造の工場を率いることになりました。これがＴＯＴＯにとって大きな転換点になります。

もしも戦前期の金具生産のレベルが高かったら、そんなに簡単には抜かれませんよ。しかし、杉原さんの主導した改革により、ＴＯＴＯは10年経たないうちに、日本で断トツの金具メーカーになるんです。ああいう小さなパーツですから、統計がどれぐらい信頼できるものかわかりませんが、日本の総売上の5割近くを生産して、しかも品質の良いものをつくってしまった。

これはＴＯＴＯの成果でもありましたが、日本の金具産業全体をあっという間に変えることにもなったんです。

ＴＯＴＯで衛生陶器より金具の売り上げのほうが大きくなったのは、１９６２年**（昭和37）**のこと。陶器のマーケットと金具のマーケットとでは、発展性もまったく違っています。その時点で既に陶器屋さんでなく、金具屋さんになっていたわけですよね。そのほうが実態を表していたんだけれども、我々はずーっと陶器屋さんだと思い込んできたんです。

１９７０年**（昭和45）**に東洋陶器株式会社から東陶機器株式会社に社名を変更しているのは、象徴的な出来事です。東陶機器と名乗ることは、企業の姿勢をよく表していて、つくるものもそうですが、リクルートの際にも会社の体質をわかりやすくしています。また、創業時からの主要生産品目の一つであった食器から完全撤退して、企業の方向性を明確に示します。

そして、生産品目が多角化していく。そういうところからウォシュレットや、現在でいえば食洗機なんかも生まれていくことになります。

ちなみにＩＮＡＸの場合はシャワートイレといいますが、金具の部門ではなく陶器の部門から開発されたそうです。会社の体質が出ていて、面白いですね。

ユーザーの意識も変革

銀座にショールームをつくったのも、杉原さんの時代です。コマーシャルもそのころから派手になっています。

今ではＴＯＴＯもＩＮＡＸも単なる衛生陶器のメーカーではなく、衛生設備機器メーカーになっているわけですが、かつて衛生陶器というのは個人が選ぶものではなかった。家を建てるときも、どこかの工務店に頼めば工務店が適当に発注して取り付けていた。そういうのが、今では個人が「こういう

ものが欲しい」と主張するようになった。コマーシャルの影響は大きいですね。

そういうことで、私たちの感覚も変えられていったように思います。みんなが隠していると、なかなか言い出しにくいですが、表に出てくることによって「話しても大丈夫なもの」に変化した。タブーでなくなっていく。そういうことが、商品に対する清潔感を植えつけていったんです。まあ、日本の場合は欧米と比べると、それほど便器やトイレに対する忌避感が強くないというか、もとからおおっぴらだった一面もあると思いますけれど。

こうしてユーザーの要望が高まって、商品開発にも影響していくようになっています。一般消費者にとっては、身近でより快適なものがつくられる傾向にあるんじゃないでしょうか。

いったん、品質の良い水洗トイレを使い始めると、人々がその清潔感を増したトイレに求めるものは、どんどん変わっていきました。

昔、外にあったトイレに行くのが嫌で、家の中にあっても子供時代は夜は怖いと思ったりした。今、そんなことは思いませんよね。今のトイレは、そういう不浄感や怖さを払拭しました。

暖房便座一つでも全然違います。

昔だったら、寒いからなるべく我慢して行く回数を減らしていたものが、今はなるべく長く座っていたい快適な空間になっています。

あとは臭いがなくなりましたね。水洗にしたら臭いがなくなるわけではありませんから、それなりにすごい工夫をされているんだと思います。

求められるイノベーション

ただ一方では、それが良いことかどうかわかりません。排泄や臭いといった人間が持つ本来の姿を見えなくしてしまっているからです。その結果、私たちはそういうことをすっかり忘れ去ってしまいました。

住宅設備が消費財になっていったかというご質問ですが、便器は、まあ建て替えやリフォームのときぐらいしか、そう簡単には取り替えられない商材でしょう。ただ、便器は取り替えられなくても、暖房便座だけとかシャワー機能だけとかを付加することができるようになりました。水栓金具の成熟には、そういうメリットもありますね。

そういうやり方で、便器のライフサイクルを伸ばしていくことに、貢献できているとは思います。

本著では、敢えて水洗トイレと環境との問題には立ち入りませんでしたが、地球上のすべての地域に水洗トイレをくまなく普及させる方向性が良いとはいえないでしょう。

水には、NGO時代から興味がありました。農村開発で一番大切なのは飲み水で、第二は適切な排水処理をして衛生管理することなんです。つまり、「安全な水」と「適切なトイレ」です。

既に莫大なお金をかけて下水道が建設されている所では水洗トイレに優位性があると思うんですが、そうでない所では他の選択肢もあると思います。

と言いますのも、水洗トイレはやはりものすごく水を使いますから。これから先の水資源のことを思うと、違うことを考えなければなりませんね。もちろん、節水型の水洗トイレの開発は行なわれていて、初期は1回のフラッシュで20ℓも使っていたのが、今は6ℓを切っていますけれど、それでも将来的には水が問題になっていくと思います。

バイオトイレもいいんですが、これだけ人間が集中して住んでいる都市部で、それがやっていかれるかどうかはわからないと思います。

メーカーさんは売れるものをつくるという命題があり、どんどん付加価値を高めていかないとならない。それがないと製造業はダメになってしまうのですから、本当に大変だと思います。良いものをたくさんつくったら、価格が下がってしまうわけですからねえ。それでまた新しいものをつくる。

ですから、先程のお話でいえば、暖房便座とかシャワー機能とか、替え易いところを開発するというのは、メーカーとしてもいいことなんでしょう。

これからの一番大きな課題は、環境問題との折り合いをどうつけていくか。

日本の場合は欧米と違って、し尿が肥料として重用され、農村で管理していたという歴史があります。そのことでトイレの水洗化が遅れたわけですが、その時代はそのやり方でちゃんと循環し、機能していたわけです。

それが下水道が完備するまでの過渡期には、あまり性能が良くない単独浄化槽を使ったり、海洋投棄したりしていたわけですよ。

単独浄化槽の新設が禁止されるのは、ようやく2000年になってから。それ以前に設置されたものは、そのまま放置されている状況です。1989年の統計（**石井勲・山田國廣 共著『浄化槽革命―生活廃水の再生システムをめざして』合同出版 1994**）によれば、水洗化人口の実に20%が単独浄化槽を使っています。

だから、衛生的な水洗トイレといいながらも、水に流して目の前から消えてなくなっているだけで、決して本当の「衛生的」な設備にはなっていなかった。それは欧米でも経験され、今日なお世界各地でみられる状況でした。

こういったことは、お百姓さんがし尿を肥料として使っていた時代よりも、ある意味では後退したと言っていいでしょう。

世界人口の増加と水資源の分布、水質汚染の進行などを考慮し、下水道が完備しながらも、なおかつ循環型システムが求められるようになった今、人類に不可欠なトイレには、再び、新たなイノベーションが期待されているということです。

みずだより

町家の暮らし

うちとこの家は、蛤御門の変で起きた元治の大火のあと、再建されたもの。棟札によれば、1870年（明治3）の上棟です。杉本家は1743年（寛保3）に奈良屋の屋号で呉服商として創業しました。1767年（明和4）に烏丸四条下ルから今の地に移り、京呉服を仕入れて江戸店で販売する、他国店持京商人として繁栄しました。

奈良屋の江戸店は千葉にあって、私の祖父の時代に株式会社に組織替えして百貨店になりました。平成に時代が流れ、商いは杉本家の手を離れました。土地も建物も会社の資産でしたが、1992年（平成4）財団法人を設立し今日にいたっています。

みなさんが町家と聞いて思い浮かべるのは、ウナギの寝床のように間口が狭い家。でも、うちとこは表通りに面して店を構え、居室棟を奥に平行して建てて、両方を幅の狭い玄関棟で合わせる「表屋づくり」という形式なんです。

町家町家と言われるようになったのは、バブル期以降。古い建物がどんどん壊されて、景観を大切にする京都としては大問題。失われてみて、初めて「町家を保存しよう」と官民の心が一つになっていきました。

でも、みんな「うちとこって、町家やったん？」という調子。普通にあった暮らしだから、そんな呼ばれ方、せえへん。意識したこともなかったんですね。

表通りから見える虫籠窓の部屋は今は洋間になっていて、私の祖父母が結婚したときに改装しました。普通、店の間の2階は奉公人の居室。でも、洋間にしたときに天井を上げたので今は物置ぐらいにしか使えへん。町家といっても、こうした暮らし方に添った改装もされてきているんです。

でも、走り庭にあるオダイドコには、使われなくなって久しい竈もそのまま残されてます。嫁いで50年経つ私の母が、「お嫁に来たときには、もう、お竈戸さんに火を入れてへんかった」と言うてますから、使わないものをよく残したものです。商売をしていたときは奉公人もたくさんいましたから、このオダイドコが大活躍したんやないですか。奥には米蔵と炭小屋、漬物小屋もあって、大勢の食事を賄うための蓄えが備わっていました。

敷地内には井戸が幾つもあります。

「毎朝の井戸神様へのご挨拶が大変ではありませんか」

と言われることもありますが、うちとこは初代の新右衛門のときから西本願寺の熱心な信者で、三代目新左衛門秀明から七代目新左衛門為一まで、直門徒となって本山勘定役を務めました。ですから、神サン事は一切しません。神棚もないし、オダイドコにも荒神様を祀りません。お正月のお餅もお鏡でなく、お仏壇の御荘厳として五つ重ねにした輪取り餅を供えます。

でも、八坂神社の氏子でもあるんです。同社の夏の祭礼で、毎年7月の祇園祭は一年中で一番楽しみなハレの行事です。当財団では、屏風飾りをして多くのお客様をお迎えします。また、当家がある矢田町が保存する伯牙山のお飾り所となります。

「歳中覚」は、三代目によって書き始められたという暮らしの手元控え帳。二十四節気にのっとって暮らしていたころの大切な記録です。古い家の保存はなかなか大変なこと。でも、町家を残すのはもちろん、料理研究家として四季折々の食やしきたりも伝えていきたいと思っています。

杉本 節子

すぎもと せつこ

財団法人奈良屋記念杉本家保存会事務局長　料理研究家

杉本家の10代目を継承し、京の食文化を守る活動も行なっている。

http://www.sugimotoke.or.jp/

火用心
FIRESTOP

江戸東京博物館分館「江戸東京たてもの園」
（くわしくは45ページ参照）

家は家族の記憶装置

かつては家業や食によって「何気なく」家族でいられたのに、
家業も食も家族をつなぎ止められなくなった今、
家族のコミュニケーション部分だけを強く意識せざるを得なくなっている、
と藤原智美さん。
解決のための答えは１つではなく、家族の数だけあって、
各々が答えを出さなくてはいけないところまで来ています。
家があって、家族がいてこその、水まわり。
まずは、家族のあり方を見直してみました。

藤原 智美
ふじわら ともみ
作家

1955年福岡市生まれ。フリーランスのライターとして活躍後、1990年「王を撃て」で文壇デビュー。1992年に『運転士』で第107回芥川賞を受賞。1997年には、住まいの空間構造と家族の社会関係を独自の視点で取材したドキュメンタリー作品『「家をつくる」ということ』（プレジデント社）がベストセラーになる。主な著書に『家族を「する」家』（プレジデント社 2003）『脳の力こぶ』（集英社 2006）『検索バカ』（朝日新聞出版 2008）ほか

「家をつくる」ということ

いうまでもなく人は家で育ちます。人生でどんな住空間に育ってきたのかということは、その人の考え方、性格を形成している、と思うんです。

家というのは、日々そこで暮らしているものですから、自覚というものがあまりないのが普通です。ところが小説を書くときには、その人がどういう家に住んでいるのか、どういう家で育ったかということを考えざるを得ないところがあるんですね。

例えば、あるフィクションの主人公が２階建ての家に住んでいて、彼の部屋が上階にあると想定した。そのうちに彼が交通事故にあって、脚を怪我した。とたんに階段の上り下りが問題になってしまったんですね。介添えはいるのか、どうやって階段を上り下りするのか。我々は普段あまり意識しないけれど、平屋なのか２階建てなのか、団地なのか戸建てなのかというようなことは、かなり人の内面に影響を与えているんだろうな、と思ったわけです。

それで、『「家をつくる」ということ』**（プレジデント社 1997）**を書きました。家造りでは、ともすれば有名建築家が「これを設計しました」といって、「ここではこういう生活をしなさい」と押しつけることがあった。暖炉なんかをつくって、「ここで語らいなさい」とか、そういうある種の理想的な暮らしの設計図まで含めて建築家が設計していた時代があったのです。しかし、実際はそういうわけにはいかないんですよね。生活のリアリズムでは、そうじゃない。いろいろと疑問が出てきた。しかし、建築分野と暮らしの分野を結ぶものがなかった。そこで自分で調べて書いてみた、ということです。

リビングルーム幻想

高度経済成長期から１９７０年代にかけて「リビングルームというのが、日本の住宅の核になるべきだ」という漠然とした考え方の下で住宅がつくられていきました。

それで、理想としては家族が語らう、だんらんがある。たまにはホームパーティのようなことをやる。そういうことが計画されてつくられた。

しかし、実際に調べていると、そういう生活をした人はほとんどいないんです。いつの間にかそこにコタツが出てきて、家に帰ってきたお父さんが寝ているとかね。結局テレビ中心でだんらんはない、

とかね。そういうことが、だんだん明らかになってきたんですよ。

その状態が今、どう変わってきたかといえば、リビングルーム幻想というのはもうないんだ、ということがわかってきたということです。リビングルームがあるから家族だんらんができる、と考える人は、少なくとも「いなくなった」ということです。それくらい、局面は進んでいるわけです。

そういう状況の中で、１９７０年代から90年代にかけて、ワンボックスカーというのが流行ります。

僕は「走るリビングルーム」と呼んでいるんです。失われた家族間のコミュニケーションを取り戻すための、走る強制的リビングルーム。だって、車だったら走り出したら出られないでしょう。これに、ドッといくわけです。

しばらくはこれでよかったんだけれども、その内にみんなが携帯電話を持つようになる。走る強制的リビングルームも、みんなが勝手に電話でしゃべるし、メールするし、ゲームで遊ぶし、という状態になってうまくいかなくなる。そこに、今はきている。

つまり情報化社会というのか、ＩＴ化でここ10年の間に、暮らしぶりがものすごく変わってしまっている。それに合わせて、家をつくるということも、ものすごく変わってしまった。

空間の価値が低下する

もう空間の価値というのが相対的に低くなっている。つまり、家という住空間の価値がものすごく変質したんだと思います。

例えば、子供に「自分の部屋と携帯電話とどっちを取る？」と聞いたときに、「携帯電話」と答えるようになってきている。昔は、自分の部屋がものすごく欲しかったんですよ。そういう気持ちは今はない。携帯電話が持つ魅力に空間が負けてしまっている。

かつては、自分の部屋に友だちを呼ぶとか、または行って話をするとか音楽を聴くとかいったことをやっていた。今はそういう空間を行き来することは、しなくなった。むしろ携帯でつながっている。

これは、オフィスでもそうなんですよね。立派なオフィスを建てましたという時代ではなくて、情報ネットワークをいかにつくっていくかのほうが大事。立派なオフィス、イコール立派な会社、そして業績が上がる、という図式ではないんです。

そういう意味ですべての空間が価値低下を起こしているんです。その中に住空間も入ってしまったんです。だから家というものが文化的な価値を持ち、そのものさしになっていた時代は終わっていて、家をつくれば誰でも「幸せ家族が築ける」というのは幻想だ、と気づいたということです。

一緒に仕事をして飯を食う

それと家族の有限性に気づいてしまったということ。家族って永遠に続くように思ってしまうけど、せいぜい20年ぐらい。それぞれ独立したり、死んじゃったり。ましてや今は単身世帯がすごく増えている。もしくはご夫婦二人とか。そういう世帯がすごく増えている。

僕は『暴走老人』（文藝春秋 2007）という本を書いたんですが、家族の絆というのが空間的に保証できなくなって、老人が孤立してしまう。そういう状況の中で暴走していく老人が意外と多いんです。

じゃあ、今家族が家に何を求めるかというときに、非常に難しい問題が出てきていると思うんですね。

では、それは何か。

かつては家の中に仕事があった時代がある。農家にしても商家にしても、家の中に仕事があったんです。仕事を通して、家の中に家族が結びつくということがあった。

もう一つ、家には食があった。早く帰らないとご飯がなくなる。それはやはり、「食卓を囲む」という生活のスタイルがあった時代なんです。今はせいぜい鍋のときぐらいですよね、家族で食卓を囲むのって。

今は個食が進んでいますから、時間差でバラバラに食べてしまう。なかなか一緒に食べることがない。むしろ一緒に食べるという行為が、イベントになってきている。日常での何気ない食卓が、コミュニケーションになりにくい世の中になったということです。

このように仕事と食によるつながりがなくなったときに、何が残るのか。残ったのが「家族」。つまり、「家族」という関係だけが残った。家族の絆がなくなったとかいわれているけれど、僕はそれは逆で、今ほど日本人が家族の絆を意識している時代はないと思っています。

なぜなら、かつては仕事や食によって何気なく家族だったのが、仕事も食もなくなってしまうと残るのは家族のコミュニケーション部分だけなんですよ。家族のコミュニケーションだけが残るとすると、家族を強く意識せざるを得ないんです。

例えばそこで会話がないとすると、「会話のない家族」ということを、すごく意識せざるを得ない。楽しい家族という理想を意識するのならば「我が家は楽しい家族なのか」ということを意識せざるを得ない。

楽しい家族であることに価値を置いていますから、コミュニケーションをすごく意識して「楽しい家族であろう」とする。昔はコミュニケーションなんて意識しなくてもよかったのに。

「土間のある家」というのを見てきたんですが、昔は土間が農作業をする場として使われていた。爺ちゃん、婆ちゃんもいて、外で雨が降っているから土間で縄をなっていたりする。

そういうシチュエーションでいきなりお母さんが「うちはコミュニケーションがないわよ！」と怒り出すことはない。黙々と縄を編んでいるはずなんです。つまり、黙々と何かをするとか、同じものを食べるとかいうことの背景には、ある種の大きなコミュニケーションがあるんです。それがないから、言葉で補強しなくちゃいけない。そこがつらいんですよ。

そういう「つなぐもの」が言葉中心になってきたところに、難しさがある。

昔は通じなくとも同じものを食べて「おいしいね」って言っていれば、何となくわかりあえていた。心のつながりがあれば、少ない言葉でコミュニケーションが成立で

きていたんです。

家族に求められる情報処理

ここ10年ぐらいで家庭の中にも急速にIT化が進んでいます。本当はその節目節目で「パソコンは持つべきかどうか」など、確認してこなければならなかった。でも、どんどんモノのほうが先に入ってきてしまった。家族はそれについていくのが精一杯だった。

日々変わること、例えば子供が携帯を持ちたいんだ、と言い出したときに、会議をして対応を話し合うことを僕は「情報処理」と呼んだんですが、いろいろ新しい場面に遭遇したときに、ちゃんと情報処理をしなくてはならなかった。そして価値観を共有しなければいけなかった。それは、とっても難しいことですよね。みんな忙しいし。

だから僕は家という空間は、情報処理を生（なま）のコミュニケーションでやる空間になりつつある、と思っています。空間は、そういう機能を持つことを求められてきているのに、それをちゃんとやってこなかったことでいろいろな問題が起きているんだ、という気がしています。

そんな状況になった現在、なぜ、家族が一緒に暮らさなければいけないか、ということについては、ガストン・バシュラールという人が「世界に対して本能的に信頼がなければ鳥は巣をつくるだろうか」と言っているように、人間もそうなんですよね。

やはり男と女が出会って、巣としての家があったときに、子育てをするということを、家族以外の何かでやる、ということを今の人間社会はまだ持っていない。

少なくとも、子供を育てる、一緒に生活するのが家族である、という基本原理は変わらないんですが、それを取り巻く情報間環境とか空間の価値とかが変わっちゃった。

食がつくる記憶のパワー

僕は1955年（昭和30）博多の生まれなんですが、5歳か6歳のころの話で、親父がコカコーラを買って帰ってきたことがある。そのころは、まだあまりコカコーラを飲むことが当たり前じゃない時代だった。そのときのことはよく覚えている。

親父が帰ってくるなり、コカコーラのボトルをどんと置いて、みんながそれを囲むんですね。それで「まずはお父さんから」と言って、栓を抜いて一口飲むわけですよ。その瞬間親父が「いかん、これ、腐っとる」って叫んで全部捨てた。シンクに。それをまざまざと覚えている。父親が6年前に死んだんですけど、そのときに、こんなことを思い出した。

家族旅行に行ったことなんて、全然覚えてないんですよ。あのコカコーラ、どうしちゃったんだろう、ということは覚えているのにね。そういう思い出って、いっぱいありますよ。食にまつわることって、小さいころのことまで。実はそういうことって思い出の宝庫として日常にたくさんあるのに、今の人ってあんまり気がつかない。便利になっちゃったから。

なんでもあるし、すぐ手に入るし。個人個人が好きなものを手に入れる。コカコーラをどーんと置いて、みんなでわっと見る、という瞬間っていうのはもうない。

このように、家というのは家族の記憶装置である、と。それは家という空間の中で実は隅々に家族の記憶が染み込んでいる。記憶装置としての家の存在というのは、カメラやムービーなんかよりずっと大きい。実は食も同じなんです。

食ってものすごく意味が大きくて、お母さんがつくるもの、まあお父さんでもいいんですが、それがつくる料理が「マズい！」というのは子供としてつらい。やはり、家庭で食べていたいつものあの料理がおいしかった、と思い出すことが幸せな気持ちにつながるでしょう。

ともに支え合って生きていくとか、田植えを一緒にやるとか、コミュニティの中の家族とか、そういうことではなくなってきた。

結局、今の家族にとって大切なテーマは「思い出づくり」。極端に言うと「思い出づくり」のために家族がある。そのためにムービーを担いでいくようになっているんです。しかし、やはりムービーで「つくり上げられた思い出」ではなく、実は住まいとか食とかいうとても日常的なところに、その本質はあった。

昔の軍隊は早食いしなくちゃいけないんですよ。同じことですが、以前修験道の体験入門をしたときに、メシを1分で食えと言われた。それが修行なんですよ。

何でそうなるかというと、食とは快楽になるからです。快楽を禁止するのが修験道だったり軍隊なんです。

人間というのは、「おいしい」ということがものすごく好き。だからこそ、それを禁止するんですね。逆にいうと、それが日常的に家にあるということはすごいことなわけで、禁止するほどすごいこと。共有して「食べる」ことのすごさなんです。

よく子供はスパゲティを食べていて、お父さんは焼き魚、まあ現代のパターンですが、時間も違っていたりする。バラバラなものを食べる。そういうことは時代的に仕方がないかもしれませんが、一緒のものを食べることの意味というか、大切さということがあると思います。

孤立感は暴走のエネルギー

人は地縁・血縁・仕事縁に生きている。地縁というのは近年なくなってきていて、近所づき合いもしない。

今、ものすごく高齢者の万引きが増えているそうです。昔、地縁というのが生きていた時代は万引きをするとすぐに噂になった。噂は親戚にまでいっちゃう。今は地縁が薄くなっているから、万引きして帰ってきても、翌朝普通に生活ができるんです。つまり、歯止めがなくなっている。

「こんなことをやったらうちの家族はどう思うだろう」ということにも、思いが至らない。地縁だけでなく血縁もないから。まあ、血縁がないわけじゃないけど、つき合いがない。しかも定年になっ

て仕事縁もなくなると、一人。

歯止めがないし、孤立しているから暴走するんですよ。孤立感というのは、寂しい寂しいと言っているだけじゃなくて、実は暴走のエネルギーになるんです。もう、イライラしちゃうんですよ。日々のストレスが解消できていないから。だから、ちょっとしたことで爆発してしまう。『暴走老人』の取材で得た感想は、そういうことです。

家族がいれば、その歯止めやガス抜きになる。ただ、それは暴走を防止しているから、事件化しない。ほのぼのとした良い面なんて、事件にもなりませんから表に出ませんよね。家族が問題を未然に防いでいても、表面化しないで済んでいるから評価されにくい。

だから家族は事件絡みで悪い面でばかり登場することになる。引きこもりにしたって、家族がいるから引きこもれるんですよ。人間関係がうまくつくれない子供が、社会に放り出されたらどうなるかわからない。家族がいる中で5年なり引きこもって、6年目に出てくるかもしれない。それは、家族の持っている力なんです。そういうのが家族の価値なんですよ。

暴走老人の話をすると、いろいろな経験談が返ってくるのですが、暴走するのはだいたい小学校の校長とか会社の重役とかが多い気がする。つまり、それまで部下しか知らなかった、そういう関係でしか人間関係をつくってこなかった人が暴走する。老人になったら、誰だってただのおじいちゃんですが、それが耐えられない人です。

個が確立しない日本

高齢化社会って日本だけの現象じゃない。なのに、こういう現象は日本だけのような気がする。それは個人と家族の関係が、日本と特に欧米とでは違うからです。

振り込め詐欺というのが一つの典型なんですが、あれが逆にですね、親と偽って子供に「振り込め」という詐欺はないんですよ。子供と偽って騙す。これが日本の親子関係なんです。韓国は日本と似た状況かもしれませんが、「個」が確立しているほかの諸外国では、振り込め詐欺なんてあり得ないんです。

ただ、そこが日本の良いところでもあるんですよ。親がずーっと子供のことを心配する。つまり非常に特殊な親子関係なんです。

日本以外の国では、子供が成人すると「個」となって外に出る。そして「個」として、自分で新しい関係を築いていくんです。だから仕事じゃない、家族じゃない「個」としての自分というものがあって、例えばイギリスだったらパブに行ったりサッカーチームに属していたり、といった「個」としての「私（わたくし）」のつながりがある。

住み替えていくという方法

家と家族というのは、時間とともにマッチしないようになるんです。最初は夫婦二人で始まったのが、子供ができて家族が増えたり、親と同居したり、また亡くなったり。そうやって家族のサイズがどんどん変わっていく。

変わる中で、本当は住み替えていくという選択肢があるはずなんです。日本では、それができない。

できないのは、一発勝負で1回家を買っちゃったらそれでおしまいで、変えることはできない。せいぜい増改築ぐらいです。

それに比べて欧米では家族のサイズやニーズに合わせて住み替えることが当たり前です。だから、当然家と家族はマッチしているし、可能なんですね。

本当はそういうことが必要なんだと思うんですが、日本は中古市場が無いに等しいですから。

だからいろいろ問題が出てきていて、郊外住宅地というのは1960年代、70年代にどんどんできてきたのに、今はそれが限界集落化している。ものすごく部屋が余っているんですよ。もったいないですよね。

逆に部屋がなくて困っている人もいるんだから。そういう平等性を設けていけば、住まいというのはもうちょっとどうにかなる。

家族の空間、個人の空間

『「家をつくる」ということ』を書いたときは、90年代はじめまでの話なんですよ。携帯電話も、まだあんまり普及していなかった時代。この段階では、リビングルームとそれに付随するキッチンが重要だった。今は、寝室と風呂ですよね。それらが癒しの空間として求められてきている。だから、家族というより、個人がそこで癒されるというほうに主眼が置かれるようになったんですね。

キッチンの主流は、相変わらずオープン型。小さな子供に目が届くということもあるし、「私つくる人、僕食べる人」になりたくないという、心理的な原因もあります。

「私つくる人、僕食べる人」CM放送中止問題

1975年、インスタントラーメンのCM放映開始から約1カ月後に「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」のメンバー7人から「男は仕事、女は家事・育児という従来の性別役割分業をより定着させるもの」としてCM中止要請が起き、放送中止となった。

でも、キッチンがオープンだと、機嫌の悪いお父さんが帰ってきて野球なんか見ていると、蛇口の水がジャーッと大きな音を立てたりすることもある。そういうリスクも負わなきゃならない。

男子厨房に入ろう、とか言ってお父さんが結構頑張っていたりする。でも、家族にとっては案外迷惑なんですよね。おいしいかもしれませんが、材料費はいったい幾らかかってるんですか。残ったものはどうするんですか。やっぱり日常的な食というのは、残りものをどうおいしくするかなんですよ。

でも、それさえ否定してしまったら、何も残らないですから。そういう人は、やはり自分の父親とは違う、新しいお父さん像をつくりたいと頑張っているんでしょう。

趣味なだけじゃなくて、奥さんのほうが稼ぎがいいから食事は旦那が全部つくっている人もいる。ものすごく手際がよくて、おいしいんです。そういうスタイルも出てきている。新しい家族像ですね。そのお父さんは子供会を組織して、きちんと地域に根差している。それって、かつてお母さんが担っていたことですが、こういう自由さがないと、うまくいかない。

こう見ていくと、家というのが家族の空間から個人の空間へと変わりつつあるといっていいのかもしれません。寝室も個室化していますし。夫婦別室というのもあるし。

LD神話というのは、ある時期に崩れちゃったんですよ。

住宅メーカーは、いろんなことをやっています。1980年代には二世帯住宅というのも流行りましたよね。今、どんどん売りに出ているんですが、まったく売れない。それはニーズがないからです。

LD神話と二世帯住宅がダメになったときに、結局、何やっていいかわからなくなった。一生懸命マーケッティングしておかしなものもつくったけれど売れなかった。それで何となく風呂と寝室に落ちついている、と。

そのときそのときで対応していったら、ここにつながった、という程度じゃないでしょうか。

家族を「する」

1960年代から70年代に、錦鯉ブームがあったことをご存知でしょうか。

一戸建てを建てると、必ず池をつくって錦鯉を入れた。だから人間って、水が好きなんですよね。池があって、芝生があって。芝生の所でプールを出して子供を遊ばせたり。

しかし、維持するのが大変だから、その池もどんどん埋められていく。同じころに園芸ブームというのがあるんですが、庭木もその後減っていきます。当時は木を植えると大きくなることがわからなかった。手入れも大変だから、みんな切られちゃった。今、また第何次かの園芸ブームですが、植えるのはハーブとか小さいものだけです。

もともと水まわりといったら炊事です。火の周りに囲いができて、屋根ができて、家になった。だから竈は家の中心です。煮炊きが最大のテーマですから、そこには当然水もあった。竈が家の中心であるのと同様、水も家の中心だったわけです。それって、食べることが変わらない限りは普遍じゃないですか。

「キッチン不要論」というのもある。若い子たちにとって、コンビニと自動販売機があればキッチンはいらないと思っている人がいるわけです。その前段階として、包丁がない。俎板も当然ない。これでは食の記憶も家族の記憶も継承なんかされないですよね。

家族って、同じものを一緒に食べる集団なんですよ。それが別なものを食べてもいい、別々に食べてもいい、という風になってきたときに、実は壊れてくるんですよ。

では、これから家とか家族はどうなっていくんだろうか。おそらくその「解」というのは統一した一つの答えがあるんじゃなくて、各々の家族が出していくものだと思うんですよね。

100の家族がいたときに100の答えが、おそらくあるだろうと。ただ、確実なのは答え

を出さなくてはいけないということなんですよ。流されたらダメなんです。

だから「家族を『する』」と言っているんですが、「家族を『する』」という自覚というか自意識が問われるんだと思うんです。単に流されていくと、家族をしていく意義まで疑わざるを得ないところまできている。そうすると肝心なときに家族がいない、という状況に陥ってしまうかもしれない。そんな家族は意味がない。

まったく考えなしに自然に任せるということが、許されなくなっているということです。

個別の状況を受け入れて、咀嚼して判断を下す。家族間で話し合って結論を出す。そうして出てきた答えは、オールマイティなものではなくその家族にとっての「解」なんです。

僕らが子供のころっていうのは、一緒に飯を食うとか風呂に入るということが、みんな習慣として自然に行なわれていたんですよ。だからわざわざ考えて「解」を出す必要はなかった。

しかし経済要因もありますが、僕は外食や個食は既に一段落したと思っています。やっぱり家でつくって食べたほうが安いし、うまいし。そういう兆候が徐々に出てきたと思いますよ。

「チッチーのチ」の掛け声とともに、ベーゴマが唸る。江戸東京たてもの園の下町中通りには、ほかにも竹馬、ゴム段飛び、メンコで遊ぶ面々が集まる。ここでは、小学生もリタイヤした悠々自適組も一緒。日本の象徴的な風景の中に、新しい「個」のクラブが生まれている。
撮影協力／江戸東京博物館分館「江戸東京たてもの園」（くわしくは45ページ参照）

自分でつくれば安心できる良い素材を選んでいくこともできる。そういうものって、案外安くないですから、粗末に捨てたり食べ残したりできないでしょう。そういう雰囲気っていうものが、多少出てきている。

働き方にしても、一時在宅でネットワーキングがもてはやされた時代もあるけれど、「ちょっとこれはね」っていう感じでしょ。人間って「生（なま）」なんですもん、「生」を大事にする雰囲気に変わってきているんですよ。

空間の価値がどんどん低下して0になるかというと、そんなことはないんです。空間は必要ない、と言っていた時代にテレビ会議とかが奨励されましたが、ごく例外的にしか行なわれていないでしょ。だから会って話すというのは、なくならないんですよ。

携帯電話のCMで犬のお父さんが流行っていますけど、実はあれはよくできていて、犬と外国人の青年が家族の中にいるということは「言葉が通じない」ことの象徴。パロディですよ。「通じてないよ、うちも。お父さん、犬みたいだし」と感じている子もいるんじゃないかな。実はブラックユーモアだったのに、犬がやたら可愛くて人気になっちゃって、当初の意味とは違ってきたりしてね。

リビングだって人なんか呼ばないんだから、こんなに広い必要ないんじゃないか、とかね。

ある日本の有名な映画監督の話なんですが、お母さんが豆腐を手のひらに載せて包丁で切るのを見て、痛々しくて目が離せなかったと言うんです。そういう記憶がないというのはね、大きな損失だと思います。お母さんが電子レンジでチンしてくれた、コンビニの思い出、っていうんじゃあねえ。

まあ、料理が下手なお母さんだったとしても、人前で食の記憶を語れるっていうことを財産だと思える気づきが大切ですよね。

守るものと生まれ変わるもの

カール・ベンクスによる古民家再生

カール・ベンクスさん

カール・ベンクス&アソシエイト有限会社 代表

棚田の美しい新潟の山村で、
朽ち果てようとしていた古民家を再生して、
地域おこしをしようとしている人がいます。
ドイツ人の建築デザイナー、カール・ベンクスさんの
取り組みと暮らしぶりから、新しい住文化を探ります。

東京から車で3時間半、新潟県十日町市竹所（たけところ）という山村に、古民家を再生しながら集落の活性化に取り組んでいるドイツ人の建築デザイナーがいる。ドイツ・ベルリン出身のカール・ベンクスさんがその人だ。

単に仕事として滞在しているだけではなく、自ら再生した古民家に、アルゼンチン出身の奥様クリスティーナさんと暮らしている。

過疎が進む中、外国人であるカールさんが、なぜ竹所に住むことになったのか。その根底にある「磨けば光る原石」古民家を、再生する志をうかがった。

カールさんと日本

カールさんは、1942年ドイツのベルリンで生まれた。父は生まれる1カ月前に戦死。だから、カールさんは父親と過ごした思い出がない。

父は職業画家で、主に城や教会の古い絵を修復する仕事をしていたという。その父が建築家ブルーノ・タウトの本と日本の浮世絵を遺していったことが、カールさんと日本をつなぐ最初の絆となった。

ブルーノ・タウト（Bruno Julius Florian Taut 1880～1938）は、ドイツの東プロイセン・ケーニヒスベルク生まれの建築家、都市計画家。1910年ドイツ工作連盟に参加。革命への憧れを持って一時期ソ連で活動したが、ナチスが政権についたため、職と地位を奪われた。スイスを経て、日本インターナショナル建築会からの招待を機に1933年5月に来日。そのまま亡命。仙台の商工省工芸指導所を経て、高崎の井上工業及び、群馬県工業試験場高崎分場に着任し、竹、和紙、漆器など日本の素材を生かしたモダンな家具、日用品を、自身が経営した東京・銀座の「ミラテス」で販売した。1936年に近代化を目指していたトルコのイスタンブール芸術アカデミーからの招請により、イスタンブールに移住、客死する。桂離宮を高く評価したことは、日本建築の再発見を促すきっかけとなった。

やがて空手と柔道を習い始めたカールさんは、日本への関心を高めていく。1961年（昭和36）には、柔道の合宿でパリに行き、静岡出身の先生にも指導してもらった。当時、柔道の神様といわれた神永選手を東京オリンピック（1964年　昭和39）の柔道無差別級で破り、金メダリストになったアントン・ヘーシンク（Anthonius Geesink 1934年～）選手も来たそうである。「是非日本に行きなさい」と勧められ、お金を貯めて1966年の春に来日を果たした。24歳のときのことだ。

「神戸に着いたので、足を伸ばして京都に行きました。当時の京都は、私が思い描いたとおりの町でした。東京だって、大きな建物はまだあんまりなかったし、良い雰囲気を残していました。古き良き時代の日本の町並みを、私は壊されてしまうぎりぎり前に見るこ

双鶴庵の外観（右ページも）とキッチン。

とができたのです」

せっかく戦争のときも、アメリカが攻撃しないようにして保存したのに、日本自身が壊してしまったなあと、今の京都の変わりようを残念に思うそうだ。

建築デザインの仕事

日本におよそ7年間滞在したカールさんは、ドイツに帰国し、デュッセルドルフで建築デザインの仕事を手掛けるようになる。カールさんが目指したのは、ドイツ在住の日本人に和風住宅を提供すること。しかし、洋風を好む日本人にはそのニーズがまるでなく、かえってヨーロッパの人たちから支持されることになる。

日本では価値を認められなくて壊されてしまう、100年以上経った古民家。その建築部材をドイツに輸出して再生させるという仕事で、カールさんは日本とドイツを行き来しながら建築デザインの分野で活躍した。

ドイツも戦争が終わってからは、最低限の住居でも生活することをまずは優先して、小さい有り合わせの家がどんどんつくられたが、東ドイツには幸い古い家がたくさん残った。今、大変なお金をかけてそうした家を直して保存しようとしているそうだ。

「日本人だって海外旅行といえば、ローマ、スペイン、フランス、ロンドン。ドイツだったらロマンチック街道。それらはみんな、古い家や町並みを見に行くんでしょ。だから、やはりみんな古い家を魅力と感じているんです。

それに、ヨーロッパは石の文化だけではない。ドイツにもティンバーフレームの良い住宅が残っています。だから、日本の古民家の部材をドイツで再生したら、すごく人気が出たんです」

竹所との出会い

1993年、ドイツのお客さんの注文で、日本の古い民家を探していたカールさんは、知り合いの大工さんに誘われて、新潟の竹所に行くことになる。

2005年の町村合併で十日町になったが、それ以前は新潟県東頸城郡松代（まつだい）町室野だった。松代は山の傾斜地を利用した棚田が残る、水の豊かな土地柄だ。ずっと都会暮らしをしてきたカールさんだが、竹所に一目惚れしてしまった。

早速カールさんは、外国人でも土地が買えるのか、調べて行動を起こした。地元の人にも、受け入れてもらえるように相談をしたという。

「自宅の土地は、まあ、家はボロボロだったわけですが、あんまり安くて『0が1つ足りないのかな？』と思うほどでした。

ドイツに帰ったとき『日本で土地を買った』と言ったら、日本の土地がものすごく高いことを知っている妻は『私のことを殺す』と言いました。でも、私が買った値段を言って、竹所に足を運んで自分の目で確かめたら、彼女もすごく気に入った。良い買い物をしたと喜んでくれましたよ」

「双鶴庵」と名づけた自宅も古民家を再生したものだが、購入した当時の写真を見ると、なんて無謀な計画をしたのかと驚くほどだが、カールさんには「磨けば光る原石」という確信があったのだ。

「双鶴庵」再生

「入母屋だった屋根の形を兜にして、茅葺きにしました。

私がここに来たときは、地元の人たちは、多分1年ぐらいで逃げ出すと思っていた。そして、『あんなにお金をかけて茅葺きにして』とビックリしたみたいです」

ドイツでも、北のほうは茅も採れるから、茅葺きの民家もある。囲炉裏で火を焚かないと茅葺き屋根がうまく維持できない、と日本では思われているが「そんなことはない」とカールさん。ドイツで

は煙突つきの暖炉だったが、茅葺き屋根の保存には何の問題もなかったそうだ。

「茅から水分が取れればいいんです。腐るのは、水分が溜まっているから。それを乾燥させてやればいいんです。みんな、囲炉裏がないから、私の家のことを心配します。でも大丈夫です。昔は煙って大変だったんじゃないですかね。

天井は張っていなくて、茅が剥き出し。空気は常に抜けているんですが、一番厚い所で80㎝もありますから、緩やかに抜けるだけでまったく寒くないし、湿気が溜まることもありません」

カールさんが修復する建物は、必ず断熱材を入れ、ほとんどに床暖房を採用するそうだ。だから、茅葺きでも、ちっとも寒い思いはしないという。

昔のドイツでは茅葺きは貧乏人の屋根の葺き方といわれていたが、今は見直されて、とても流行っている。今の日本では非常に高価なものになっているが、ドイツではそれほどでもないという。

「ハンブルグに日本の大工さんを連れて行って茶室をつくったんですが、茅葺きでやりました。そのときは意外と安かったんですよ。だから、自分の家を日本で茅葺きにするときに、見積もりを見てビックリしました。大きさにもよりますが、去年やった家は６００万円かかりました。

茅葺きは火事になるからといって、許可が下りない地域もあります。昔はやっぱり、地震より火事のほうが恐かったんですよねえ。でも、実際にはそんなに簡単に燃えるものではありません。昔は漏電とか囲炉裏の火が飛んで、という要因がありましたが、設備も良くなっているし火も使いませんから大丈夫」

吹き抜けの大空間に伸びるキャットウォークを歩くと、梁が露(あらわ)しになった小屋裏が間近に見える。茅が音を吸収するので、話し声も柔らかくなる。圧倒されるような量の自然素材を目の前にすると、敬虔な気持ちとともに安心感や安らぎが強く感じられる。

カールさんが古民家再生を通して伝えたかったのは、見せびらかすことではなく、豊かさを感じる心を取り戻すことなのだろう。

いったんすべてを解体して、骨組みが組み直される。骨組みや再試用できる木部以外は、ほとんど新しくするという。壁には構造の補強のために筋交いを施し、断熱性能を上げるために断熱材、防湿シートを入れる。

実は外壁側に見えている柱はツケ柱。昔は室内側は竹小舞を入れた土壁で、外壁側に板材を張った。それが全部で5㎝ぐらいしかなかったから寒かったのだそうだ。

「今は、厚さ10㎝の断熱材を入れているから、壁厚は20㎝ぐらいあります。柱が直径15㎝しかないから、外から見える柱はツケ柱にしているんです」

壁が薄くても、雪が断熱材になるので、雪が降れば多少は暖かかったそうだ。

「この家はそもそも、たいした家ではなかったんです。庄屋の家とか、もっと立派な家はたくさんある。でも、やろうと思えば、これぐらいにはなる。そのことを、みんなにわかってもらいたい」

とカールさん。ほんの少しの空間を生かして、ロフトの寝室のそばにトイレをつくったり、バスルームにも床暖房を入れて、冬場でも快適な暮らしが営めるように工夫をしている。

建設当時はまだドイツに住んでいたから、別荘のつもりでつくった家。だから、キッチンも少し簡易的だし、冷蔵庫も小さすぎた。階段も急すぎる—こういった反省点はあるものの、クリスティーナさんもカールさんも「双鶴庵」での暮らしを楽しんでいる。

自宅の「双鶴庵」で実績をつくったカールさんは、竹所における2軒目の古民家再生を手掛けることになる。

右のバスルームとトイレは１階の半地下にある。
左はロフトの端っこに設置されたトイレ。
ロフトには、寝室と書斎（右ページ）がある。

竹所プロジェクト

外壁の色からイエローハウスと名づけられた家は、築２００年程経った竹所最後の茅葺き民家で、ここもかなり傷んだ状態だった。

「目の前で貴重な家が朽ち果てていくのを、どうしても放っておけませんでした。とにかく残したいと思った」

カールさんはあとのことはあまり考えずに、買い取って2軒目の再生に取り組む。

手入れのことも考えて、茅葺きではなく鉄平石を屋根材に選んだ。常駐でないと、冬場は茅が凍ってダメになってしまうからだ。

幸いイエローハウスは、東京に住む人に気に入られて、新しい持ち主が決まった。今は月に2回のペースで利用されているが、将来は引っ越してくるつもりだという。

イエローハウスを売るときに、カールさんが言ったのは、

「古いものを大切にしていくという価値観を、この竹所から発信していきましょう」

という一言だったとか。

かつて38軒あった集落まで戻すことは無理でも、あと5、6軒はつくりたいというカールさん。竹所プロジェクトと命名して、竹所を「古民家再生の里」にしようと活動を広げている。

その健闘ぶりが評価されて、２００７年（平成19）に第2回安吾賞の新潟市特別賞を受賞した。これは、坂口安吾の出身地である新潟市が「世俗の権威にとらわれずに本質を提示し、反骨と飽くなき挑戦者魂の安吾精神を発揮する現代の安吾に光を当てたい」として２００６年（平成18）に設立した賞だ。

でも、今のところ竹所に住んでくれるのは東京の人か、新潟でも町なかの人。地元の人は、古民家にはまだ抵抗感があるという。それでもカールさんは、歴史を刻んだ素晴らしい部材が、快適に暮らせる住まいとして生まれ変わることを実証しながら、「古いものを大切にしていくという価値観」を発信していくつもりだ。

竹所の魅力は水

「竹所に私が来たときには9軒しか残っていませんでした。みんな、空き家。もっと生活に便利な所に引っ越していった。引っ越したのは、除雪車がくる低い土地に住むほうが便利だから。

でも、35年程前に古い民家を捨てて引っ越したのに、自分の家の水が一番おいしいと言って、新しい家にパイプで水を引いているんですね。

水は生活に一番大切なものでした。だから、昔は湧き水にしろ、井戸水にしろ、水のある場所に家をつくったんです。竹所は水が豊かな場所です。そのことは飲み水や生活に必要な水に困らないという安心感を与えてくれます。

水があるということは、食べ物もあるし、動物もいるということ。それは、生き物を養う豊かさがあるということなんです。だから、安心できるのでしょう」

春になったら、村にある何百年も前からの湧き水の所を石積みにするという。今は、塩ビ管で引いてくるだけの味気ない仕組みを、少しでも風情のあるものに変えようとしているのだそうだ。竹所プロジェクトとして取り組んできたカールさんの働きが少しずつみんなにも伝わってきたようである。

再生への思い

「私が買ったときの値段を考えると、土地にも家にも価値が認められていなかったということがわかります。解体するとお金がかかるけれど、誰かが買うと処分できるから好都合、と思っていたかもしれません」

建築家たちは、新しい作品をつくりたいから、「壊したほうがいい」と言うし、大工たちも修繕と

上の写真は再生前の事務所棟外観。本当にボロボロだ。
左ページは、事務所棟。カールさんのオフィスは迫力満点。採用している窓はドイツ製のペアガラス木製サッシ。桟がペアガラスの間に挟まっていて、掃除がしやすい。
下の写真は、再生前の双鶴庵。キッチンにいるのはカールさんのパートナークリスティーナさん。

いう汚い仕事より、新しい仕事のほうが早くできるし、きれいだし、良いと思っている。

「大工さんとはいつも闘い」と言うカールさん。古い柱の一部でも腐っていたら、すぐに全部新しくしようとする。本当は日本は世界中で一番、木を接ぐ技術を持っていて、傷んだ所を何度も接ぎながら使い続けていた。地震がある国なのに平気で100年ぐらいは保たせていたのだ。それなのに今の大工はやろうとしないから、若い大工と組むほうがチャレンジ精神があっていいという。

「残したいと思っても、面倒くさいから、大工さんたちが『新しくしたほうが安いですよ』と言う。安いわけがないでしょう。昔と今じゃ、材料の質が全然違う。同じレベルのものが欲しかったら、いくらお金を積んでもそろえられません。本当に勿体ない。

プレカットされてきて組み立てるだけの家は、技術がいらないから今のままだと大工さんの仕事もなくなってしまいます。古いものがあれば、それを直すために技術も守られるんです」

ドイツには文化財でなくても、記念物として残そうという法律があるという。将来の思い出のために残そう、というもので、100年以上経った建物を壊してはいけないそうだ。もちろん、維持するための修繕費などは国から支援される。日本には、ドイツと違って、景観を守るために建物を規制する法律がないから、個人の自由で壊されてしまう。

「田舎に行けばブローカーがいて、こういう古民家を500万円ぐらいで売っています。

ちょっと風が吹けば煤が落ちるし、水まわりはまともに使えないし、寒いから、奥さんは1回来たらもう来ません。男の人はお酒を飲んで騒げば楽しいけどね。だから、いくら安いからといって、そんな古民家を買っても、別荘としても使えないんです。

ちゃんと直せば、やはり3000万円ぐらいはかかります。でも、みんなが価値を認めるような良い家にしなくては、住む気になれないし意味がないんです」

決まり事はない

日本では開口部が大きいために筋交いは入れないで、梁より上の所の構造でもたせるように考えられていた。日本は障子を開け放つと、すぐ庭。自然と一体となって暮らしていたのだが、夏を意識するあまり、冬のことはあまり顧みられていなかった。断熱のことは、まったく考えられておらず、冬の寒さは我慢するものだった。

ドイツでは、開口部から熱が逃げるのを少しでも防ごうと、サッシが工夫されていった。オフィスに使われているドイツ製のペアガラスサッシは、2枚のガラスの内側に桟が入っているから、掃除がし易い。

日本では、木製サッシは防火の問題で、町中では使えない。だから、味気ないアルミサッシを使うことになるが、断熱性能が木より劣るから、ペアガラスでも結露する。ドイツは逆に、アルミサッシは特殊なもので、高いのだという。

またドイツには既製品がなく、サッシも全部特注。みんなが自由に家をつくるから、規格サイズがないのである。こういう背景を持ったカールさんの設計は、決まり事に縛られることがない。

「私は風水のことは何もわからないんだけれど、トイレをどこにつくって換気をどうするか、というようなことは、当時の家づくりにとってとても大切なことだったんです。なぜなら、自然の力でやらなくてはいけなかったから。今は、電力などを使って換気をすることができるようになりましたから、昔ほど制約を感じる必要はありません。

私は日本の古民家に先入観がないので、水まわりも間取りも自由

につくることができます。日本人がもし、古民家の再生をやったら、まったく違ったものをつくるでしょう。

古民家の骨組みは、今ではもう手に入らない材料だし、時間が経って得られた経年変化の味わいは、新しい材料には備わっていない。だから、大切にしなくてはいけないのは骨組み。人間と同じで、骨組みがダメになったら家はおしまいです。骨組みさえ残せば、あとはみんな変えてもいい。

ほかの部分は、今の暮らしに合ったように、直していけばいいんです。特に水まわりは毎日使うものだし、機能的でないと快適な暮らしはできません。一番、改善しなくてはならない部分ですね」

残すべきものは残し、その人らしい暮らしを快適に営むための機能は新しくする。当たり前のようだが、先入観にとらわれていてはなかなか実行できないことをしてくれるから、カールさんには世界中から仕事の依頼がくるのだろう。

エコもバランス

「地元の土を使った土壁もいいですが、あんまり断熱効果が高くないんです。ただ防寒というだけではなく、これからはエネルギーのことを考えて断熱に工夫をしなくてはなりません。

ドイツでは25年ほどまえから研究されていて、個人の家でも実際に採用されていますが、地熱利用をしてみたいんです。これを稼働するのに電力がかかりますが、それでも電気使用量が3分の1ぐらいで済みます。日本は火山国で、温泉がどこででも出るんだから、利用しない手はないでしょう」

とカールさんは新しい取り組みに意欲的だ。

日本では、何かやろうとすると、すぐに「予算がないから」と言われるけれど、エコロジーに関心が集まっているから、やり始めたら早いのではないかとのこと。

断熱材のことも、カールさんが始めたころは入れないのが当たり前だったが、今では入れるようになっているし、窓ガラスもだんだんペアガラスが標準になってきた。

カールさんに、自分の家がこれからどれぐらい保つと思うか聞いてみた。

「木の部分はずっと大丈夫でしょう。基礎はコンクリートだから、80年ぐらい。でも、基礎はジャッキアップしてやり直せばいいんだから、まだまだ何百年も使えるはずです。

ドイツでもエネルギー0ハウスが流行っていますが、カッコ悪いんですよ。屋根にはソーラーパネルを並べて。そこのところは、やはりバランスだと思いますよ。エコロジーと美しさと経済性と。

手を入れながら何百年も使うためには、価値を認めて大事にすることが大切。それには、やはり美しいことも重要な要素なんです」

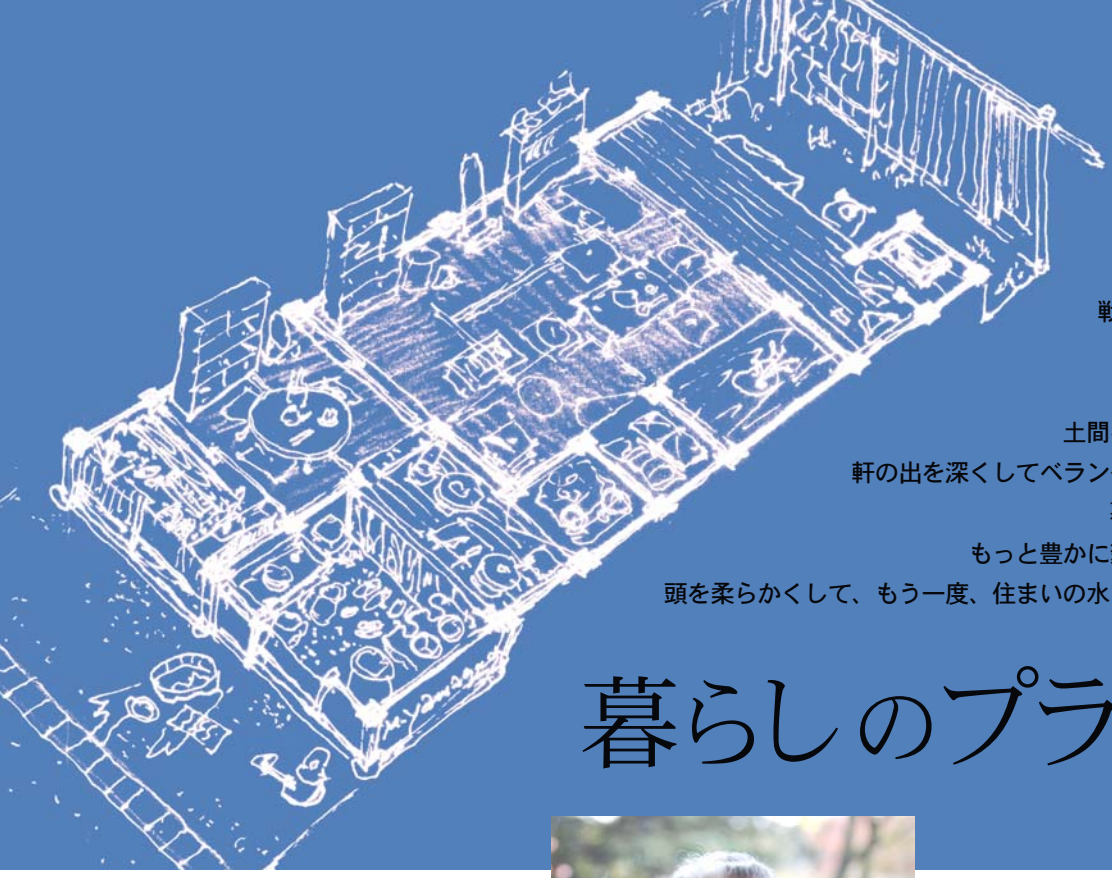
国土交通省の調査では日本の住宅の平均寿命は26年。それを少なくとも100年に伸ばすことは、環境や資源の視点からも有意義なことだ。

そして何よりも「使い捨て文化」に慣らされ、自国の文化すら捨て去る恐れがあることに、カールさんは気づきを与えてくれた。

愛着を持ちつつ、使いながら維持していく住まいをつくるには、今の私たちの暮らしに適した機能と、変わらず守るものを共存させればいい。

家と生業が切り離された時代に、多くの暮らし手は、便利を善しとして都会に出て行った。古民家は、守るべき価値があるものとは思われずにうち捨てられたのだ。

今、美と持続性が融合した姿として再び古民家が注目を浴びている。これを単なる風潮として終わらせてはならないだろう。



イラスト：『ちょっと昔の道具から見なおす住まい方』（王国社 2008）表紙より

今の住まいは
戦後の住宅難解消のために生まれた
集合住宅に影響を受けすぎている
と山口昌伴さん。
土間を再評価して通り庭をつくったり、
軒の出を深くしてベランダに風呂をつくったりすることで、
暮らし方も、水とのつき合い方も、
もっと豊かに変えることができるとも言います。
頭を柔らかくして、もう一度、住まいの水まわり設計を見直してみましょう。

暮らしのプランありき

山口 昌伴

やまぐち まさとも
建築家・道具学会会長

1937年大阪府八尾生まれ、京都育ち。岡山、彦根を経て東京へ。早稲田大学建築学科卒。住宅設計から生活研究の道へ。専門は住居学、生活学、道具学。道具学会会長、座る文化研究所長、日本生活学会編集委員、日本産業技術史学会理事。

主な著書に『台所の一万年』（農文協 2006）『水の道具史』（岩波新書 2006）『ちょっと昔の道具から見なおす住まい方』（王国社 2008）

床の間は舞台装置

日本住宅公団（現・独立行政法人都市再生機構）などがつくってきた集合住宅というのは、「どうすると都市に集まって住めるか」という役割のために生まれたものだから、それがモデルになって戸建て住宅ができちゃっているというのは、大きく見ると失敗だったと思います。

だから水まわりをどうするかといっても、最初から間違っているから、根本的に考え直さないと小手先でどうこうしようたって話にはなりません。

ドイツでも、第一次世界大戦直後に戦後の復興ということで住む所がいるといって、つくったのが現在の集合住宅の原型になったのは、不幸な話。その狭小住戸の壁と壁の間に棚板を何段も渡してシンクを落とし込んだり小扉をつけたのがフランクフルター・キュッヘ、システムキッチンの原型なんですよ、それを日本でアリガタがってるのもヘンです。

日本もそうですよ。初期の公団の2DKが12坪。倍ぐらいの広さから始めればよかったのに。桁が違っていたというか。ただ当時は、あんなものでも高嶺の花で、抽選に当たったら大喜びという貧しい時代だったわけです。

（上の図：自著のイラストを見ながら）

この本の表紙に使ってあるイラストは、東京・佃島にあった棟割長屋の間取りです。玄関の土間に上がり框がついていて、入ると二畳の前室があって六畳の座敷がある。たったこれだけの家に一畳の床の間がある。二畳の前室には、普段は卓袱台が置いてあって、家族がご飯を食べている。お客さんが来ると、卓袱台の足を折って片付けた。そのために卓袱台というのは脚が折れる仕組みになっていたんです。

つまり、家が舞台。お客を迎えるという大芝居を演ずる舞台には、普段用の卓袱台が出てきたらツヤ消し。それで、大正時代に卓袱台が一気に普及するんですよ。

そういうことが、大正期の家を見ていくとわかってくる。だって、何で脚折れの卓袱台が、日本の住宅の原風景みたいに定着したんだろうって、不思議でしょ。都市に人口が集まってきて、こんな狭い家に住まざるを得ない、だけどお客さんが来たときにはここで挨拶をして、床の間の前に座らせないと、もてなしたことにならない。そういう風に、間取りというのができていたんです。

この長屋に住んでいた人を捜し出して、話を聞いたんですよ。町のほうで水道屋さんをやっていた。昼飯を食いながら当時の話を聞いたんだけど、子供が13人いたんだって言う。親を入れたら15人もの人間が、ここに寝泊まりしていたんだからすごいね。

お客さんというのは、だいたい前もって来ることがわかっている。故郷では親が庄屋かなんかやっていて、隣村の人まで来たらしい。

今では想像もつかないが、目黒区は昭和初期まで筍の特産地として知られていた。〈旧栗山家主屋〉は、「年寄（としより）」という役職の家柄で、長屋門を構えることを許された格式の家。目黒ゆかりの竹林が残る〈すずめのお宿緑地公園〉内に1984年に移築、公開されている。江戸時代中期の様式で復元保存されており、水甕、竈がある土間での暮らしが体感できる。

社会科見学はもとより、学芸大学から碑文谷の〈目黒区古民家〉を経由して西小山辺りまでの散策路として人気が高い。毎日竈に火が焚かれ、沸かした湯でお茶がふるまわれている。

撮影協力／目黒区古民家〈旧栗山家主屋〉東京都目黒区碑文谷3-11-22　問い合わせ：めぐろ歴史資料館　電話03-3715-3571

「あそこの息子は東京に行ってる」って。子供たちのうちで挨拶ができる子は、ここでもって挨拶をしてね、こっちを通って裏から逃げて、近所の家に行ってお客が帰るまで遊んでいる。場合によっちゃ、夕飯までごちそうになったりしてね。そういうことができる家だったし、近所付き合いだった。その間、お客さんは床の間を前にして一献傾けたりしてね。そういう演出ができたってこと。

二畳と六畳、ふた間しかないのにまるまる一畳の床の間！　今ならそんな無茶な、と思うけど当時はちゃんと客をもてなせなければ家じゃなかった。玄関先で追い返したら郷（くに）に帰って何と言われるかわからない。床の間がなければタコ部屋だ、上京は失敗だったからと、親から「帰って来て畑をヤレ」と指令がくる。生活の型が住まいの型の決め手だった。今どきの家は型なし、じゃないですか。

水まわりは土間と半屋外、という型も見事に決まってますよね。

水を溜めて使う知恵

昔、嫁取りの仲人が輿入れ先を見分するのに、水場の遠さと井戸の深さを確かめたそうです。毎日毎日のことだから、ほんの少しの違いでも積み上げれば大きな差になる。水場の遠さは、手桶で汲んできた水を水甕（みずがめ）に満たすときの回数に、井戸の深さは、釣瓶（つるべ）で汲む回数に如実に出たんです。

そんなに大変な水汲みだったら、筧（かけい）を掛けて、山から水を引いたらどうかと思いますが、労働を軽減することをはばかるような精神性もあったように思います。

低い身分の者の生活保障は「働き者」かどうかで計られたので、怠け心を見せられないという気持ちが、どこかで働いたのでしょう。

そんな精神性もなにもかも、明治時代に水道ができて各家の中に入ってきて、いろいろなことが変わっちゃうんだけれども、初期のころはそれまでの水の道同様、1軒に1カ所、井戸があった所に水道管を立てて水を汲んで、そこから運んでいって使ったという一時代があった。

そのことは、大正時代の雛道具にも見られます。流しの上に水道の蛇口がないんですよ。元の井戸の所に水道を引いてきて、そこから手桶で運んで使った。それが流しの上に蛇口がきてしまうと、それはもう、絶対に節水なんてできないわけですよ。

集合住宅になると、高架水槽に水を溜めていますから、1階の人が一番圧が高くなる。そういう意味で1階の人が一番水を浪費しているだろう、と。

各家で、水をいったん溜めたらいいんですよ。溜めておく間に、水の質を良くすることもできますし。だから、水はいったん溜めて使う、というのは一つの選択肢になるんじゃないでしょうか。災害時にも役立ちますしね。

土間の復権

次ページのイラストは集合住宅における革命的なプランなんだけど、まず今の集合住宅には出入り口が一つしかない。これはマチガっている、勝手口と玄関に分けるべきですよ。

勝手口と玄関というのは、全然性格が違うものですよ。玄関というのは、まあお客様が来たときのもの。送迎パフォーマンスをする舞台として存在するわけです。勝手口というのは勝手な所だから。

それを一緒にするというのは、滅茶苦茶なことです。それで今どきの玄関は足の踏み場どころか、靴の踏み場もないっていう状態。そんな凄絶な所でお客様をお迎えできないでしょう。

それにコートだって外に出るときに着替えるわけだから、何も寝室のクローゼットの中にある必要はない。それで玄関のそばに「変装室」というのをこしらえたんですよ。要は蔵なんです。

勝手口のほうは土間にしておけば、泥つきの野菜なんかも置いておける。キッチンとダイニングがあって、ダイニングは土間の続き。「土間で飯を食おう」というプランです。こう考えていくと、一度も上がらないうちにベランダまで出ちゃった。つまりこれは通り庭。これでベランダが生きてくるんですよ。今のベランダは死んでいる。

なぜ死んでいるかというと、クッションになる場所がない。玄関からすぐ部屋になって履物を脱ぐ。それにしてはベランダに出るときの靴を脱いで置いておく所がないでしょ。室内に置くと床が汚れるし、ベランダ外に出しておくと履物が汚れる。ベランダでサンダル履きで土いじりなんかすると足が汚れるけれど、這って風呂場まで行かなくちゃならない。それというのも、プランに沿って空間が考えられていなくて、空間がつながっていないからです。土間がここまでつながっていれば、水への考え方も変わってくると思う。

ベランダに置くような屋外家具なんかも、取り込む場所がないから出したら出したきりになる。だから外でくつろごうなんて考えると、出しっぱなしにして雨で汚れた家具をきれいにしなくちゃならないから、一仕事なんですよ。

風呂も同様です。「身体を洗う」ということと、日本人が考える「湯に入る」こととは違う。身体を洗うというのは、芋を洗うのと同じ。湯に入るのは、精神のリフレッシュなんです。それで、ベランダをちょっと広くして岩風呂をこしらえたんです。

それと軒の出。建築基準法で1m以上軒が出ていると建物面積に含まれてしまうから、ということだけで、こんな大事な空間を日本中こぞって1m以内に制限してしまったんですよ。馬鹿みたいなんです。片持ちで3mぐらい出すのは簡単ですよね、そうすればずっと使い出のある空間ができるのに。

つまりプランがないのに水まわりは考えられないし、そもそもそのプランが狂っているのに、水まわりを描いたってしょうがないじゃないか、というのが僕の考えです。鼻歌まじりでパパッと描いちゃったんですがね、これが100㎡でできるんですよ。

今はね、やたらに部屋を仕切って、結局はモノをでたらめに配して混乱させている。ナンセンスなんです。

プランありきの水まわり

私が所属している道具学会では「茶道」を拡大した「生活道」というのがある、と言っているんですが、お茶の飲み方一つに作法があるなら、メシの食い方にも作法がある。水にもその使い方に作法があって、お茶事のように表や裏があって当然。水栓一本槍でなく、選択肢があれば面白かろう、と。

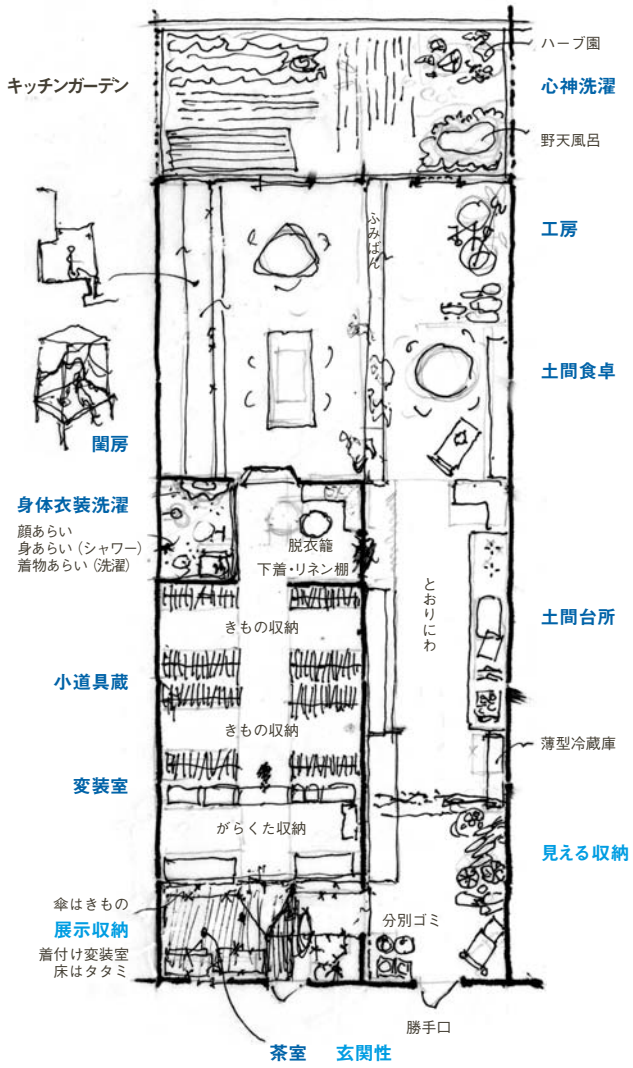
例えば、座り流しの勧め。

調理と食器洗いとはまったく別の仕事なんですよ。水道敷設前には、台所の水甕に水が満たしてあったとしても、用途に合わせて水場、井戸端、川端のほうへ出向いて行った。泥つき野菜を洗い上げて切るのは屋外の水場で済ませたし、膳椀も月に1回まとめて井戸端で洗いました。

「台所は動線を短くしろ」なんてつまんないことを言っているけれど、日本では調理と洗いものは本来別の仕事。だから設計自体が間違っている。西洋ではそうなっているからといって、シンクを調理台の隣にはめ込んでしまった。間違い設計のキッチンで水まわりをどうしよう、と考えたところで、いくら考えても答えは出てこないでしょう。

川端で水を使っている風景、そういう水の場の景色を、そういう目で、日本中で見直してみることも大切ですね。田舎の良い所に引っ越したのに、都会で苦し紛れにつくってしまったプランの家で暮らしているなんていう皮肉もありますしね。

今はいろいろ見直しが進んで、屋上庭園だ、家庭菜園だっていう話にはなっているけれど、トイレのところではあんまり変わってい



通り庭のあるプラン

ちょっと昔の和の住まいは、お座敷（接客演出の舞台）と普段の居どころ（高床の板の間）、そして働く場としての土間が三分の一ずつを占めていた。その土間が失われて台所を含めた水づかいの場が失われて不自由な住まいと化した。土間に置いた椅子・テーブルも活きイキと息を吹き返して見える。本来土間に置く家具だったから、当然だよなァ、と山口さん。

イラスト：著者のイラストを編集部にて一部修正

ないね。道具学会では大阪で箱をテーマに会議をやったことがあります。その中で出た話ですが、日本語で普通に「箱」と言ったらオマルのことだったんです。

十返舎一九（1765〜1831年）の『東海道中膝栗毛』（1802年享和2）が書かれたときには、すでに江戸に砲台ができているんです。だから弥次さん喜多さんの時代というのは、日本文化の最後なんです。そこから50年かそこらで、開国をしている。

そこで弥次喜多道中の中にね、旅の途中でおしっこをしていけって言われる場面がある。大根3本と引き換えにね。当時の日本のトイレは、肥料庫だった。同じころに西洋では近代化だっていってトイレの水洗化を進めていた。どっちのほうが文明的か、と私は言いたいですね。

ベランダでコンポスト穴をつくって、生ゴミはそこに捨てる。トイレも箱を使って、その穴に埋める。僕の育った東京近郊の家で、僕はごみ穴掘り係だったけれど、1年で穴は1つ。分解するから、そんなにいっぱいにならないんです。庭は50坪ぐらいだったけれど、いろいろなものが収穫できた。「食べられる庭」です。木陰をつくる藤棚をぶどう棚に仕立てれば、「ワインが採れる空調機」でしょ。ホウキ草を植えておけば、「掃除道具が採れる庭」。あれは食べることもできるしね。

こういう暮らし方のタイプがあって、水まわりも決まってくるわけだからね。

13人子供がいたあの家にとって、床の間が占有する一畳の重さを考えたら、そういう暮らしをちゃんと設計しているところがすごいと思う。設計って、こういうことだったんだなあ、と思わされましたよ。現代でも大切にすべきものがあるに違いない。今さら床の間じゃないだろうと、「水場や台所から住まいの再設計を」と僕が唱えている理由です。

醒ケ井（さめがい）の井戸ならぬ川戸：　各家の前、石段下りると川端の水場。鮑（あわび）の貝殻には孔が並ぶ。タワシを入れて握って振ると水切れがよい。鮑とタワシは全国的にセットだった。（撮影／山口昌伴）

都市生活にも工夫が必要

僕は道具学会の常設のサロンとして高田の馬場の喫茶店を使っています。そこに学会員が岐阜の人を連れてきた。食育ならぬ木育をやっている、まだ若い人です。その人が言うにはね、やっと自分の運動に対してエコーが返ってくるようになったと。

岐阜は森林で生きてきた県です。過疎が進んでなんとかしないと、といってできたのが県立の森林文化アカデミーで、徐々に人が戻ってきているそうです。その人たち、交通の不便に耐えるために戻ってきたわけではない。そこで考える力のなくなっちゃっている人たちにモデルを示せれば、もっと人が集まってくるんじゃないかと。

その一つに、自給自足に近い生活ができるという魅力がある。そのほうが安全だから。それを都市にも応用できるはずなんですよ。さっきのベランダをちょっと広くする、ということで可能になるんだから。工夫次第です。できることはいろいろあるんです。

僕は農村出身というわけではなく、東京の近郊で充分そういう暮らしができていたんです。

このごろ、通信技術の発達や交通網も発達してるから、都市に集中しないで分散して住むことにも可能性が出てきていますよね。でも、「都市に集まって住む」という役割のために生まれた集合住宅に生まれ育ったから、その条件が外れちゃったらなんにも考えられないのね。

その縛りを外されちゃったらなんにも考えられない。どこにでも住んでいいよ、と言われたときにハタと困ってしまう。それは、住む所だけではなく、水まわりについても同じです。

我々は洋館建てを有り難がるけれど、洋というのは北緯50度の地域なんです。それを日本に持ってきてモデルにするなんて、馬鹿げてますよね。東南アジアの国々を旅するとね、やはり金持ちが北緯50度の家を建てたがる。本当の大金持ちはクーラーが入れられるからいい。下々は床もスケスケ、壁もスケスケだから快適なんですが、小金持ちはクーラーを入れられないから一番暑苦しい。馬鹿の見本ですよ。日本も同類の馬鹿を重ねてきた、もう卒業しましょうよ。

家業だから一緒に飯を食う

昔は、使うものといらないものを、季節ごとに蔵から出し入れした。だから今の台所のように収納がたくさんついていることに魅力を感じるんじゃないですか。だから僕はシステムキッチンは「タンスの上に流しを落とし込んでいるだけ」と言っています。

日本人はね、しまうことが不得手になったんですよ。しまうとね、今の人は「なくなった」と認識し、たまたま開けて見つけたときには「発見」するんです。それで二度となくならないように出しておく。だからモノがあふれて片づかない。蔵があった時代には、ちゃんと片づけていたのに。何もかも、生活の場に出しっぱなしにしておくことはないんだよね。

消費社会というのはイギリスで最初に成立するんです。自分で使うものではなく、他人が使うものをつくって売ることで生活が成り立ったのが、16世紀から17世紀後半。つくれば売れる、ということで産業革命が起こり、進歩発展という「量の時代」になる。この時代の精神は「進歩発展」だったけれど、「どこへ」という目標が欠落していた。それで消費財を大量生産して売るという消費産業社会

が成立した。消費産業社会ではね、商品は買ったときに消費が完了するんですよ。生活者にとっては、その先で商品が道具になれるかどうかが問題なんです。

工業デザイナーというのは、本来、生活者を代表する立場でつくるものを考えなくては、悪の道だよと言ってきた。

消費産業社会では目的がなくて量的な進歩発展できた。それがもう限界に達していることは、いろいろな事件でも明らかになっている。生きている甲斐がない、というところまで来ちゃった。生活産業社会へ、という第二次産業革命が起きる必要があるんです。

第一次産業革命以前の仕事について、見直してみましょう。塗師（漆職人）は親方に叱られながら仕事をする。職人があんまり手を入れるとコストがかさむから、親方は程々にしてほしい。でも職人は手をかけて完成度を上げたいから親方の目を盗んで手をかける。管理する親方だって、もともとは自分も「手」だったわけだから、むげに叱りきれない。それでなんとか食べられるぎりぎりのところでやっている。

労賃のことも忘れて、なぜそんなに手をかけたがるのかというと、それがもともと家業だったからです。親がやっていてそれを継いでいく。よくよく考えたら、農業だって家業だった。だからこそ、一つ屋根の下にいて、一緒に飯を食う意味がある。今は家業がないからね、飯を食う意味もないんだ。

力を合わせていこうね、っていうこと。派遣労働の問題も、根っこの部分は働く意義の喪失にある。

本来、仕事と労働とは違うんですよね。仕事の中にも労働の形はあるけれど、イコールではない。

中国の水郷地帯で、小さな舟をつくって生計を立てる村に行ったことがあります。家族総出で舟をつくっていて、子供たちはその木っ端で遊んでいる。

それがプラスチックの舟をつくる工場ができて働きに出るようになった。すると、同じような仕事内容なのに、労働者がとても惨めな様子になる。そういうのを見ると、やはり仕事と労働とは違うのだな、と痛感しました。

水屋に収めた川戸：水のめぐる町・雨森にて。水路を我が家に引き込んで使い水に。白菜を洗ったり、洗面も洗濯もここで。（撮影／山口昌伴）

台所の見直し

人にはそれぞれ生き方がある。それに見合った家や水まわりを設計できるように、生活設計家も勉強しないといけないし、暮らす人もスタイルを持たなくては良い暮らしができないということです。

医食同源って言いますよね。正しく食べることが健康を保つには一番いい。でも食品が商品にされると、季節を偽る不自然食品やおいしそうに見えて増量材や保存材を放り込んだ見せかけ食品、手軽に食べられるけれど何が入っているかわからない偽装かもしれない加工食品があふれています。

また、昔だったら食べていた大根の葉っぱとか魚のあらも、商品化の過程でゴミとして捨てられています。家庭でも手をかけることを面倒くさがって「食べられる生ゴミ」にしている。こうしたことを反省して、「安心、安全な食材は自分で調理しなくては」という気運が生まれ始めてきました。しかし、自然態の食材はサイズが大きいし、下ごしらえのための場所や保存のための場所も必要。

今どきのキッチンに、それを扱える装備が備わっているのか。今の台所は「間違いの結晶」になってしまったんです。

泥つき野菜を洗う場所がない、魚1尾を下ろせる調理台がない、火にも力がない。ひどい場合は、火そのものがない！　そのせいで、人類が1万年かかって積み重ねてきたせっかくの調理の知恵と味を途切れさせてしまったのです。

今どきのキッチンは、住宅メーカーとキッチンセットメーカーがつくっている。生活者の立場にちゃんと立って食べる営みの場や水の場を考えるホントの設計者がイナイんです。近代日本型キッチンには、「台所は自然態に近い食材を駆使しておいしい料理をつくる場所」という考えが欠落していました。近代台所の設計思想の根底に、「家事は必要悪としての労働であり、極力家事労働を減らすべき」という欧米の婦人解放運動の見方があって、それが日本でオオマチガイを生み出していったのだと思うんです。

私は、洗濯や掃除、裁縫や炊事といった家事は、家族の心身の健康を守り、食卓を囲む楽しみを知らせ、経済的にも合理性をもたらす創造的な行為の体系だと思っていますから、けっして軽減すべき「労働」とは思いません。

生活の中心は食べ事にあり、台所は大切な「食べる営みの場所」、水まわりのカナメなんです。

そして、その大事な台所や水を活かす場をこの50年間、誰も真面目に設計してこなかった。それを取り戻すには、生活者が「食べることが生きること、水を活かすことが生きること」という食べ事や水仕事に対する態度をしっかり持って、望ましい住まいのあり方について、きちんと要求していくことですね。

そこに目を注いでいけば、住まい全体のあり方が妙な西洋かぶれを払拭した21世紀日本型、あるいは新和風型とでもいうべきものにきっと変わる。私はそう信じて、ずっと発言していきますよ。

昔の暮らしを知る歴史的建築物　江戸東京たてもの園

近代化以前の様式に添った住まいも、重要な歴史的建築物である。

昭和初期は住宅改善が盛んにいわれた時期。その中心は、台所だった。まず第一に流し。公団が実現した一体型のステンレス流し台が、なぜあれほどまでに評価されているか、今の私たちにとってなかなか理解しにくい。その背景には、土間に据えられた流しの前に簀の子を敷き、しゃがんで使う座り流し以来の、きつい家事労働の歴史がある。

座り流しは水の飛沫が飛び散って、特に冬場は寒さがこたえたと日本家具道具史研究家の小泉和子さんは『昭和 台所なつかし図鑑』（平凡社 1998）に書いている。当時の流し台は、木製かブリキを張ったもの。水がすぐに染みて、大変腐りやすかった。セメント製や人研ぎは丈夫だったが、陶磁器が当たると割れるため、簀の子を敷く。その簀の子がすぐにぬるぬるするし、やはり腐りやすかった。

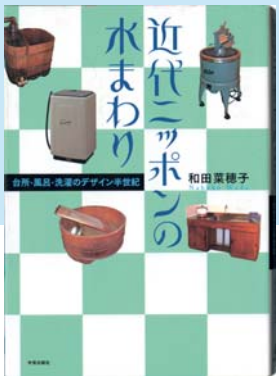
流しに次いで改良の対象とされたのは竈であった。昭和20年代後半から30年代にかけて、改良竈の普及が農村の生活改善運動として進められた。これは煙突などをつけて燃焼効率をよくしたもの。それ以前の竈は煙突がなく燻されるため、トラホームが多く発生した程だという。それでも「嫁や女は牛馬以下」とされていた農村では、改善運動は遅々として進まなかった。

戦後に台所改善運動が加速したのは、GHQの強い指導があったことと、一連の民主主義革命のお陰である。とはいうものの、歴史的資産としては改善された台所は不都合が多い。使い続けられるのが住まいだから、不便のある所は改築されてしまうのは当然なのだが、記録に残りにくい庶民の暮らしは時代考証がしにくく、復元も難しい。

江戸東京たてもの園は、そうした当時の暮らしをしのぶには、うってつけの所だ。約7haの園内には、現在、江戸時代から昭和初期までの27棟の復元建造物が建ち並んでいる。これらは文化的価値の高い歴史的建造物でありながら、現地保存が不可能な建物。移築し、復元・保存・展示することで、貴重な文化遺産として次代に継承することを目指している。

問い合わせ：0423-388-3300（代表）

上段左側は、江戸時代後期の住宅群の屋内外。右側は1925年（大正14）竣工の「田園調布の家（大川邸）」で、増築、改築をかさねながら1995年（平成5）まで現役で住み続けられていた、瀟洒な平屋住宅である。下段は左から、足立区千住元町にあった1929年（昭和4）の「子宝湯」の赤ちゃん用体重計、明治後期のものと推定される「万世橋交番」の流しとコンロ、昭和初期の荒物屋「丸二商店」と並ぶ、しもた屋。



水の文化書誌 22

《水まわり 盥（たらい）と桶のモダニズム》

古賀 邦雄

こが くにお

水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業
水資源開発公団
（現・独立行政法人水資源機構）に入社
30年間にわたり
水・河川・湖沼関係文献を収集
2001年退職し現在、日本河川開発調査会
筑後川水問題研究会に所属

2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設
URL：http://mymy.jp/koga/

日本が貧しかった１９５０年代、我が家の水まわりは、まさしく貧弱、非衛生、不便性そのものだった。水道は共同栓で外にあり、そこから汲んで土間の台所の甕に溜め、柄杓にすくい、流し台で料理に使った。ご飯は釜に薪で焚き、コークスで熾（おこ）した七輪で煮炊きを行なった。トイレは外にあり、汲み取り式で悪臭に悩まされた。また風呂は銭湯に通った。洗濯は盥に洗濯板、石鹸で衣類を洗った。勿論テレビもなくラジオが唯一の娯楽であった。今では想像もできない。

水は日常生活に欠かせない。生命の維持ばかりでなく安全上、衛生上、支障がないように住宅には必ず水まわりの施設が整っている。給排水設備、給湯設備、排水・通気設備、衛生器具設備、糞尿浄化槽設備、厨房設備、洗濯設備などである。具体的には台所、風呂、洗濯、トイレであり、その変遷を辿ることは水の文化そのものである。

榮森康治郎 著**『水と暮らしの文化史』**（ＴＯＴＯ出版　１９９４）には、江戸期における神田・玉川両上水道から明治期にコレラの発生に伴い近代水道の敷設、そして家庭での台所、風呂、便所、の移り変わりを追っている。

明治期台所は座って流し台を使い、じめじめして暗かった。それから箱流し台になり、大正期には明るいこと、涼しいこと、乾いていること、皿洗いは台所に直結していることの改善がなされ、立って料理をつくるようになってくる。昭和10年ごろ一部の家庭にはステンレス流し台が普及、昭和30年代公団住宅にはダイニングキッチンが導入され、プレス加工のステンレス流し台、昭和40年代システムキッチンとなり、洗うこと、調理すること、過熱すること、冷却すること、収納することの機能が一体化してくる。風呂については、次第に銭湯から家庭風呂に変わっていくが、鉄砲風呂、五右衛門風呂、長州風呂、ＦＲＰ（強化プラスチック）、昭和40年代にはホーロー、ステンレス、タイルの浴槽が登場する。

長い間、台所、浴室、洗濯は日常生活と密接にかかわっていながら、住宅空間の主要部分でなく、付属部分とみなされてきたという。**和田菜穂子** 著**『近代ニッポンの水まわり―台所・風呂・洗濯のデザイン半世紀』**（学芸出版社　２００８）は、ガス、電気、水道が一般的に普及していなかった大正期から昭和30年代高度経済成長期まで振り返り、水を用いる生活道具と生活空間に注目し、台所、風呂、洗濯を主題として取り上げ、その中でも特に水と接する部分であるシンク（水槽）の変遷を辿る。

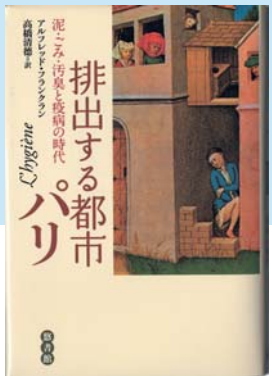
この書の内容は水まわり設備である「台所設備」、「風呂設備」、「洗濯設備」の歴史を道具論的に展開し、本論では「水まわり空間」、「水まわり設備」に関して論じる。その観点は

１　技術革新のプロセス：水まわりデザインの形、素材、技術の革新
２　空間構成の特徴：水まわり空間の変容
３　流通と消費のメカニズム

であり、水まわり設備の普及を多角的に捉え、そこから近代日本の生活を浮き彫りする。時代的には、大正デモクラシィー・台所座り式から立ち式への変化、関東大震災前後・風呂釜の発明（町工場の創意工夫）、第二次世界大戦を経て、戦後アメリカ文化の流入（進駐軍住宅の水まわり）、洗濯機の丸型から角型へのデザイン化、日本住宅公団による新しいライフスタイル・ダイニングキッチンの登場、高度成長期における洗濯機、冷蔵庫、テレビの量産化の半世紀を辿る。それは欧米から多大な影響を受け、住宅空間が近代化する過渡期にあたり、その後はライフスタイルが大きく変化していく。

この書で画期的な水まわりの変化について、３つほど挙げてみたい。

１　国家レベルで住宅政策が本格化するのは１９５５年（昭和30）の日本住宅公団の設立以降となる。食寝を分離し、本格的なダイニングキッチンとステンレス流し台の登場である。台所・食事室の台所空間にテーブルと椅子を備えた固定化であり、



今までの板の間の台所に卓袱台を置いた食事からの変化である。

2　また戦後進駐軍住宅における台所・浴室・洗濯機の登場に触発され、水まわりも技術とデザインの革新が行なわれた。例えば、洗濯機は撹拌式から噴流式に変わり、デザインも丸型から角型に変わった。

3　風呂釜、ステンレスの流し台、電気洗濯機の流通は、最初雑誌による通販、メーカー小売店、それからデパートによる高級品デモンストレーション、現在では秋葉原電気街、電気専門店の販売、月賦販売を可能にし、拡大する。さらに広告デザインをみてみると、「冷たい冬のお洗濯」、「女性を解放する洗濯機」、「スイッチ一つのお洗濯」、「洗濯しながら本がよめる」、「洗濯を楽しく、明るく!」のキャチフレーズを入れ、イメージキャラクターとして新珠三千代、八千草薫、高峰秀子、木暮実千代、若尾文子ら、女優を登場させて電気洗濯機の普及を図った。

電気洗濯機の価格変遷は、**森永卓郎** 監修『**明治／大正／昭和／平成／物価の文化史事典**』（展望社 2008）によると、昭和27年5月米軍から日本側に洗濯機100台の発注があり、日立が撹拌式角型洗濯機を納入、価格は5万3900円であった。大卒男性初任給1万900円のころである。

日常生活にかかわる水については、**紀谷文樹**ら著『**暮らしをささえる水**』（彰国社 1987）、同 編著『**建物をめぐる水の話**』（井上書院 1986）があり、料理と水、食器洗い、給水と給湯の流れ、水洗便器、配管と管材料などが記されている。**深井英一**、**高地進** 著『**建設設備の節水ガイド**』（理工図書 1995）は、新設や改修における節水機器の利用法、循環利用、排水再利用などを中心にまとめられており、一方、**泉忠之** 編著『**住まいの水まわり学入門**』（TOTO出版 1995）では、水まわりに関連して、住宅の構法や仕上げ、色彩計画、照明計画、水まわり機器、給排水設備を言及し、室内の利便性、快適性を追及する。

人は汗や糞尿を排泄しなければ生きていけない。フランス華の都パリでは、1000年間、市民は糞尿まみれの日常生活が続いたというから驚嘆する。**アルフレッド・フランクラン** 著『**排出する都市パリ―泥・ごみ・汚臭と疫病の時代**』（悠書館 2007）には、12世紀から18世紀にかけて人や動物による糞尿があふれ、悪臭と疫病が蔓延し、王たちがその対策に悪戦苦闘する、パリにおける状況を詳細に描く。

我が国では糞尿は農産物の肥料として取引対象となっていた。戦後化学肥料が主流となり、その後上、下水道システムの設置により水洗トイレが普及する。**前田裕子** 著『**水洗トイレの産業史―20世紀日本の見えざるイノベーション**』（名古屋大学出版会 2008）は、日本近代化における水洗トイレが、給排水システムに組み込まれる過程をトイレ産業にかかわる森村組、日本陶器、東洋陶器などメーカー側から追求する。面白いことは、陶器会社がその後水洗トイレ機器の生産に踏み出したことである。

水洗トイレはそれ自体偉大な3つのイノベーションを持っているという。

1　公衆衛生面で、都市の衛生状態を改善し人間の健康維持に寄与する。

2　清潔の面で、疫病の予防、悪臭や汚物の放置の改善。

3　心理的な面で、排泄行為への感覚を刷新し、排泄空間の快適さを生んだ。

前述の戦後占領軍の要求には、「600名の士官のため、浴室、及び便所の施設を有するホテル、また宿舎と」あり、水まわり設備に対するもので、このとき東陶が9割を受注したという。

現在、水洗トイレのシステムが確立されなかったら、14世紀ごろの糞尿まみれのパリのような状況が続いたことであろう。このような意味では近代的な水洗トイレのイノベーションは、衛生や清潔への希求は勿論のこと、快適空間へ移りつつあるという。なお、トイレに関しては、あくば（灰汁場・芥場）、石雪隠、陰所など多数収めた**森田英樹** 著『**便所異名集覧**』（下水文化研究会 2002）、それに雨水をトイレの水に使うことを提言する**湯川清貴** 著『**雨水利用システムの製作**』（パワー社 2006）を挙げる。

最近、雨水を捉えなおそうという考え方が顕著になってきた。雨を溜めれば水資源、捨てれば勿体ない。雨水を溜め、家庭菜園、洗車、防火水槽などに使い、残りは地下に浸透させる。また、住宅、集合住宅、ビルなどは新築、増改築を施し、コンクリートの雨水貯留槽を地下に埋設し、雨樋から水を集め、雨水貯留槽に溜め、それをトイレの洗浄水、散水、洗車に使う。このことは**日本建築学会** 編『**雨の建築学**』（北斗出版 2000）、同 編『**暮らしに活かす雨の建築術**』（北斗出版 2005）に、図でわかりやすく記されている。

急速な都市化で真間川などの水害に悩まされた千葉県市川市は、新住宅を建築する場合は、雨水利用施設の設置を条例化している。この雨水施設は、中水道を利用する新しい水まわりの役割を果しているといえる。

以上、水まわりについて概観してきたが、前書『近代ニッポンの水まわり』では、次のように結論づける。「近代化以前の水まわりの道具として、盥と桶があり、自由に時間的に、空間的に、地域的に移動、利用できた。…日本独特の水まわり空間が確立するのは1950年代以降であった。欧米のモダニズムの影響を受け、そこから派生した日本独特の盥と桶のモダニズム化があることを突きつめた」。そのことは「女性を解放する電気洗濯機」というキャチフレーズにみられるように、水まわりの近代化、即ち「盥と桶のモダニズム化」は、住宅、生活改善に伴う衛生的、利便性、快適性を希求した結果、女性（男性も）が解放されたと同時に民主化をもたらした一面を担ったといえるのではなかろうか。

暮らし方の変貌

バブル時代に隆盛を極めたスポーツクラブの中には、減った会員の穴埋めに、安価な午前中限定会員のサービスを提供しているところがある。利用者は主に高齢者。軽い運動をし、顔見知りと話ができると好評だ。

そこに思わぬ副産物があった。広々とした風呂を利用できるから、自宅の浴室を何年も使っていない、というのである。

考えてみたら、銭湯復活のある種のあり方ともいえる。エネルギーの節約にもなるし、広くて快適だし、何より掃除をしなくていいというのが人気の要因だ。

経済成長期には「内風呂がない」というのは、貧しさの象徴のようで、言い出し難い雰囲気まであったことを思えば、隔世の感がある。

同様な現象は、台所にも起きている。

持ち帰りができる中食（なかしょく）や外食産業を使ったほうが効率がよい単身者、夫婦だけの少人数世帯が増えているのだ。自分で調理すると、使いきれなくて材料を無駄にしてしまう少人数世帯や、仕事が忙しくて時間的に余裕がない家庭では、加工食や外食をうまく利用しないと生活が回っていかない状況にある。

東南アジア、特にタイでは、いつごろからの習慣かは知らないが、安価で種類も豊富な屋台を利用することが当たり前になっている。食事は家でお母さん（お父さん）がつくって家族みんなで食べるもの、という風習が、既になくなっているのである。

原始時代のルーツ

原始時代、「家」（棲み家）は水の近くに炉をつくった所から始まる。炉に屋根を掛けたものが「家」。「家」は、「家族」という最小単位の社会だった。

台所以外の水の場は、風呂は沐浴か行水、トイレも屋外。もちろん、トイレは穴を掘った肥溜め式だったから水とは無縁であった。

ところが今では、台所も風呂もアウトソーシングできる時代になっている。絶対に、外に出せないのがトイレで、現代日本では水洗であることが必須だ。原始時代とは逆になっているのだ。

水洗トイレがいかに重要であるかは、阪神淡路大震災のときの経験からも明白である。被災者は食事は炊き出し、風呂や洗濯は取り敢えず我慢したが、水洗トイレが使えないことで、日々非常な困難を強いられたからである。清潔なトイレが人間の生活の質に深くかかわっていることが、痛感された経験である。

「水にかかわる生活の術（すべ）」は、長らく原始時代のルーツに添って続いてきた。ところが、竈がガスに置き換わり、加圧水道が蛇口の上にくることで、一気に変貌を遂げたのである。

不勉強の故だが、加圧水道が敷設されて、水消費が一気に変わったように誤解していた。しかし実際には、当初、水道の蛇口は井戸のあった場所もしくは水甕の上に設けられ、いったん溜めて使われていた、と山口昌伴さんに教えられた。

経済成長期に生まれた人間は、原始時代のことは習っていても、ごく近い昔のことは何も知らないということだ。このことは、水の文化の継承に不安を覚えることにもなった。

LDKの誕生

激変した「水にかかわる生活の術（すべ）」を、もう一段階押し進めた出来事がある。日本住宅公団（現・独立行政法人都市再生機構）によって開発されたDKの誕生である。これはその後リビングルームを巻き込んで、LDKという不動のスタイルを生み出していく。

都市の住宅難に対応するために大量につくられた集合住宅は、非常に狭かったため、空間を最大限効率よく利用する間取りとして、考案されたものである。詳細は、藤森照信さんと北川圭子さんのページを参照してほしいが、当時の日本の住宅事情、家庭婦人の置かれた状況、寒く、汚く、暗い台所環境を改善する画期的な発明だったのである。

その象徴となる一体成型ステンレス流し台は一世を風靡するが、一体成型ステンレス流し台にしても、長屋を脱した集合住宅にしても、それは「家」と「水にかかわる生活の術（すべ）」を工業化することと同意義だった。均質な製品を大量生産することで、一般市民に高品質な住宅を供給しよう、という意気に燃えて開発された製品であったことには間違いがない。

こうして「水にかかわる生活の術（すべ）」は、「家」と運命共同体となって、「製品」化していった。これは、わずか50年程の間に起こった現象に過ぎないが、あまりに偉大な発明であったため、すべてを巻き込みつつ、それ以前のスタイルをほぼ席巻してしまったのである。

技術的制約はない

多層階の集合住宅の性質上、これまでは給排水管が縦管として、上階から下階まで1カ所に通されていた。そのことが「水にかかわる生活の術（すべ）」を配置上まとめることにつながって、「水まわり」という言葉が現れた。本来、多様な機能や用途がある別個の術（すべ）を、乱暴にまとめて「水まわり」として

しまったのだ。

しかも、コンクリートの駆体と給排水管は耐用年数にズレがあったため、駆体はまだ保つのに給排水管が傷んで水漏れがしたり、駆体内部に組み入れて施工していたために修繕が利かず取り壊さざるを得なくなったり、という不都合が生じた。

日本住宅公団では、こうした不都合に随時対応し、スケルトン&インフィル工法という優れた方式を開発するだけでなく、給排水管の高耐用化、修繕のし易さを実現。1カ所に通されていた縦管を共有スペースに持っていき、屋内には水平方向に配管することで、「水にかかわる生活の術（すべ）」を自由に配置できるようにした。

従来の日本家屋で重視された風水を中心とする配置の制約も、人工的なエネルギーを使うことで解決されるし、床の間を背にした家父長の権限も民主主義の名の下に消え去っている。

効率化と建物としての必然性、及び様式がすべて消滅した今、「水まわり」は解放され、再び自由な「水にかかわる生活の術（すべ）」として生まれ変われる機会が与えられた。

いわば「水にかかわる生活の術（すべ）」の復権である。

100の家族に、100の水まわり

ところが、ことはそれほど簡単ではない。いったん途切れてしまった「水にかかわる生活の術（すべ）」は継承されていないので、自分らしく何でもできるといわれても、要望がないのだから現状に不都合も感じない。だから、何をどうしていいのかわからない。せっかく与えられた復権の切り札を、どう使っていいかわからない。

100の家族に100の水まわりが実現できるのに、実現したいスタイルが提示できないのは勿体ない。しかも、「家」で暮らす肝心の「家族」がバラバラだ。「水にかかわる生活の術（すべ）」どころではないのが実状である。

今までは、家と同様、家族にもモデルがあって、黙っていてもそれに従いさえすれば生きていけた。それが、自由になったばかりに「選択」することが求められている。

選択して、創造して、答えを出す。ある意味、面倒で厳しいことではあるが、労働以外に使う時間を大切にするためには、「生活の術（すべ）」を見直すことが必要である。

いったん集約された「水まわり」が解放されて自由になったことをチャンスと捉え、自分はどう暮らしたいかを考えてみよう。自分ならではのオリジナルのスタイルを追求することは、案外楽しめるはずである。

家族と囲む食卓、リフレッシュのための風呂、清潔なトイレというように、すべての「水にかかわる生活の術（すべ）」は、豊かな暮らしに欠かせない重要なアイテムだからだ。

様式から解放された自由な水まわり　前川國男自邸

近代化以前の住まいは、時代性や格式といった様式に支配されていた。農民の家は農家らしくとか、風水による間取りの決定といった具合に。それは、用途に即していたし、自然環境を考慮したら当然の成り行きだったので、理にかなったことだった。

近代住宅は、そうした支配から住まいを解放しようとしたもの。水まわりにも、創意工夫が満ちているように思える。LDKの登場で画一化してしまった現在の住宅から見ると、なんとも自由で、「設計の思想」が迫ってくるのである。

江戸東京たてもの園に移築・保存されている前川國男自邸は、まさにその代表だ。1942年（昭和16）、建築資材と延べ床面積の制限（「木造建物建築統制規制」1939年）という厳しい条件下で竣工した。

ごく小さな空間にもかかわらず、貧乏臭いところがなく実に豊かな空間が生み出されているから不思議だ。最小限ながら、機能的でゆとりさえ感じさせる設計には、感心させられる。玄関を入ると左手にリビング、正面に廊下があって、廊下の右手に女中部屋とトイレ、突き当たりが書斎である。リビングは吹き抜けで家の中央を占める。書斎などとは線対称に台所、浴室（トイレ）、寝室という配置。

実は銀座にあった事務所が1945年（昭和20）に空襲で焼失、以来1954年（昭和29）四谷にミドビルが完成するまで、美代夫人との生活と事務所機能が同居。浴室はトイレと一体型で、寝室の続き間のように考えられており、ヨーロッパでの生活が反映されている。台所、浴室（トイレ）、寝室は、完全なプライベート空間で、リビングと行き来する扉もごく小さなものとしてつくられている。書斎には、なぜか小さな洗面台がついているが、それはプライベート空間に他人を入れないで済ませるためであった。前川邸には、LDKでは表現できない暮らしのスタイルがあったのだ。

ちなみにこの家は、一時期完全に失われたと思われていた。ご遺族である甥御さんに藤森照信さんが尋ねたところ、1973年（昭和48）に解体されて前川の父の軽井沢の別荘に保存されていることがわかった。壊さなくてはいけない事情がありながら、価値のある建物だから、完全に廃棄するわけにはいかなかったのだという。藤森さんの奔走のおかげで、江戸東京たてもの園で再び日の目を見ることができた。今も、建築を志す若者に、大きな示唆を与え続けている。

ミツカン水の文化交流フォーラム2008

「共生とは何か」～水立国日本の理念～

2008年11月14日 開催

「共生」は疑いのない大きな理念として語られています。しかし、そこで考えることをやめてしまうわけにはいきません。「共に水を守っていこう」という思想の背景には、多様な水利用の現場で「それぞれの共生の理念」があるはずです。私たちはそのような理念をどうすればつくれるのか。さらに、日本は水との共生のためにどのような貢献できるのか。こうした意図の下、報告とディスカッションを行ないました。

【問題提起】

「水循環における共生」～これからが正念場？！～

沖 大幹　東京大学生産技術研究所教授

【報告】

「川は何と共生してきたのか」

島谷幸宏　九州大学大学院工学研究科教授

「自然と共生するために必要な社会の論理と倫理」

倉阪秀史　千葉大学法経学部総合政策学科教授

「水の越境紛争から共生のメカニズムを探る」

中山幹康　東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

【パネルディスカッション】

「水との共生のために日本が貢献できること」

コーディネーター：沖 大幹　登壇者：上記報告者

問題提起・報告

問題提起の口火を切ったのは沖大幹さん。我々が共生というとき、それは、自然の恵みを人間が一方通行で受け続けたいと思っていることではないか。逆に人間が自然に貢献するというのは有り得ないのではないか。そうした前提で、多くの人が「都市にも、豊かな水辺環境がほしい」と思う一方、治水も考えねばならず、自然と人工物との関係も考えていかねばならない。これが共生の問題なのではないかと指摘した。

河川生態工学者として全国の水辺を歩いている島谷幸宏さんは、水田を例に、水害と稲作という、リスクと恵みのバランスをどうとるのかが問題という。そして「アトム型国家」「トトロ型国家」という言葉で、若い人たちが自然再生が重要な鍵であることに気づいていることを指摘し、豊富な現場写真をもとに、自然のコモンズ管理も含めて解説した。

倉阪秀史さんはエコロジカル経済学の考え方を説明し、少ない環境負荷でより多くの経済的付加価値を生み出す経済発展が選びとられるように経済のルールを変えていかなくてはならないという。それは脱物質化、脱有害物質化、脱炭素化となるが、これを導く政策としては、無駄を省くこと、製品の長寿命化、小水力発電のような分散的資源のローカル活用が重要であると述べた。

国際河川紛争を研究している中山幹康さんは、国際流域が世界の半分を占めていると指摘し、国家間での水紛争、水折衝のケースをいくつか紹介した。そしてナイル川、ヨルダン川、チグリス・ユーフラテス川のような乾燥地の場合は、リアリスティックなゲームが通用するが、モンスーンアジアのメコン川やガンジス川などでは渇水・洪水問題が加わるために、異なる展開を示すことがあることに言及。日本はそういう領域で世界に貢献できるのではないかと指摘した。

ディスカッション

コーディネーターは沖大幹さん。ともすると拡散しやすい「共生」というテーマについて、討議を行なった。詳細については、当センターホームページでご覧いただくとして、最後に沖さんのまとめの言葉を紹介しておこう。

「人の幸せのために、心豊かに自然を感じられるようにする。それは我々人類のためにもなりますが、そのこと自体が自然と共生するという意味だ。」

アンケートに寄せられたコメント

◆討論は、先生方の頭の中がのぞけたようで、おもしろかったです。水と共生、人と人との共生、経済と水との共生など、いろいろなテーマがあって、新しい視点をもらいました。

◆国際河川の話を聞いて、「日本は島国だから」という考え方から変わるときがきたようです。

◆基本的に共生はありえないと思う。4名の分野・考え方に違いがあり、面白い話が聞けた。

◆水との共生を考えるとき、日本の持つ技術、文化の役割を認識した。

■水の文化32号予告

特集「治水」（仮）

川の歴史の半分は
「治水」の歴史と呼べるかもしれません。
現在の治水、治水家の果たした役割、治水の遺産。
治水の文化は
意外な多様性に満ちています。

水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合せ欄をご利用ください

http://www.mizu.gr.jp/

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。
すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク　春の登場者

当センターホームページ・水の文化「人」ネットワークコーナー。
以下の方をアップロードする予定です。

中川 功　拓殖大学政経学部教授

編集後記

◆昔の暮らしの「水」は屋外で、家の中で水が使えるようになったことは、劇的な環境変化であったはずだ。快適なあまり水まわりの技術はどんどん高度化したのだが、暮らしのデザインは忘れられがちだ。水まわりの自由度がもっと認知されれば、新しい暮らしのデザインも生まれるかも知れない。（新）

◆幅30㎝の流し台にコンロは一口。友人の所のキッチンはそんな感じらしい。それよりはマシだが、うちも似たようなもの。料理を作る気にならないのはキッチンのせい…というのは言い訳か。理想の生活から、今の間取りは微妙にズレている。家を造る・部屋を探す時には、そこでどう暮らしたいか？　という視点が大切だと改めて思った。（百）

◆子供の頃の築30年の家の記憶が甦った。冬の湯沸器のお湯のありがたかったこと！お風呂は広く、大きな窓から庭が見えた。水まわりのこだわりがあるとすれば窓付きのお風呂。今風に言うならビューバスか。キッチンより風呂。オヤジ現象もここまで来たか。（ゆ）

◆私の水まわりは「空白の日常」だ。何も不満がない。災害に遭遇したり、身体が不自由になったり、水道のない所で自然を相手に食べていかなくてはならないとき。そのとき、真剣に水回りを考えるんだろうな。（中）

◆海外では、高級ホテルであっても、トイレ・バス・洗面所が一体となった“3点ユニット”が珍しくないらしいが、多くの日本人にとって“バス・トイレ別”は譲れない間取り条件である。我々の水まわりへのこだわり、侮るなかれ。（緒）

◆普段定められた条件で何気なく使っている水まわり。考えてみれば他の居住空間は家具などで後々でもスタイルを決められる。むしろそれらはアバウトでも、一度決めたら容易に変更できない水まわりこそ、真剣に考えこだわってみてもいいのではないだろうか。（力）

◆「生きる工夫」というフレーズが、我が家で流行っている。それを具現化して水まわりに落とし込んだのが、我が家流の水まわりだ。流し台はタイルを貼った手づくりの特大サイズ。もちろん、床は土間だ。沢庵用の大根は川で、雑巾バケツは外川端で洗うから、屋外にも進出中である。（賀）

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化
第31号

ホームページアドレス
http: //www.mizu.gr.jp/

※ 禁無断転載複写

発行日　2009年（平成21年）2月
企画協力　沖 大幹　東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄　水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信　法政大学教授
鳥越皓之　早稲田大学教授
編集制作　新美敏之　百瀬友美　小林夕夏　中庭光彦
緒方大輔　賀川一枝　中野公力　賀川督明
発行　ミツカン水の文化センター
〒104 - 0033　東京都中央区新川 1ー22ー15 茅場町中埜ビル9F
株式会社ミツカングループ本社　社会・文化活動センター内
Tel. 03 (3555) 2607　Fax. 03 (3297) 8578
お問い合わせ　ミツカン水の文化センター　事務局
〒104-0043　東京都中央区湊1ー13ー2　アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03 (3552) 7504　Fax. 03 (3552) 7506

ミツカン 水の文化センター

表紙上：輝くステンレス流し台は、漏ない、腐らない、染みがつかない、陶器を落としても割れない、大量生産が利く…と、いいことづくめ。でも、洋食屋のステンレスの皿と同じで、どこか味気ない。

表紙下：庭がある人には、外流しをお勧めしたい。泥付き野菜や糠、雑巾などは、外流しで洗って地下浸透に。現代人には、座り式より立ち式のほうが使い勝手がいい。

裏表紙上：「いただきます」。口から入る食物は、身体だけでなく、心を育ててくれる大切な糧だ。

裏表紙下左：汲んで、溜めて使えば、ご覧の通りに排水は「地中浸透」で充分。土に戻らないものを使わわなかったから、という理由も大きいのだが、ジャージャー流しっぱなしにはできないのだから当然の成り行きだ。（撮影協力／江戸東京たてもの園）

裏表紙下中：流しに続き、竈も床の上に進出してきた。板の間に上がった竈の珍しい例。（撮影協力／江戸東京たてもの園）

裏表紙下右：現在、人糞は肥料としての使用が認められない。薬をはじめ、何を摂取しているか不明瞭だからだ。肥料にして悪いものは、身体にも良いとは思えない。水まわりの復権のためには、考えるべき事柄がたくさんある。